
~ 武偵高 ~ 紅い目

大大日本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武偵高〜紅い目

【Nコード】

N5931T

【作者名】

大大日本

【あらすじ】

平凡に暮らしていたはずだった。武偵高に入学してから1年。ある事件がきっかけで、刀間は覚醒していく。

原作改造小説です

序章 1日(前書き)

初の小説です・ちよつと主人公無口かも。

序章 1日

高校2年

平凡だった僕の人生は
この高校に入ってから、かなり変わった。

「武偵高」それは尋常じゃない学校で有名だった。

まあ、尋常じゃないこそ人生が変わる
と、期待していた俺が要ることは事実なのだが。

ちなみに僕の名前は「刀間来示」
武偵高在校の2年生だ。

中学生のころは、特に目立ったことはなく
ただ「平凡」と生きてきた人間だ、
ただ1つ除いて。

僕は凶暴性を持つ「もう一つの人格」がある

それはかなり珍しい人格であり、
僕から俺になり。

目が赤く、充血する。
そして力が馬鹿げたほど強くなる。
病院送りにした友達も少くない。

そのため中学校の内心点も悪く
僕みたいな生徒がいる、

と言つ武偵高に進学した

（1日目）朝7時

ん、ん

眠い。

カーテンからの日差しで、目が覚めた。

ああ。

そうだった。

ここは武偵高の寮だった。

欠伸をしてベットから起き上がる。

起きますか。

武偵高は防弾制服の着用、拳銃の帯銃、刀剣の装備が、義務付けられている。

帯銃する拳銃はN i g h t H a w k . 5 0 C デザートイーグル
この銃は装弾が少ないが、威力が強い。
ちなみに弾丸は . 5 0 . A E を使用する。

刀剣は、比較的使いやすいバタフライナイフを装備。

7時50分、寮を出発する

自転車をこいでいると

見えてきたのが探偵科、強襲科、通信科、狙撃科、鑑識科の棟が見えてきた。

そのまんまだ。

自転車置き場に自転車を置き、正門をくぐった。

ここまでは普通だった。いつもの始業式前だった。

狂い始めたのは廊下への道だった。

そこには狼3体がいたのだ。

牙を剥き出しにして。

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい。

何で獣が3体もいるんだ！

しかも殺気感じますよ。

あ、ああ。

こっち来たアアアアアア。。。。

もう一つ問題発生。

心臓の鼓動が早くなる。

頭が朦朧としてくる。

腕が痙攣する。

やっちまった。

本能のままにナイフを抜き出す。

あー。アホか

俺。

きつと、俺なら殺れるんだろうけど。

スパッ

白い毛が散る。

タツ、クルツ、グサ、シャツ、タツ、クルツ、グサ。
ガッ、ドツ、ズツ、グシャ。

そう、殺ってしまった。

バタフライナイフのみで2mはある狼3体を。

無残にも今は肉の塊と赤々と染まった血しか残ってない。

「ふーい。」

僕がため息。

と同時に、ビクウウ。

あれっ

気づけばそこに1人の女子生徒が居た。

確か名前は「樋田宇美」

.....

沈黙。

「あのお」と樋田。「殺しちゃったんですか？」

「見りゃあ分かんたる」

「.....報告はシナインデスカ」(泣)

「ああ。そうだった。」

「.....」バタツ

音どつり樋田が失神した。

狼の死体があまりにもショックだったんだろ。

「おーい」

ぺしぺし。

頬を叩く。

ぺしぺし。

ぺしぺしぺしぺし。

ぺしぺしぺしぺしぺしぺし。

.....

「ハウアツツ。」

起きた。

「ウオツツ。」

「えつ。キャツ！」

悲鳴の原因は顔が近かったがためだ。

ブアアアア。

樋田が赤くなつた。

「えうあ。カナえう。ううう」

樋田。故障。

「おーい。俺は報告しにいつから？」

「……えつ。何を！！」

樋田勘違い。

「狼だよ。。」

「ハツ！は、はい。だいじょおうです！」

どこが大丈夫なんだよ。

てか、樋田ってこんなに天然だったっけか？

まあいい

今は、先生に報告だ。

テンパール樋田は置いてって、体育間に行く。

報告した後、狼の死体は処理され。

進入航路は探偵科が搜索始めた。

そして俺と樋田は尋問科で事情聴取が行われた。

その日から僕の人生は少しずつ変わり始めた。

序章 1日(後書き)

どうでしたか？ちょっと張り切りすぎましたw連載しますんで、良かったら読んでみて下さい。

1章 大騒動（前書き）

武偵高についてはW i kを参照ください；

「刀間来示」武偵高2年。凶暴性を持つ人格を持っている。案外優しい。

拳銃はD Eを使う。ちなみに、凶暴性の人格は2時間ほど続く。

1章 大騒動

それにしても疲れた。

今日は2時間、尋問科で事情聴取を受け、終わった後にはクラスメイトが流れ込み、狼騒動について聞いてくる。

「おい、刀間！狼についてもっと詳しく！」

「……………」

「刀間君。どうやって仕留めたの？」

「……………」

「刀間！」

「刀間君！」

だああ。うっせえ。とにかく平然を保ち。マスコミ（クラスメイト）から逃れる。

マスコミから逃げて来た僕は、屋上に向かう。

そこにはすでに先客が居た。

樋田宇美がいた。

まだこっちには気づいてないみたいだ。

「おつす。」

とにかく声をかけてみる。

さっきの事も謝りたかったし。

「えっ。キヤツ。」

樋田が飛び上がる。

飛び上がったことはスルーしておき

「さっきは巻き込んで悪かったな。」

謝っておく。

「え、あのお、何が？」

「狼の件だよ。」

気づけよ。

「あ、いや、あれはちょっとびっくりしました。角を曲がったら闘つてたんで。」

「んー。なんか怖くなかった？そうだったら、謝るけど？」
なんか日本語おかしいような気がするけど。

「あ、なんか、あのお、とても参考になりました！」
あ？

「私、Dランクなんで、と、とても参考になりました！」

なんか意味が分からなくなってきた。

何故、謝りに来たのに感謝されなきゃいけないんだ？

「……まあ。元気そうで良かったわ。」

「はっ、はい！おかげさまで！」

何で、おかげさま何だよ。

てか、さつきから樋田の顔が赤くなってるぞ。

風邪でもひいたのかな？

「お前、風邪引いたのか？さつきから、顔赤いぞ？」

と言つて、樋田の額に手を当てる。

「は、はううう。」

？変な声を出して、ますます顔が赤くなつたぞ。

「おい、大丈夫か？かなり熱いぞ。」

「は、はうあ。だ、大丈夫、で、です。」

どこが大丈夫なんだ。

春なのに、湯気でてるし。

「お、おい。ほんとに大丈夫か？保健室いくか？」

「だ、だ、だ、大丈夫です！」

だから、どこが。

「あのお。一つ聞いてもらっていいですか？」

「なんだ？」

「わ、私のパートナーになってください！」

ありえん。

1章 大騒動（後書き）

一応ヒロイン出してみました。ほかのヒロインも出す予定なのです。
「樋田宇美」 武偵高2年 急襲科Dランク 頑張り屋 刀間にパー
トナー申し込みをする。ちなみに武器はワルサーPPS

2章 相方？（前書き）

登場人物の読み方を書き忘れてました。すみません；

「刀間来示」（かたなま らいじ）

「樋田宇美」（ひだ うみ）

2章 相方？

結局、樋田宇美の無理やりなパートナー申し込みには、同意してしまっただ。

コレも僕のマイナスなところなのか？

と、樋田に解放され家路を自転車で帰っていた。

ちなみに、今は夕方。

後ろには樋田が乗っている。

(勘弁してくれよ。)

パートナーだからって、寮までついてこなくたっていいだろ。

ちなみに樋田はSランクに憧れており、僕(俺のおかげでSランクになれた)に申し込みしたと、言うことだ。

「はあー。僕がSランクだからって、そう簡単にはなれないぞ。後ろの樋田に話しかける。」

「はい！覚悟の上で申し込みました！」

威勢はいいけどこっちはいい迷惑なんだよな。とか何とかぼやいてると、寮の前に着いた。

「こ、ここが、カーく、か、刀間君の寮。」

「まあ。入れ。」

「は、はい!」

ここは男子寮で2人部屋。

同室だったやつは、クエスト中に爆発に巻き込まれ戦死した。

ソファにぎこちなく座る樋田に、この部屋のカードキーを渡す。

「ほら、パートナーさん。」

「は、はい!」

樋田はカードキーをキャッチする。

パートナーに部屋の鍵を渡すのは、ここでは普通なのだ。
普通じゃなくてほしいんだけど。

そういえば狼騒動以外にもう一つ、事件があったのだ。

「武偵殺し」による

「チャリジャック」だ。

このごろ頻繁に起きてる、連続殺人事件

その被害者の一人、この部屋の隣の「遠山キンジ」

こいつは俺の仲がいい友達で、やつには僕と似た特殊体質を持っている。

そのジャックは、キンジが、神崎・Hなんとかさんに助けられたらしい。

「あのお?」

「ん?ああ。何?」

「私の寮のカードキーはいいんですか？」

「ああ、平気だよ。行くこともないだろうし。」

「そうですか？一応もつといたほうが」

「ああー！いいからいいから。カードキーはほんとにいいからー！」

「そうですか？」

「うん。いいから。」

もらってたまるか！俺のカードキーを渡したことがマスコミに知れたら……。

「でも、カーく、か、刀間君の部屋って落ち着くね！これからも部屋寄っていいですか？」

「別に構わないけど？」
危険だが

樋田が赤くなり

「ありがとうございます！！」
と、飛び上がって喜んだ。

その後、今後のスケジュールの確認をした後、樋田を寮にまで送った。

夕飯を済ませ、銃の点検をしていると、

ピンポンとチャイムが鳴った。

(誰だこんな時間に)

と、思いつつ、ドアをあけると「遠山キンジ」がいた。

「どうした？」

「寮を追い出された(泣)」

「何でだよ。お前も一人だろ。」

「アリアに追い出された。」

アリア？ああ神崎Hなんとかさんが

「なんでお前の部屋なのに出されるんだ？」

「それはこっちが聞きたい(泣)」

きつと苛められたんだろう。そんな可哀想なキンジを、部屋に入れる。

適当に座らせる。

「で、何で、神崎さんがお前の寮に？」

「それはいきなり部屋に勝手に入られ、いきなり、ドレイになりなさい。と言われて最終的には

出てけと言われて追い出された。」

なんか、アニメみたいだな。俺と反対のことされてるし。

「お前も情けないなあ。女に負けるって（笑）」

「仕方ないだろ。それより食うもんじゃないか？ハンバーグ弁当だけじゃ足りなくて」

「ほら、そこに、もまんあるだろ。それ食え。」

「もまん！？」

松本屋のもまんに悲鳴を上げた。アホかこいつは。

キンジはもまんを食い終わった後、僕と雑談し、寮に帰った。

「僕もそろそろ寝るか。」

こうしてドタバタな1日がやっと終わった。

2章 相方？（後書き）

3章目いかがでしたか？この章でキンジ、アリア登場です。

こんな感じのことが進んでいきます。

3章 射撃レッスン（前書き）

戦闘シーン少ないですかね？
感想等受け付けてます。

3章 射撃レッスン

（2日目）

ん、ん

眠い。

カーテンの日差しで目が覚めた。

なんか昨日と同じこと言ってるような気がしたんだけど。ふと、時計に目をやると7時50分を指していた。

「あゝ。間にあわねえ。」

仕方ない、1時間目はふけるか。

そうして、少し遅れて教室に入ったらいきなりマスコミ（クラスメイト）に囲まれた。

第一声は「鈍亮二」（あなた りょうじ）の

「来示ー、おまえパートナーできたんだってなー。」

「なぜ、お前が知ってた!?」

「ノンノン、俺に届かない情報なんてないんだよ。」

今度は女子が

「その子、樋田ちゃんでしょお？樋田ちゃん可愛いよねえー？」

「何で樋田なんだ来示？まあ可愛いけど。お前の趣味かあ？」

「可愛いからって手え出しちゃだめだからな。」

「だぁー！お前ら、うるせええええええ！」

「おお、顔が赤いぞ来示！お前にも春が来たかあ。」

もう、だめだ椅子に座り頭を抱え、耳を塞ぐ。

はやし立てられるとは予想していたものの、こんなに早く広がるとはおもってなかった。

それからマスコミ達の攻撃を受ける僕だった。

放課後、

パアアン パアアン

今は樋田と精密射撃の練習中だ。

樋田の射撃のセンスはまあまあ良いほうで、梓の中に銃弾を残せている。

「うーん。もう少しだな。」

「真ん中に当たりません！！！！！！！」

「大声出すな！」

「すみません・・・」

「ちょっと、どけ。俺が撃つ。」

「え、やったー！」

樋田、満面の笑み

（や、やべえ、可愛いかも）

樋田の笑みはかなり可愛かった。
と、同時に心臓がバクン！

（あつ！やっちゃまった！）

頭が朦朧としてき
腕が痙攣。

俺はDEで中心を狙い、撃つ
ドン！

ドン！

ドン！

全て真ん中にヒット

後ろで樋田が

「おおー。さすがです。」
と、拍手している。

「よし、樋田やってみる。」

「はい。」

と言ってワルサーPPSを構える。

その手に俺の手を重ねる

「ッ！」

樋田赤面。

「ほら銃身をまっすぐにしてしっかり立つ！」

「ハ、ハイ！」

「中心を捕らえたら撃つ！」

「ハ、ハイ！」

ドスッ

「あ、ああ！」

弾は中心を捕らえていた

「やったな、樋田」

「ハ、ハイ！カー君のおかげです！」
？

いまカー君って言ったよな？

「？。あ、カー君って言っちゃった!!」

「……………」

「すみません！すみません！空想の中で言っていた呼び名を、現実で言っちゃいました！スイマセン、スイマセン、えぐッ、えぐッ。」
泣き始めやがった。

「…………。別にいいよ。その言い方が言いやすいなら。」

あ、俺の馬鹿。俺だからってキザすぎるよおおおお!!

「ほんとですか！カー君！」

「…………。アア。」

「じゃ、じゃあ、だ、だ、抱きついてい、いいですか？」

「あ、それはだめだ！」

あっ、危ない。アアって言おうとしちまった。

シユン。

と、樋田がうなだれる。

てか、なんで落ち込むんだ？

「ほら、射撃の練習、樋田！」

「？。あっ、はい！」

その後、その光景を観察されていたとは知らずに俺と樋田はそれぞれ
の寮に帰った。

3章 射撃レッスン（後書き）

メインヒロインは榎田にしたいとおもいます。
感想等受け付けてます。

4章 戦闘開始？（前書き）

アリア登場です。樋田と白雪のキャラがかぶってるような気がするんですけど。

気のせいですよね？

4章 戦闘開始？

（3日目）

今日は何も起きずに学校まで通学できた。

（今日は何も起きないのかな？）

そう思った僕が馬鹿だった。

教室で鈍と、雑談をしていると、キンジに呼び出された。

「なんだよ、キンジイ。」

「ああ。わりいな。ちょっと話があるんだ。」

「？。意味分からねえよ。」

キンジに言われるがまま体育館まで連れてこられた。

「たかう。いつたいなんだよ。」

「まあ、あいつの話聞いてやれ。」

キンジが見た先に、ピンクのツインテールのちっちな女子が座っていた。

「あんたが刀間来示？」

「おまえこそ誰だよ？」

「あれ、キンジから聞いてないの？」

「あああ？キンジこいつ誰？」

「ほら、前に言った、神崎Hアリアだよ。」

「ああ、お前が頭上がらなかった奴か。それで何の用だ。」

「私のドレイにふさわしいか見てみたかったの。」

「あああ？ドレイ？いきなり何を言い出すんだこいつは。」

「意味が分からん。」

「あー、もうあんた馬鹿キンジと同じような奴ね。簡単に言えば私と闘ってくれない？ってこと。」

「ありえんだろコイツ。」

「キンジ。どうゆう事だ？」

「俺も良く分からん。とにかく、闘ればいいんだろ。」

「僕はその根拠が分からん。」

「だから、闘ってみて奴で言うドレイかなんかにふさわしいか判断

すんだろ。」

「よく分かんが闘ればいいんだな？」

「そう言う事だ。」

「作戦会議は終わった？」

「作戦会議も何もお前をつぶせばいいんだろ？」

「まあ。そう言うことね。」

「んでアリア、俺と刀間でお前を闘っていいんだな？」

「いいわよ。馬鹿キンジが2匹でも勝てるしね。」

なんか分からないがこの勝負勝った。

俺とキンジが手を組んだら *catepillar* なのだ

「ルールは手錠をどちらかが掛けられたら勝負は決定。こつげきは、何でもしていい。いい？」

「了解した。よく分かんが、本気でやらせてもらっぞ。」

「刀間。俺はヒス出せないからよろしくな。」

ヒスとはキンジのヒステリアモードのことであり、僕の凶暴性人格と似たやつだ。

「了解。お前は俺の指示で動け。」

心臓の鼓動が早くなってきた。

いいぞお。この感じ。闘る時にぴったりだ。

「先手もらうわよ。」

.....

「どうぞ自由に。ちっちゃい人よ。」
プチ。

「い、い、いま、なんてい、言ったあああああ！」

怒った神崎が2丁拳銃を向け走ってくる。

ガバメント2丁か。

装弾数は最大8弾それが2丁で16弾。

俺のDEは8発装弾だ。

いけるな。

バタフライナイフを構える。

「あんた馬鹿？ナイフで闘るって。」

神崎が引き金を引く。

ズガズガズガズガ！

弾は全て

俺には当たらない。

「え？」

「ハッ！」

銃弾をくぐりながら、神崎に近づく

胴体にフェイントをかけ、神崎のガバをはたく。

「くっ！」
バックステップを踏んだ神崎が背中から、2本の太刀を抜いた。
で、でかい！
奴の等身大ぐらい刃が長い。

俺はバタフライナイフを放り投げ取り押さえにいく。

ブウン！ズウン！

神崎、コイツ強い！

刀捌きが常人離れしている。

(だが、こっちは刀に慣れてるんでね。)

神崎がクロス切りを放ったときに、突っ込む。

「!!!!」

俺の軌道修正の速さに驚いたんだろう。一瞬神崎が怯む。
すかさず俺は両腕を掴み、握力を入れる。
神崎の手から刀が落ちる。

「んん〜！」

怒っている。

すかさず神崎が足払いを入れる。
が、しかし俺が反応して腕を左に回転させる。
ズーンと

見事に神崎は床に押し倒された。

神崎が立ち上がりガバを手取る

が、しかし、ガバが空を飛ぶ。
待機していたキンジが狙撃したのだ。
そこに俺が腹に拳を入れる。
俺の拳に耐え切れなかった神崎が胸にうずまる。
気を失ったのだ。

「やりすぎたかな？」

「まあ。コレぐらいしとかなきゃダメだっただろ。」

「そつだな。で、コイツどうする？」

「そこらへんにおいときゃあ起きるだろ。」

「了解。」

神崎を床に置く。

infinite

「それにしても刀間、お前の無限は最高だな。」

「お前の、ヒステリアモード H S S も十分すごいだろ。」

「しかし、俺のはちょっと困った付録がつくんだよ。」

「ああ、声が低くなり、かなり男っぽくなるやつだろ？」

「それが、嫌なんだ。」

コイツの特殊体質ヒステリアモード H S S は恋愛時にエンドルフィンとか言うのが分泌されると約30倍の戦闘能力になる。

しかしこれには欠点がある。一つは女子を何が何でも助けようとすること。

もう一つはキザな行動を取ってしまうことだ。

それを本人はかなり嫌がっている。理由は知らないが。

とか何とか話していると、手首を金属の輪で拘束された。

後ろを見ると

神崎Hアリアが笑っていた。

4章 戦闘開始？（後書き）

んー眠いですw

5章 ドレイ？（前書き）

ちょっとアリアをボッコしたの、まずかったですかね？

5章 ドレイ？

手につけられた手錠を見て、神崎Hアリアを見る。

「……………」

「言ったでしょ。手錠が勝敗を決めるって。」

笑いながら神崎が言う。

「お前、気失ってただろ。」

「あれは正直きつかったけど、気は失ってないわ。」

「……………」

「てことで、刀間とキンジは私のドレイね。」

「……………ありえんだろコイツ。」

「ちょっと待て、俺にはもうパートナーがいるんだぞ。」

「それなら、そのパートナーも私のドレイにすればいいじゃない。」
けるっとした顔で答える。

「待て。そいつは俺に訓練してもらいたくて、パートナーになったんだ。いくらなんでも可愛そうだろ。」

「だ〜から〜。正式なドレイにはなんなくていいから、私が呼び出したらすぐ来る役を、あんたにはやってもらっわ。キンジは正式だけどね。」

「ちよっ、いくらなんでも無理やりすぎんだろ。なあ、刀間。」

うーん。ドレイか。悪くないかもナ。

「しゃーない。勝負に負けたんだから、潔くなってやるっぜ、ドレイと言っやつに。」

「あー、なに、なってくれんの?。」

神崎が目を輝かせて、聞いてくる。結構可愛いかもナ。

「ああ、約束だったしな。」

「馬鹿キンジ2号、あんた、結構いいやつじゃない。」

「ちよ、ちよっと待て。俺は反対だぞ。」

「キンジイ、お前も男だろ。約束事は守ろっぜ。」

「そっよ、馬鹿キンジ。約束は守りなさい。」
と、キンジをにらむ。

「はあ。分かったよ。ただしクエスト1つだけだからな。小さくても大きくても1つだからな!」

「……いいわ。その一件で、あんたの実力を見極めることに

する。」

ハアとキンジがため息をつく。

「よし。なら今日は解散。来示は戻ってよし。キンジはこれから教務科に行くわよ。」

「了解した。キンジがんばれよ。」

「お前もな。」

「来示！私に呼び出されたらすぐ来るのよ！分かった？」

「ああ。分かってるよ。じゃあな。」

（それにしても俺の拳に耐えられるなんて凄いな。）
と、考えながら教室に戻った。
教室に戻ると……。

「おい！刀間！今度は神崎か！？」

案の定、マスコミに囲まれた。

「だから、何でお前らは何でも知ってたんだよ。」

「今、教務課に向かう神崎と遠山が目撃されてなあ。手には紙があり、よく見ると申し込み書だったのだ！」

「あー。それなら大丈夫だ。俺はパートナーじゃないから。」

「そんなこと知ってる。問題は樋田だ。」

「何で樋田なんだよ？」

「この話聞いたとき樋田さん、落ち込んだよー。刀間君は鈍感すぎるよー。」

なんで、俺が鈍感呼ばわりされなきゃイケねーんだよ！

「何で落ち込んだんだ？あいつ。」

「それでこそ、刀間君だ。」

と、不知火亮しろうが苦笑いしながら言う。

????意味が分からん。

放課後

今は体育館で樋田と射撃訓練中だ。樋田はまだ中心を確実に捕らえられない。

ふと樋田が声を出す。

「カー君。神崎さんの噂ホンと？」

「ん？まあほんとしてことなのかな？」

樋田がこつちに駆け寄り、僕の肩を揺さぶる。

「大丈夫ですか！何にもされてないデスよね！」

「ああ。何にもされてねえよ。それより肩を揺らすな。」

「ほんとにないもされてないんですね。はあ良かった。」

何が良かっただよ。

「あー。でも、あいつに呼ばれたら行かなくちゃ行けない取り決めになったんだよな。」

それから言うこと。樋田に神崎の事について質問攻めされた。もちろん、射撃訓練どころではなかった。

樋田を寮まで送った後、飯を食い、布団に潜った。

(明日は何にもおきないでくれよ)
そう願いながら、僕は眠りについた。

その願いはもちろん叶うはずはなかった。

5章 ドレイ？（後書き）

だいが話が進んできました。

「鈍亮二」（なた りょうじ）武偵高在校のイケメン男子情報科B
ランク

亮二の耳に入ってこない情報は無いらしい。

「神崎Hアリア」2丁拳銃と2刀流を使いこなすSランクの凄腕武
偵。

独断専行で物事を進めようとする。

6章 事件発生（前書き）

原作と関わりながら改造していきます；

本当は5日目にバスジャックが起きてたはずなんですが、都合上4

日目に発生させたいと思います。スイマセン；

（先取り）

刀間の凶暴性人格を無限軌道キャタピラと呼ぶようになります。

6章 事件発生

（4日目）

ん、ん

朝だ。

外は雨が降っている。

時計を見ると7時半。ぎりぎり間に合いそうだ。

せっせと身支度をして、バス停に急ぐ。時計は7時58分を指していた。

バス停は生徒たちが押し合いへしあいして乗り込んでいた。

（あー、だめだな。）

と、思っていたら、どうやらキンジも乗れなかったみたいだ。

「刀間、お前も乗れなかったのか？」

「そう言うことだ。」

と、言ったときにバスの異変に気付いた。バスの下にあるプラスチック爆弾らしき物を。

「お、おい。あれ爆弾だよな・・・？」

「何が？」

と、キンジが振り返った。
そしてバスが走り出す。

「……………あつたな。」

バスが遠ざかっていく。

(何でだ？どうすればいいんだ？)

と、考えていると、真っ赤な、ルノー・スポール・スパイダーが無
人で小型機関銃CZIを乗せて走っていった。

その時、ある考えが脳裏を横切り、心臓がバクン！と、なる。

「俺の後ろに乗れ。バスを追う。」

と、言い改造バイクにキーを差し込む。

「ヘルメット外すなよ！」

と、声をかける。

「おう！」

魔法改造をしたバイクで追ったため、すぐバスに追いついた。後ろ
にルノーが走っている。

「運転変われ、ルノーを離脱させる。」

「了解。てかお前いつの間に無限軌道入ってんじゃねーか。
確かに俺になっていた。」

「んなことはドーデも良い。早く替われ。」
キンジと操縦を替わり、DEを構える。

ドゥウン！ 1発目 UZエに当たり破壊する。

ドゥウン！ 2発目 ルノーのタイヤに当たる。

ギィィィィン！！赤い火花が散り、ルノーが道路から離脱する。

「よし、バスの隣に同速度で走れ。乗り込む！」

「了解。」

バイクが速度を上げる。

バスの窓に弾を撃ち込む。危険だが。

「よし。そのままだぞー。」

飛び移るタイミングを計る。

バツツツ！

バーン！！

背中が痛んだが何とか乗り込めた。

「来示！」

振り返ると、車輜科の武藤がいた。

「お前ここに乗ってたのか。」

「あ、ああ。ちくしょう・・・！なんでこんなバスに乗っちゃったんだ？」

「そんなの知らねーよ。運が悪かったんだろ。」

「——あれだ。来示、あの子。」

武藤が指したのは、運転席の傍らに立つ眼鏡の少女だった。

「か、かかか刀間先輩！助けてっ」
涙ぐんでいる。中等部の後輩だ。

「どうした。なにがあった。」

「携帯が私のとすり替えられてたんですっ。それがいきなり喋りだして。」

「速度を落とすと 爆発しやがります。」
そう言うことか。とにかく今は爆弾の解体に急ぐか。

「キンジ。聞こえるか？」

「ああ。聞こえるぞ。」

「トンネルを抜けると橋に出るだろ？そのときに爆弾の金具を撃つて海に落とせ。」

「了解。射撃には自信があるからな。」
と、聞いたとき後ろからもう1台のUZIを乗せた、オープンカーが追撃しに来た。

「キンジ！もう1台来たぞ！気を付ける！」

ババババババババツッ！
UZIが攻撃してきた。

「みんな伏せる！」

ガギガギギイーン！
銃弾が降り注ぐ。

俺も肩に流れ弾をくらった。防弾制服を着ていてもかなり効く。

「クッ！」

外を見るとキンジがUZIに発砲している。

「気を付ける！」

UZIがキンジに乱射する。
弾がキンジの脇腹に当たった。

「！！！」

キンジが転げ落ちる。

ズガアアアアアアアアアア！

死にはしないだろう。骨は折るだろうけど。

しかし、弱ったな駒が残ってない。

(俺が解体しに行ってもUZIにやられるだろうし……)

そう、思っていると。ヘリの音が聞こえた。

ヘリに乗っているのは、Sランクの天才狙撃手「レキ」だ。狙撃銃を構えている。

ドスツツ UZIに命中。 ドスツツ 2発目でオープンカーが橋から落ちた。

銃声が鳴るたびに、爆弾の部品が落ちていく。

6発目にギイイーンとゆう音が響き、爆弾が海で爆発する。

バスは次第に減速し止まった。

その後は今学期2度目の尋問科による事情聴取の後、武偵病院に入院したキンジの見舞いに行った。

「元気そうだな。」

「おかげさまで。」

キンジはあばら骨を2本負っただけで済んだ。

「まあ、無事でよかったよ。」

「教務科からこつぴどくくらったたる？」

「ああ。1時間ほど。」

「今回は捕まらないだろうな。」

キンジの言う通り、車の残骸からは何の証拠のこっておらず、UZ Iは盗難銃だった。

探偵科は「武偵殺し」によるもの、と言う線で捜査しているらしい。

「後の問題は、神崎だな。」

キンジが、めんどくさそうな顔をする。

「僕の携帯に3件も不在着信が入ってた。しかも、全部神崎」

「俺のも3件だ。後が怖いよ。」

と、苦笑い。

きつと、バスジャックのパーティーを組みたかったため電話したんだろう。僕がドレイだから。

「ああ。そうだな。僕はもう帰るよ。」

「ああ。明日には授業出れると思うから。」

「了解。じゃあな。」

案の上、その後部屋に乗り込んできた神崎に、こっぴどく説教を受けた。

説教中に「風穴、風穴あけてやる。」騒いでいた。

ちなみにレキは神崎とのパーティーを組んでたため狙撃したらしい。

無理やり神崎を寮から追い出てソファーに座っていると、また厄介なのが来た。

樋田だ。

「カー君。大丈夫ですか!？」など叫び泣きながら部屋に突っ込んでくる。

(かんべんしてくれよ。)

樋田を泣き止ませ説得するまで3時間。

そこから寮から追い出すのに1時間かかった。

こんな形で忙しい一日が幕を閉じた。

6章 事件発生（後書き）

ちよつと原作と違う感じで書いて見ました。

次章は飛行機ジャックです。どんどん更新していきます！

7章 どうにでもなれ(前書き)

だいぶ進んできました 評価or感想まっています！

刀間の二つ名を無限(the infinite)と呼びたいと思います
ますが、どうでしょう？

この章で刀間の過去が判明します！

7章 とうじにでもなれ

（5日目）

ああ、昨日の騒動のせいで目覚めが悪い。

時計を見ると6時半だった。

顔を洗い、朝飯を食った後、PCでメールをチェックする。
そこに驚くべくメールがあった。

差出人：

件名： 無題

日時：2011年5月1日00:00

4日19:00武偵高にて制裁を待て。迎えに行く。

デュラントル
魔剣

.....
バレタ。

僕が超偵であることが。

デュランダル
魔剣

超能力を用いる武偵・超偵を狙う誘拐魔
だが、その存在自体デマだと言われて久しい。
その姿をみた奴がいないのだ。
今では、誘拐された超偵は別の失踪だったんじゃないか、と言われ
ている。

僕は周りの人間には言っていなかったが、いや、隠していたが、

僕は超偵だ。

「刀間」それは超偵の一族。
昔は「刀ノ水ノ間」一族だったのだが、正体不明の組織に襲われ全

滅、したはずだったのだが、
刀ノ水ノ間7世が生きていた。

そこから、苗字が「刀間」になり、超能力を使うことを禁じられた。
周りにばれずに生きてきた。

ちなみに僕は16世である。

超偵を狙う、魔剣から脅迫がきたと言うなら、バレた、としか考えられない。

（わ、忘れよう。）

と、PCを閉じる。

念のため、バタフライナイフを置き、昔、母親にその刀で鍛えられていた、水凧ノ大蛇^{みづなぎのおへび}を背に装備する。水凧ノ大蛇、それは刃渡り2mの大刀だ。

（まだ、僕の切り札は使いたくない・・・）

そついった沈んだ気持ちで学校に向かう。

教室に入り椅子に座る。ドンヨリした気持ちで椅子に座っていると、
鉦と星伽白雪がこっちに来る。

「大丈夫ですか？ 凄い顔してますよ？」

白雪はキンジの幼馴染で、キンジに好意を寄せている。

キンジ本人はまったく、気付いていないのだが。

「刀間。おまえ樋田にふられたか？」

「アホか。んな訳ねーだろ。あいつとはそつゆう関係じゃないし。」

「んじゃなんで死神みたいな顔してんだ？」

「お前には関係ねえよ。」

白雪が心配そうな目でこつちを見ている。

コイツは代々続く星伽神社の巫女で超能力調査研究科（SSR）に属している。

たぶんコイツには僕が超偵であることを知っている。

星伽神社と同じで、刀ノ水ノ間は歴史があり、星伽にも少し関わっているからな。

「酷い奴だなあ友達が心配してあげてんのに。」

「ほら、一時限目始まるから席座れ。」

と、席に戻らせる。

（この件は一人でかたずけたほうが良い。
そう自分に言い聞かせる。）

今日の俺はそんなに酷い顔してるか？

羽偽比奈にまで大丈夫と聞かれた。

（今日はおとなしく寮に帰って寝るか）

樋田に狙撃訓練の中止のメールを送り寮に帰る。（返信が12件帰ってきた）

夕飯を食い布団に入る。

(何にも起きないでくれ)
そう願ひ眠りにつく。

7章 どうにでもなれ（後書き）

話が急展開しました！

感想まっけます！

8章 バレタ（前書き）

原作とかけ離れています；
感想等待着てます。

8章 バレタ

（6日目）

5:30

いつもと同じように時計を確認する。

魔剣のことに気を張りすぎて早く起きてしまった。

なんとなくPCのメールに目を通す。やはりあのメールは、消えていた。自動削除されたのだろう。

（今日は学校に行かないほうがいいかもな。）

魔剣にによる事前調査のせいで周りにいるやつらに被害が行きかねないからだ。

19時になるまで武器の定期チェックや刀を研いだりして時間を潰していた。

16時。今まで26件のメールが届いた。どれも同じようなメールばかりだったが、一つだけ気になるメールが来た。

白雪の「16時ごろにお話があるのでそちらの部屋にお邪魔します。」と。

16時10分ピンポンとチャイムが鳴った。

ドアを開けると、やはり白雪だった。

「一応、上がれよ。」

と、部屋に入れる。

「スイマセン。お邪魔します。」
ソファーに座らせ、本題に入る。

「で、話ってなんだ？」

「魔剣のことなんですけど。」
やっぱり知っていたか。一応平然を保つ。

「それがどうした？」

「あの、刀間君、超能力つかえますよね？」
ぐっ、やっぱり知っていたか。

「それで、このごろ刀間君が浮かない顔をしていたので占いをさせてもらいました。」

白雪の占いは、確実に言ってもいいぐらいよく当たるので有名だ。

「それで？」

だいたい予想はつくけど、一応聞いてみる。

「魔剣と出ました。」

「……………コイツの占いはどこまで当たるんだ。」

「……………ああ。確かに魔剣から脅迫メールが来た。」

「やはりそうですか。」

そうですね、ドンだけ軽い反応なんだよ。

「19時に武偵高に迎えに来ると書いてあった。」

「……。なら、私が魔剣に気付かれないようにあなたをつけま
す。十分に警戒して。」

「嬉しいけど、来てほしくない。君に被害を出したくないし、僕の
力を見てほしくない。」

「そんなこと言ってる場合じゃないです！あなたが消えれば悲しむ
人がいっぱいいます！」

「そんな奴、僕は知らない。」

「少なくとも樋田さんは悲しみます。それにキンちゃんも。
キンちゃんとはキンジのことだ。」

「悲しむのはそいつの勝手だ。俺が選択したんだ、口出ししないで
くれ。」

「あなた、一人では魔剣を退けない。私を連れて行ってください。
白雪は冷静だった。」

「コレは僕一人の問題だ。君を巻き込む訳にはいかない。」
「まずい。このままでは、俺が白雪に殴りかかってしまう。」

「君が傷つけば、それこそ悲しむ人は、僕よりたくさんいる。」

「……。」

「一人で行かせてくれ。」

白雪がうなだれ、ポケットから一枚の護符を、取り出した。

「魔剣は銀氷を使うと、言われています。火の護符です。使ってください。気休めにはなるでしょうか?」
護符を受け取る。

「ああ。ありがとな。それと刀間のこと周りの奴には、言わないでくれ。頼む。」

「分かっています。今まで、誰にも言っていないせん。」
今までって、昔から知ってたのかよ。

「すまないな。もうそろそろ、行ってくる。くれぐれもついてくんなよ。」

水風ノ大蛇を肩にかける。

「気を付けて。まずいと思ったら、すぐに逃げてください。」

「ああ。帰ってくるよ。」
DEとウィルディピストル2丁を装備する。
そして、時間は早いが、寮を出る。白雪から早く逃げたかった。あいつには何もかも、バレている。

時間があつたので、カフェで、時間を潰す。味は覚えていないが。

武偵高の教室には、所々電気がついている。ちなみに、ここは校庭だ。

(こんな所で闘るのかな?)

と、疑問に思っていると。隣に紙が置いてあった。まったく気付かなかった。

(高校棟、屋上にて待て。 魔剣)

おかしい。

何故、わざわざ狭くて逃げ道のない場所を選ぶんだ。それほど、成功する自信があるのか？

とりあえず、屋上に向かう。

屋上に鍵はかかっていなかった。逆に不安だ。

ギイイ

と、扉を開けると、よく見慣れた女子が目に入った。

(樋田！？)

と、驚いていると、心拍数が早くなる。

デュランダル
「魔剣」

と、俺が言う。

「刀間。さすがだな。気付くのが早い。」

樋田とコイツは背が違う。コイツのほうが少し高い。

「で、何で俺を迎えるんだ。」

と、偽樋田に言う。

「この学校には、優れた超能力者がいる。その大きな原石を磨くのが私のつとめだ。」

「磨いてくれるのはありがたいんだが、あいにく、その力は封じてるんでね。断る。」

「その、封じを解くのが私のつとめだ。今、ココで。」

「ココで?」

「力づくで、今、ココでだ。」

と、ベリベリッと、かぶっていた薄いマスクを剥いだ。魔剣の目はサファイアで、美しい白人だった。

「今、ココで、私と本気で闘え。」

俺の人生どうなってんだ?

8章 バレタ（後書き）

魔剣登場です！

感想等、お待ちしております。

9章 もう一つの銀氷（ダイヤモンドダスト）（前書き）

結構原作を改造しています；
感想等待着てます。

9章 もう一つの銀氷（ダイヤモンドダスト）

「闘れって……意味分かんねえよ。」

「分からなくていい。お前は本気で闘えば良いだけだ。」
「ちよつとまで。」と言おうとしたら、周りの空気が凍り始めた。
比喩表現じゃなくて。

「!?!?!」

「さあ。どうする、刀間。」

これが魔剣の力か。

しかし、俺の周りの空気は凍らない。

ましては暖かい。特に、ポケットの近くの太もも付近が。

（白雪の護符のおかげだな。）

俺の周りが凍らないのを見て、魔剣があせる。

そこにすかさず、魔剣に走りながら叫ぶ。

「お前に言われなくても、潰すよ！半分力で。」

ウィルディンピストル2丁を、魔剣に向け発砲する。

バスッ　バスッ

まっすぐ魔剣に向き44　A u t o　M a g が飛ぶ。

当たった、と思ったが甘かった。
弾丸が凍って空中で止まっている。

(コイツに弾丸は効かない。)
そう、考え肩にかかっている、水凧ミスナギノオロチノ大蛇を抜く。

「例の刀か。」
と、魔剣がつぶやく。

「どんな刀や剣でも、聖剣デュランダルにおよぶ物はない。水凧ノ大蛇でも。」
と、聖剣デュランダルを俺に向け構える。

「ホザけ。」
俺は、魔剣に向かい走る。

ガギイイン

聖剣と大蛇が火花を散らす。
「そんなものか、刀間！」
魔剣が俺の顔に息をかける。一気に顔が霜に覆われる。

「ぬぐおお！」
護符のおかげで霜は溶けたが、顔が痛い。視界がボヤける。
気付いたら、魔剣がこっちに、剣を振り落としていた。

「グッ!!!」
とっさに、大蛇で防御する。

グギイイイン！

魔剣が腹に蹴りを入れた。

ガシャン！

思っていたより、力が強い。フェンスにぶつかる。

「ぬぐうう。」

腹が痛む。

魔剣が呆れた顔で言う。

「まだ分からないのか？私に勝つには、力を解放しないとならない事を。」

「お、お前ごときに、っ、使うもんか。」

「まあ、いい。無理やりにまでも使わせてやる。」

「使うもんかッ。」

聖剣に斬りかかる。

ガンッ　ズンッ　ガギイイン！

と、音と火花が散る。

「ウラッッ！」

魔剣の甲冑に大蛇を入れる。

ズン

甲冑に、刃は刺さらず、魔剣がよろめく。

「どうした！デュランダル魔剣！」

「私の名前はジャンヌ・ダルクだ！」

ガギイイイン

と、火花が散る。

(ジャンヌ・ダルク？聞いた事があるような？)

ギンツ ガツ ビイイイン！

そんなことを忘れさせるような勢いで、剣を突き出される。
剣捌きがかなりウマイ。

ガンツツ ギイン

「なんで、俺を、本気に、させようと、するんだ！」

ガアギイギイン！

「組織の、パートナー相手、が、いるのだ！」

ズギイイイイン！！

「ソン何、知る、かよッ！」

ドズウウウン！！！！

「そこで、教育し、使う！」

ガツガツズギイイイン！！！！

「そんな、事で、人を、巻き込むなアアアア！！！！！！」

バギイイイイイン！！！！！！

聖剣デュランダルが、宙を舞う。

「！！！！」

すぐに拘束する。

「魔剣、ジャンヌ・ダルク。未成年者略取未遂で逮捕する！」

と、超能力者用の手錠をかけようとした時、

「カーカーん。」

ま、まさか。

「樋田！？」

と振り向くと、スピーカーがあった。
し、しまった！

「油断すると、狩っちゃおうよ？」

と、ジャンヌ。

振り返ると、顔の右側に踵蹴りを入れられた。

「ガアア！」

と、吹っ飛ぶ。

血の味がする。

歯が、割れたみたいだ。

「油断したね、刀ノ水ノ間水刃ノ来示。」
カタチノミスノマスイジンノライジ

グツ、そこまで知っていたか。俺の本名まで。

「さっき言っただろう。本気じゃないと私に勝てないと。」

「そ、そんなことツ。グフツツ！」

ジャンヌの蹴りで舌を切った。

「さあ、早く私を倒せ。」

「ほ、ホノヤヤオウ。」（こ、この野郎。）

ジャンヌが剣を振り落とす。

と、同時に赤い閃光が走った。

閃光の光源を探すと……

後ろに、巫女姿の星伽白雪が、光る刀、イロカネアヤメを構えていた。

「魔剣！あなたを逮捕します！」
と、血相を変えて、白雪が叫ぶ。

少し、ジャンヌが考えてから言う

「刀間、今日は引き分けだ。近いうちにまた会おう。」
と、言い銀氷ダイヤモンドに消えていった。

「だ、大丈夫ですか、刀間君！」
白雪がこっちに駆けて来る。

「な、なんでお前が。ゴフツ、ガツハツ！」

「だ、大丈夫ですか！救護科に行きましょう！」

（だ、だから、何でお前が。）
と、言おうとしたら、ジャンヌに蹴られたところが痛み、気を失った。

薄れていく記憶の中で、俺は武偵病院に運ばれていることが分かった。

9章 もう一つの銀氷（ダイヤモンドダスト）（後書き）

なんか刀間全快ですw

「星伽白雪」（星伽白雪） 武偵高の生徒会会長で、キンジの幼馴染
代々続く星伽神社の巫女で、鬼道術を使う。

10章 魔剣（前書き）

1章づつの文字数が少ないような気が。

夏休みに入ったらガンガン更新します！
これからもお願いします。

10章 魔剣

（7日目）

「あ、起きた！」

視界がぼやける。よく見えない。
どうやら、寝ていたようだ。

「カー君。大丈夫ですか？」

この声は樋田か？なぜ樋田がいる？

「返事してください！」

視界がはれてくる。

そうか、昨日は魔剣デュランダルと交戦したせいで、武偵病院にいるのか。

「ああ。多分平気だ。」

かすれ気味の声で答える。樋田以外にも白雪が居た。

「よかった。昨日何があったのか分からなかったから・・・心配で・・・」

え、分からない？白雪はてつきり、昨日のことを話してると思ったのに。

それはそうと、泣き始める樋田に声をかける。

「ほら、俺は大丈夫だから、泣くな。それより、ちょっと悪いけど

はずしてくれないかな？」

白雪の話が聞きたい。相談できる人が、他に居ない。

「え、あ、はい。」

「くれぐれも、立ち聞きはするなよ。」

ビクッ、と凶星をさされたみたいに、身をすくめる樋田。

「は、はい。わ、分かっています。」

ガチャン。

と、ドアを閉める。

白雪のほうに顔を向ける。

「すまなかったな、昨日は迷惑かけちゃって。」

一応謝る。

「刀間君がさらわれなくて良かったです。でも、顔の傷は、私もうちよつと早くついていたら・・・。」

と、申し訳なさそうな顔をする。

「白雪は悪くないよ。もともとは俺が来るなって言った事だし。お前が来てくれなかったら色々とまずかったしな。」

「そ、それより、魔剣の事なんですけど。」

「ああ。なんか分かったのか？」

「はい。実は昨日、刀間君が襲われた時間と同時刻に、武偵殺しによる飛行機ジャックがありました。世間的にはNG何ですけど。」
「じゃあ何でお前が知ってたんだよ。と、突っ込むのをこらえて、話を

聞く。

「同時刻に？珍しいな。」

「はい。その武偵殺しを取り押さえに行ったのが、たまたま乗り合わせていた、キン、遠山君とアリアです。」

「え、乗り合わせていたって、どっか行く気だったのか？」

「はい。アリアがイギリスに帰ろうとしていたので。」

「おいおい。そんなこと一切僕は聞いてないぞ。」

「遠山君が事件を予想して乗り込んだため、事は収まりました。」

「キンジに聞いたのか？」

「いえ。実はジャック時に武偵高は大荒れだったんです。私も、事の収集に参加してましたから。」

「だから、知ってたのか。てか、だから魔剣の時遅めに登場したのか。それはそれで、近くにいたら来てくれても良かったんじゃないのか？結構悲しいぞ。」

「来るなって言った俺が悪いんだけど。」

「で、武偵殺しは捕まったのか？」

「どうせ捕まってないんだろうけど。同時刻に発生した事件。これはあまりにも珍しい。魔剣と武偵殺しが手を組んでいた、としか考えられない。*イ・ウーで同じ所属だと言われているし。きつと、僕とキンジの力を分散させたかったのだろう。」

「まだ捕まっています。TVで事件自体の放送はされてるので、

見てみたらどうでしょう。」

「ああ。そうするよ。」

「それと、1つ気になることがあるのですが、聞いていいですか？」

「ああ。救ってもらったからな。」

「魔剣が言ってた、刀間君の本気とは、どう言うことですか。」
グツ。そこまで聞いていたのか。

「刀間君からは相当な気、が伝わります。それと関係あるのですか？」

「そ、それは……。」
言えない。それは一族の禁止事項の1つなのだ。
しかし、コイツには隠せない、ような気がする。

「無限覚醒水刃ムゲンカクセイスイジンの事なのですか？」
……。っておい！なんで誰にも言っではいけない事をお前が知ってんだ。

「な、何でお前が知ってたよ！」

「星伽の資料に書いてありました。」
ああ。星伽か。ウチの一族の資料に書いてあったぞ。2000年以上続く、武装巫女一族って事が。

「はあ。そのとおりだよ。そこを魔剣の目に付けられた。」

「気を付けてください。魔剣に再び襲いかかれるかもしれないので。」
「ちょっと、危険な発言をしたのに、その反応って、アリなの！」

「そう言う、お前こそ大丈夫なのか。お前は超偵だろ。」

「私は大丈夫なんですけど、教務科の人に警告はされています。」

「ボディーガードは雇ったのか？」

「教務科にそう言う警告をされると基本は、教務科からボディーガードが生徒の中から雇われる。」

「ボディーガードは……。ちょっと……。まだ雇ってないみたいだ。」

「なんだ、雇えない理由があんのか？」

「私は、キンちゃんのお世話をしたくて、誰かが近くにいたら……。」

バンツツ

と、言い終えた時ドアが勢いよく開く。

「ちょっと、おまつ。とキンジの声が聞こえたと思うと、今度はアニメ声が、」

「そのボディーガード、私があたしがやるわ！」
と、ドアの裏で盗み聞きをしていた、アリアorキンジが流れ込む。

「お、お前らっ。」

「俺じゃない。コイツが勝手に。」
と、包帯を腕に巻いたキンジが、アリアを指差す。

「お、刀間、元気そうじゃん。そっちはそっちで大変だったんだってね。」

と、僕のご主人アリア様が言う。

「そっちも大変だったんだろ。」

「まあね。それより白雪のボディガードの件。24時間体制で、あたしとキンジが無償で引き受けるわ。」

「ちょ、何で俺まで！俺は関係ねーだろ！」

「あんた、BGMになってくれるって言ったでしょ。」
キンジの奴、神崎の機嫌を取るために、余計なことを言ったな。

「う……。」「
なにも言い返せない。」

「キンちゃんがやってくれるの!?!」
と、目を輝かせる白雪。

「そう。コイツも無償で。」
その言葉に喜びを噛み締める白雪。
そしたら今度はこっちに向かって。

「なら、刀間君も私のボディガードやってください!」

うぐ。なんだこの展開。意味分からないぞ。
ココで断るのもなんだし、

「分かった。」
「言うておく。」

その言葉が、俺の人生を変えると知らずに。

10章 魔剣（後書き）

感想等まっています！

11章 ボディーガード(前書き)

この章は結構短いですが、感想等待着てます。

11章 ボディーガード

「あ、それなら刀間君の寮に住んでいいですか？」
全身の身体が凍りつく。

「ちよ、マテ。な、何で俺の寮なんだッ。」
お前のことだから、キンジの寮かと思っただぞ！

「それもいいかもね。こいつの部屋行った事ないし。」
ま、待て。絶対に泊まらせないぞ。

「まあ。それも良いんじゃないか。」
お、おい。キンジまで……。

バンツッ！

と、ドアがまた、勢いよく開く。

「その話が本当ならッ私も守りますッ！！」
げ、樋田まで。

「ま、待て。僕の部屋は2人部屋だッ。5人はさすがに無理だ！」

「それなら平気です。簡易ベッドを用意すれば。部屋はあるので平気です。」

「だ、そうゆう問題じゃなくてッ！」

「問題もなにも、あんたの部屋を使えば、1人ボディガードが増やせるんだから。」

ひ、樋田の野郎！

「あ、あそこは男子寮なんだ、けどそれでも良いのか検討してくれると嬉しいんだけど。」

普通、病人にガバメントを2丁向けるか？ココに居るけど。

「よし、これで決定！コレが刀間のカードキー、自由に入って良いわよ。」

と、白雪に渡す。

つて、なんでお前が、僕のカードキー持ってんだよツ！マジで！
ここは歯向かわないようにしたほうが、身体に良いようだ。

「んじゃ、今日から護衛を始めるわよー。」

と、神埼がガバを上突き上げた。

「カー君早く退院してね。」

と、樋田。その笑顔は憎めない。

「後で、医師の人の説明があると思うので。お身体をお大事に。」
あんたのせいで、これからズタボロにされかねないんだぞ、白雪。
だが、やはり憎めない。

「んじゃ、お大事に。」

お前に罪はないが、その顔を引き剥きたいよ、キンジ。

こうして、迷惑な人たちが帰った後に医師からの、説明を受け（俺の顔は、毒に侵されていたらしい）
その日の夜に退院した。

もちろん、部屋で安らぐことはできなかった。

11章 ボディーガード（後書き）

感想まっています。

12章 安らかに眠らさせてください(前書き)

それにしても、原作を思いっきり改造してるような。。。

楽しんでくれれば幸いです。

12章 安らかに眠らせてください

〜8日目〜

まったく、今日は寝不足だ。

退院して家に帰ったら、部屋はめちゃくちゃになってるし。

机は真つ二つ。ソファはずたずた。椅子は粉々。テレビは割れてる。

まったく、夜中の3時まで普通、バーリ・トワード戦をするか？答えはNO、近所迷惑だ。

キンジを奪い合うのは勝手だが、寝ている病人の顔を踏みつけるのはやめてほしい。

ねえ、神崎・H・アリアさん。

神崎と一緒にポン刀振り回さないでくれませんか。周りの家具がめちゃくちゃになるんで。

星伽白雪さん。

キンジ争奪戦に参加しなかったのはえらいが、さっさと退散しないで、できれば止めてほしかった？

樋田宇美さん。

どうゆう風の吹き回しでこんなことになったのだ？お前のせいだと思っが。

遠山キンジ君

そして俺、争奪戦を止めたのは良かったが、それが遅かった。眠る

のが夜中3時になっちゃったよ？

今日の授業は、おかげで全て昼寝に使った。

そして昼休み――

屋上でアゲパンを食っていたら、不知火とキンジと武藤が来た。

「おつす。元気か？」

お前のせいで元気じゃないよ。キンジ君。

「ちよつといいかな？」

と、イケメン強襲科男子Aランクのモテ男。不知火のニコツとスマイル。

「ちよつと事情聴取させる。逃げたら轢いてやる。」

と、ツンツン頭で、乗り物と言う名前のものなら、何でも操縦できるガサツな男、乗り物オタク武藤。

「何だよ事情聴取つて。」

「キンジから聞いたぞ。星伽さんのボディガードをやってたっ
てなア。樋田と神崎さんも一緒に」

「そんな俺だって知らねえよ。無理やりやらされたんだから。俺
よりキンジのほうが詳しいぞ？」

「そーですか。なんでお前とキンジだけがモテるんだよ。」
キンジが、ゴフツとふきだした。

「モテるとかそういう問題じゃねーだろ。そもそも。」

「そ、そうだ。それよりアドシールドどうするんだ？」

アドシールドとは武偵高で、毎年行われる国際競技会で、スポーツで言えばインターハイ、オリンピックみたいなものだ。

「僕は出場を辞退したよ。こんな体で出れないし。」

まだ、体は完璧に治っていない。

「僕も補欠だからね。イベント手伝いだよ。」

にこっ

神父様みたいな笑顔で答える不知火。

「俺も手伝いだ。なんかやらなきゃいけないんだろ。手伝い。」

と、武藤。

「じゃあ、俺たちでバンドやらないか？アリアにやれって言われたから。」

お前はドンだけ、神崎にパシられてんだよ。道は踏み外すなよ。

「バンドかぁ。かつこいいかもな。よし、やるかぁ。」

武藤がついていった。

「武藤君がやるんだったら、僕もそれにしようかな。刀間君も一緒にやるっよ。」

まあ、音楽はうまい方だからな。

「ああ。ほかにやることがないしな。」

「それより刀間君、代表を辞退するなんてもつたいない。メダルを

持ってれば、将来の進路がより取り見取り、って話だよ。」

「そんなことはどうでもいい。僕みたいなのがいて何になるんだか。」
「それに人前で、俺、は出したくない。」

「まあ、手伝い頑張ろうぜ。」

今は、樋田とナイフ戦の訓練中だ。

「ほら、右が空いてる。」

と、バタフライナイフで樋田の右足を軽く叩く。

「あつ。スイマセン。」

樋田は大きめのサバイバルナイフを使っている。

「相手のナイフをかわし、その隙を狙う。」

と、樋田のサバイバルナイフを弾く。

「ちょっとそのナイフはお前に合っていないな。僕のバタフライナイフを使ってみる。」

と、バタフライナイフを渡す。

「は、はいッ。カー君のナイフ……。」

と、にやーと笑う。何か僕、言ったか？

訓練を再開する。

樋田はさつきより素早いナイフ捌きで攻めてくる。

「おお。攻め方がさつきと違って、かなり良くなってるぞ。」
と、声をかけると。

樋田が赤面し、

どてっ

音どつり樋田が転んだ。

しかもこっち側に！

「う、うわっ。」

「きゃんっ。」

いてて、と目を空けると

僕の胸に樋田が顔をうずめていた。

(普通逆じゃないか？女子が下で、男子が上なんじゃ……ってそんなこと考えるな僕、樋田を起こせ。)

「おい、樋田、平気か？」

と、声をかける。

「は、ハイッ。ほ、ほいじょぶですー！」
と、僕の胸につずまりながら答える。

「とにかく離れる。周りの奴に見られたらやっかいだ。」
そう言つと、

「あ、後、じゅ、十秒このままにさせてくださいッ。」

「あ、あのなあ。十秒ただぞ。」

こんなの何がいいんだ。周りの奴に見られたら、後がめんどくさい。

そして十秒後。

「おい、十秒たったぞ。離れる。」

「夢みたい……。」

顔を上げた樋田は、夢の中みたいな顔をして浮かれている。

「ほら、練習始めるぞ。」

「は、はい。」

訓練後、樋田と寮まで帰った。

寮に戻ると、神崎が部屋を要塞化していた。

「な、何やってんだよッ！」

「要塞化よ。ボディガードの基礎の基礎でしょ。」

ここは、はむかはないほうがいい。

「ほどほどにしといてくれよ。」

そう言って自分の部屋に戻る

ちなみに、キンジは自分の寮で寝ている。狭すぎるからな。

夕飯の時間になると、白雪の作った中華料理が並んでいた。

「う、うおお。これ、白雪が作ったのか？」

「う、うん。樋田さんにも手伝ってもらいましたけど。」
と、キッチンから樋田が照れくさそうに顔を出した。

こっちに来たキンジも、中華料理フルコースを目を丸くして驚いている。

「さ、食べてください。」
アリアは何でか知らないがモモマンを食べている。

その後は安らかに眠れることができた。

12章 安らかに眠らせてください(後書き)

感想まっています。

13章 かごのとり(前書き)

じみちに書き続けています。
今日は徹夜するかな。

13章 かこのとり

（9日目）

体育館みたいな強襲科施設の中で、いま僕はビミョーに似合ってるエレキギターを提げている。
借り物のソリッドギターで軽音の練習をしている。

「I'd like to thank the person
感謝させてほしいよ」
ボーカルじゃないが、小声で担当のイントロ・パートを繰り返す。

隣で練習してる、キンジはチアの練習をしている女子たちを見て、嫌そうに顔を伏せた。

（まあ、無理もないか。）
チアの衣装はいつもの制服より短いスカートを、着用している。
あいつが間違えてヒステリア全快になったら、大変だ。

どうやら、神崎もチアで出るらしい。
白雪はチアの監督をしている。

星伽の者は、あまり目立ったことはしてはいけないのだ。

僕とキンジは、ギターを片付け、階段を上がり屋上に出て仰向けになる。

暖かい日差しを浴びて寝ていたら、隣から

がしっ！ぼかつ！

とゆう、鈍い音が聞こえる。

キンジの方を見ると、

「なにサボってんのよ！ちゃんと白雪をガードしなさい！このポンコツ！」

と、神埼がキンジの耳の脇にストンピングを落としていた。

「あ、アリアっ？」

キンジがマヌケな声を上げた。危険そうだから、僕は、さりげなく屋上を退散する。

後ろからうめき声が聞こえる。

（まあ、生きて帰って来いよ。死んでも葬式は挙げてやるから。ごめんナ。）

と、一応、謝っておく。呪い殺されたらたまんないからな。

寮に戻って、この間、樋田と交換したサバイバルナイフを研いだりして時間を潰す。

それでも、時間が余ったので帰ってきた白雪に声をかける。

白雪にもらってきた広告を渡す。

「・・・5月5日、東京ウォルトランド、花火大会・・・一足お先に浴衣でスター・イリュージョンを見に行こう・・・？」

と、読み上げた白雪が、「？」と僕の方を向く。

「お前、キンジと行って来いよ。」

「えっ！」

「お前も、たまにもこつゆうの行ったほうがいいぞ。葛西臨海公園からでも見れるから。キンジには僕が言っというてやるから。」

「で、でも……私……。」

「星伽か？」

コクリ

と、頷く。

「だいじょぶだ。一応それアドシアード前だから。」

「で、でも……。」

「行けって。お望みならば、僕も影からついてってやっから。」

そう言つと

「お、お願いします！」
と、張り切るのだった。

帰ってきたキンジにこのことを言うと、最初は拒んだが一応同意してくれた。刀つてのはいい脅し道具だよな。
神崎はキンジと、あの後喧嘩して帰ってこない。

それを聞いて白雪と樋田は喜んだが。

まあ、コレで一件落着いたのだが、樋田が僕と、花火見たいと言ったのは納得できない。

13章 かごのとり(後書き)

感想待ってます！

14章 護衛の苦勞(前書き)

更新空いてゴメンナサイ；
忙しいもので；

14章 護衛の苦勞

（10日目）

なんだってこんなことになっちまったんだ？

白雪の護衛じゃなく、樋田の相手をしなくてはならなくなった。それにしても、浴衣を着た白雪と、樋田はきれいだ。日本女性って言うのかな？

「まったく、憎めないよなあ。」
と、本音をこぼす。

「まったくだ、こっちはいい迷惑なんだ。」
と、キンジ。

まあ、お前のヒステリアのことも分かるが、どんだけお前は女が嫌いなんだ？
こんなにも、美人な奴と肩並べて歩けるんだから、少しは喜べよ。
僕は樋田だから一筋じゃいけないんだけど。

「ほら、もう時間だ。周りは見張ってるから、楽しんで来い。」
と、キンジ or 白雪に言う。

「はい！護衛お願いします！」
張り切る白雪だが、

「んじゃ、いくかあ。」
と、散歩ぐらいの事にしか思っていない、キンジ。
案外お似合いかも？

「よっしゃ。僕たちもいくかあ。」
と、後ろでもじもじしてる樋田に、話しかける。

「は、はひひひひ。」

お、おい。日本語もまともに喋れてないぞ。

まあ、そんな樋田はスルーして寮を出る。

モノレールから乗り換えてゆりかもめ、りんかい線、京葉線、と乗り換える。

こんな時は、樋田と喋っておきたかったが、樋田がテンぱって喋りかけるどころじゃなかった。

そのまま、樋田が一人ごと云ってる間に葛西臨海公園についた。今のところ問題は起きていない。

「あ、あのおう。カー君？」

「なんだ？」

嫌な予感が。

「こっこ、れて、デ、デート、み、みたいじゃない・・・？」
ほら、いきなりこれだ。

「まあ、ほかの人から見たら、そう見えるかもしれないな？でも、これは護え・・・。」

護衛といおうとしたら、樋田が、大声をだした。

「そ、そうですよね！デートですよね！」

ちよ、なんだいきなりッ！

「いや、これは・・・。」

「デートなんですッ！花火を見に来たカップルなんですッ！」
お、おい！周りの人がこっち見たぞ！護衛が目立ってどうする。

「わっ、分かったから大声出すな！目立つたらッ。」

「分かったって・・・！じゃあ、手をつないでくださいッ！」

「何でだよ！」

「コレはデートなんですッ！だから手を！」
と、赤面しながら樋田が手を差し出してきた。

(ちくしょう・・・。なんでこんなことに。
と、ため息をつき、しびしび手をつなく。

わぁー！と、喜ぶ樋田。

さりげなく、綺麗だから手をつないで喜んでる、俺、がいることも、
事実なんだが。

「つかれるなよ。護衛が目的なんだからな。」

ドーーーーン・・・パチパチパチ・・・

砂浜のベンチに座って花火を見る。白雪オーキンジは自分の視界の隅に入るところにいる。

「綺麗だね・・・。」

「ああ。たまにはこんなのもいいかもな。」

「なんでだろ。夢みたい・・・。」

「夢？大げさだろ。花火は結構やってるだろ？」
と、苦笑いする。

「ううん。花火じゃなくて、カー君といるのが夢みたい。」
？

なんか凄い事言わなかったか？

「？。そんなに僕は遠い人だったのか？」

「私はDランクの落ちこぼれ立ったから・・・。Sランクのカー君は
かっこよかった。」

「……そんな風に思われてたのか。どつりで練習中、視線を感じる訳だ。」

「でも、パートナーになることでカー君に近づけた。」
「だから、狼騒動の時あいつがいたのか。ストーカーすれすれだな。気付かなかったが。」

「そうしてる内に、カー君のことが忘れられなくなった。」

「……。」

「好きになっちゃったみたいなんです。カー君のことが。これからはずっと近くにいてくださいッ」

「……。」

「ありえん。告白されたことは1回もないぞ。暴力性の人格のせい？」

「……。」

「お前、まじか？」

コクリ

と、赤面しきつた顔でうなづく。

そのしぐさに、アウト。

俺が出てきた。俺の本能が反応する。

とっさに樋田を抱き寄せる。

パアアアン！

「！！！！」

そう、魔剣に狙撃されたのだ。怪しげな人影は察していたが。浴衣姿で防弾服を着ていない樋田を、かばって俺が身代わりになることを知ってて。

「ぐううう。」

防弾制服を着ているとはいえ、この痛みは何回くらってもきつい。

「だ、大丈夫ですかッ！」

魔剣の銃口が、黒光りする。

「く、クソッ！」

DEをホルスターから抜き出す。

パアアアアン！ ドウウン！

2つの銃声が響く。

魔剣の放った銃弾は軌道がそれた。

（役に立ったな。キンジから教わった、銃弾撃ち。）

DEの威力を借りて相手の軌道を計算し、敵の銃、相手の弾を捕らえ掠めてそらす技。

「銃弾鏡撃ち」

俺の弾丸が魔剣の銃を捕らえた。

n e x t ! ! ! ! !

14章 護衛の苦勞（後書き）

ちよつと魔劍戦に力いれました。

楽しんでくれたら幸いです。

15章 魔剣戦〜人工なぎさ戦〜(前書き)

魔剣戦です。

感想待っています！

15章 魔剣戦く人工なぎさ戦く

「お前はココで見張ってる！」
立ちすくんでいる樋田に叫ぶ。まだ白雪たちは気付いていない。
好都合だ。あいつらには気付かれてほしくない。

水凧ノ大蛇を抜き、白雪からもらった護符をポケットにいれ、草むらに走っていった魔剣を追う。

「くれぐれも俺を追いかけなよ！ココを見張っててくれ！」
そう言い残し、水凧ノ大蛇を片手に走る。

「たたく何だつてこつなつちまつたんだ。」

暗闇と氷が混じる木々の間を走りながらそう思う。

魔剣はすぐに見つかった。

空気が凍ってくれていたからな。

切れ長の眼は、サファイアの色。

2本の三つ編みをつむじの辺りにあげて結った髪は、氷のような銀色。

魔剣、ジャンヌ・ダルクはまさに西洋の歴史映画にできそうな

――美しい白人。
前と同じ、銀の甲冑。

「はじめから、素顔をさらすのはお前が始めてだ。」

「関係ねえな。コレが最後なんだから。」

「まだ、分からないのか。刀間。お前を襲っていることが？」

「しらねえーよ、そんなの。知る価値もない。
水凧ノ大蛇を構える。」

「今日は話し合いで済ませようと思ったのだが、やはり闘るしかないのか。」
と、魔剣が小さく、ため息をつく。

「ああ？話し合いだア？話し合いで済むわけねえーだろ。」

「そのとおりだ。」

周りの温度が一気に下がる。

「力を解放しろ、刀間。」
と、俺につぶやく。

「こんな所で解放なんてするか。しなくとも勝てる。」
まだ、アレは使いたくない。使っではいけない。

「力づくでも、使わしてやる!」

ガギイイイイン!!

水風ノ大蛇で聖剣デュランダルを受け止める。

「ッ！」

バックステップを踏み切りかかるが、軽々しくよけられる。

やはり、まだ、刀捌きが遅い。奴を捕らえられない。

デュランダルの二激目が迫る。

バ、ギギギイイイン!!

何とかかわした。

「く、そっ！」

重い! 2mの刀を捌くには・・・!

「ち、くしょう!」

デュランダルの3激目が迫る。

「そんなものか！刀間ッ！」

ズウウウン！

デュランダルが空を斬る。

ガスウウ！

デュランダルは地面を刺していた。

「ッ！！」

魔剣が汗を浮かべる。

「やっとヤル気になったか！水刃！」

ちよつと違うな。

低い音が混じった声で言う。

アルケミーデリバランス
「魔力解放。」

「そうだ、それでいい！」

興奮しながらも焦っているように見える。

「残念だが。今の水刃は、風のみだ。半分しか、解放されてない。」
そう、アルケミーデリバランス魔力解放。しかし、半分しか解放しなかった。

「お前の思い通りにならないためにな！」

毎秒10mの速さで、駆ける。立ちすくんでいる魔剣目掛けて。

ズギイイイン！！

聖剣デュランダルが吹っ飛ぶ。風の強さのせいで。

「もう、あきらめろ。」

と、風の力をまとった、大蛇を、しりもちをついた魔剣に向ける。

「さすがだ、刀間一族の力は。」

と、魔剣の影が揺らめく。

あっ。

また逃がししまった。

魔剣は銀氷に消えて行った。

「もう、来るな。」

と、銀氷につぶやく。

来た道を引き返していると、俺を探しに来て、迷った樋田に会った。

「カ、カーくうーん！」

と、樋田に抱きつかれる。

「怪我はツ！？大丈夫ツ！？心配したんだよおツ」
と、泣き始める樋田。

「ほら、大丈夫だから。護衛に戻るぞ。」
と、慰める。

その後は、何もなく花火を鑑賞し、普通に帰った。

――――魔力解放の事は、まだ、
言えない。

15章 魔剣戦〜人工なぎさ戦〜（後書き）

刀間凄いですねえ。

キャラ崩壊スレスレです；

感想待ってます！

16章 再戦(前書き)

感想まっています

16章 再戦

（111日目）

連休が終わり、アドシールドが始まった。

僕たちの演奏は、閉会式なのでその間は、短縮授業と手伝いだ。

短縮授業時の、白雪の行動は少しおかしかった。

優等生である白雪が、授業中ポケーツとして、答えられなかったり。人の話を聞いてなかったり。

ただ、俺は何かを感じていた。僕では分からない何かを。

今は、校内を適当に歩き見回っている。

とくに変わったことはない。暇としか言いようがない。

俺と一緒に見回ってた鉦が暇そうにつぶやいた。

「お前、このごろ樋田とうまくいってんのか？」

「パートナーとしては、普通に過ごしてるけど？」
いきなりなんだよ。

「パートナーじゃなくて。星伽さんと樋田どっちがお前のタイプなんだよ。」

「どっちもありえん。」
なぜ、白雪の話になる。

「そうかあ？お前と2人は3角関係だつて、噂だぞ。」

「ああ？聞いてねーな。僕には関係ない。そもそもそう言う関係じゃないし。」

そんな噂流したのは誰だ。DEで蜂の巣にしてやる。

「いや、結構いい線だと思っぞ？」

「いや、樋田は知らんが、白雪はキンジだろお？よって、ありえん」
まあ、樋田は昨日の件もあるからな、スルーしておこう。

「まあ、そうかもなあ。二股だつたりするかもよ。」

「心配すんな。白雪とはそう言う関係じゃないから。」
樋田は昨日の件は忘れていたみたいな感じだった。

「自分で分かるもんじゃないだろ。まあそうゆうことにしておくか。」

「じゃあ聞くな。」
と、ため息をついた後、白雪からメールが届いた。

(刀間君。地価倉庫の火薬庫に今すぐ、来てください。)

ああ？

なんで学校をぶっ飛ばすぐらいの火薬が適当に並んでいる、危険区域に行かなくちゃ行けないんだ？
そう、尋常じゃない。

あいつはこういう冗談は書かない。

あいつの身に何かが起こった、と本能が察した。どうせ魔剣絡みだ。

「わりイ。ちよつと急用。」
と、ウィルディンピストルの弾丸とDEの弾倉を確認する。
水風ノ大蛇も隠し持ちしてある。

「ちよ、お前シフト終わってないだろ！」

「だから、急用だ。後は任した！」
と、廊下を走り抜ける。

地下倉庫の火薬庫。

そこには武偵高を丸々吹っ飛ばすほどの、火薬が保管されている。
しかも適当においてある。

そこでもし、跳弾が、イケナイ物に当たりでもしたら、武偵高の教師、生徒、アドシアードの優秀な選手、報道陣……多数の死者が出る。

今は、その最も危険な火薬が置いてある、大倉庫といわれる場所の前にいる。

……後はココだけだ。

赤色灯の明かりだけを頼りに、背に隠しておいた、大蛇を取り出す。
ココで拳銃は使えないだろう。

「KEEP OUT」「DANGER」などの警告をくぐる。

そのまま、足音を殺し柵の横を通る。

進むと、山積みになった火薬の箱の隣に、巫女姿束の白雪がいた。

姿は見えないが、多分魔剣と話しているのだろう。

呼吸を早くし、俺を呼び込む。

「どうして私をほしがるの、デュランダ魔剣。大した能力もない……私なんかを。」

白雪。その声は怯えているように聞こえる。

「お前もいい原石だ。その能力を磨きたいだけのこと。デュランダ魔剣。ジャンヌ・ダルク。」

「だが、お前が本命ではない。お前を越すものが欲しいのだ。」

「刀間君のこと？」

「そう、刀間を呼ばせるために、お前をココに呼んだ。」
プルツと、白雪が体を震わす。

「だ、騙したのね・・・！」

「騙してはいない。お前もいい原石だといっただろ。刀間の捕獲後、お前もイ・ウーに連れて行く。」

「カ、刀間君は、あなたなんかより確実に強い！絶対に負けない！」と、怒鳴る白雪に対して、魔剣は静かな声で答える。

「そう、魔力では負ける。しかし、私には策がある。前は迂闊だった。」

「前回？いつの事？」

「聞いてないようだ。私は昨日、葛西臨海公園で刀間に負けている。」

白雪が驚いた表情をする。

「そ、そんな。私は聞いてない！」

「本人がそうゆう風に動いたから。今日は再戦だ。お前には見ていてもらおう。」
と、金属音がする。

「な、なにをッ！うっ・・・！」
駆け出したい衝動を抑え、様子を伺う。そこには白雪はいないかわりに、魔剣が立っていた。

「白雪に何をした。」

魔剣のところにゆっくり、歩き、向かう。

「殺してはいない。少し縛っているだけだ。」

「ココで再戦か。ふさわしくないが、やるか。」
体に力を込める。

「ココじゃないと、お前がやりにくいだろう？」
お互い、剣を構える。

「ありがたい心づかいだ。無駄だろうがな！」

バツッ！

剣が交差する。

16章 再戦（後書き）

感想まっています

17章 最終決戦（前書き）

だいが小説っぽくなってきました

刀間君のオリジナルストーリーも他で連載予定です。（未定

感想待っています。

17章 最終決戦

グギイイイン！

倉庫に音が響く。

今の戦況は4：6で押されている。

「又グオオオツ！」

バギイイツ！

あばらをやられた。防刃とはいえ衝撃には耐えられない。

「どうした、前の勢いは。ドウシタ！」

「ぬ、ぬぐううう。」

お、おかしい。前より魔剣の魔力が増している。

（やべえな。このままじゃ……。）
使ってしまう。アレを。

「私の魔力も底がある。早く終わらせようじゃないか。」
聖剣デュランダルを振りかざす。

「クソツッ！」

バチイイイイン！

とっさに構えた大蛇で受け止める。火花は水の力を借りて、極力抑えている。

「お前も学習能力がないな。刀間。」

「お、お前に言われたかないッ。」

グギギギギイイイン！！

魔剣に押される。

ピキピキピキピキピキピキ……

「ッッ……！！」

文字どおり足が凍っていた。

(やられたッ！)

「ポケットにあった護符はとっといっておいたぞ。」
なっッ！

左手でポケットを確認する。

なかった。

(や、られ、た！)

「どうする？私に付いてくるなら命はやるっ。断れば斬る。」
魔剣が剣を構える。

「て、てめえの仲間なんかなるもんか。グフッッ！」
い、痛ええ。

「フフフ。その体で強がったことを。」
確かに、俺の体は限界を迎えてきた。

「う、うるせえ。」

「さあて。ならば一振り。」
冷たい笑みを浮かべる。

フ、不利だ。

一応大蛇を構える。

バギイイイイン！ ガギイイイイン！ ズギイイイイン！

魔力を暴走しない程度を引き出し、応戦する。

「さすがだ。その体制で、よく受け止められるな。」
追い討ちをかけるように、魔剣が足部分を狙ってくる。

「ぬ、ぬぐうおッ！」

今度こそやられた。本気でやられた。

腹筋部分が痙攣し始める。

は、初めてだ。こんな感覚。

腹がえぐれる感覚。痛み、力がみなぎる感覚。

「ぐ、ぐおおおお・・・。」

剣を構える魔剣が呆然と俺を見ている。

痛みを耐え切れず、床に倒れる。

「お、おい。刀間・・・？」

魔剣の掛け声さえも聞こえない。

「大丈夫か！刀間！」

・・・この声は・・・キ・・・ンジ・・・か？・・・なぜアイツが・・・。

「刀間！助けに来てあげたわよ！」

・・・神崎・・・？なぜ・・・来るな・・・お願いだから・・・。
いや・・・来るな・・・。絶対に！

「そこにいるわね、魔剣！未成年者略取未遂で、逮捕するわ！・・・
つて。ちよつと待ちなさい！」

く、来るなあッ！

「キンジ！あんたは刀間のキープ。私は白雪をキープするから。」
来るな。お願いだから。
残り時間が少ない。

「大丈夫か？刀間。今剥がしてやつから。」
身を削り、声を出す。

「く・・・来るなアア。・・・早く奴を追え・・・ツ。俺は平気だ。
・氷は剥がすなッ！」
後のことを考えているからな。

「アホか。その体勢でよく言うよ。」
・・・アホはお前だ。・・・どっか行け。
ぐうッ！まだ痛む。

「お願いだから・・・剥がすなッ！」
力をこめて、怒鳴る。

そんなことは無視し、氷をキンジがバタフライナイフで、剥がし始める。

この馬鹿野郎！

バギイッ！

キンジの顔を殴った。

「つてえ。お前何すんだ！」

「お前こそ何やってんだ！早く追え！俺は平気だから！」
くそつたれ。今のせいで意識が薄れ始めたじゃないか。

「……。お前正気か？」

「正気じゃないから、行けってんだろ。早く行け。」

「……？」

頭に？を浮かべながら、こつちをみながら神崎の方に駆けていった。

（まあ、これで良かったんだろう。白雪もキープされるだろう。）
だが、問題はコレだ。

この、
ムゲンカクセイスイジン
無限覚醒水刃

本領が半分以上出始めている。
意識が朦朧とし始めている。

ムゲンカクセイスイジン
無限覚醒水刃とは

俺の先祖代々続く危機回避魔力能力の事だ。

俺の一般グレード（G）は5。普通だ。

魔力全快Gは普通21。世界でも刀間一族ぐらいしかない。
それは、無限覚醒水刃時の話だ。

魔力は半端なく上がる。
だが、正気を失う。

物事をなぎ倒す事しか考えず、仲間も傷つけてしまう。

それを、俺の一族はそれを制御して身を守っていた。

だが、それをまだ俺は使った事はない。

親にこの事を聞いてはいたが、そう言う場面にあつた事がなかった。平凡だったがために。

先祖も30歳過ぎから使い始めるのが普通だった。

俺はまだ、16歳だ。

使いこなせる訳がない。

30歳から使い始めて、制御に失敗し殺された先祖だっている。使いこなせる訳がない。

(俺の人生どうなってんだ?)

一族の中でも異常な人生を歩き始めている。

………そこで意識を失った。

17章 最終決戦（後書き）

無限覚醒水刃の内容が明らかになりました！

次章、魔剣戦一番の山場です。

感想待ってます！

18章 暴走魔力 もはやチート(前書き)

魔剣戦終盤です。刀間君がジャンヌさんを蹴散らします。

ファンの皆さんゴメンナサイ。

18章 暴走魔力 もはやチート

今、覚醒中の僕が何をしてるかって？

そんなの決まっている。

封印時にやられたツケを、返しに行こうとしている。
あんな薄っぺらい氷に、身を封じられたなど僕もおしまいだな。

まったく。

魔剣と、・・・えーと、ああ。白雪はすでに戦闘中だった。
なぜかは知らないが、ヒステリアモードになっているキンジと顔を
赤らめている神崎は、その戦闘を観察していた。
邪魔したらまずいので一応気配を消して見守る事にする。

ふむ。理解はできたぞ。

今の戦況は7:3

白雪が押している。

あいつも僕と似ている封印を解いたのだろう。

たしか、あいつのGは17。

17はこの世に数人しかいない。

しかし、Gが多い奴は体力消費が早い。
それを知っている、神崎とキンジが隙を狙っている。と、いったところだろう。

予想どおり白雪が力尽きへたり込んだ。
魔剣が剣を振り上げ魔力を溜める。
駆け出しかけたキンジを神崎が止める。

(ふむ。神崎も分かっているのか。それが正解だ。)

一方の白雪も気付かれないように、刀に魔力を溜めている。
そのタイミングにあわせて、奇襲しようとしているのだろう。神崎は。

魔剣が魔法を放とうとした時、神崎が日本刀2本を構えて、近くに
あった巫女服？を魔剣の前に被せた。
これで一瞬、魔剣の視線が妨げられた。
そこに3点バースト、フルオート改造された、ベレッタM92Fが
火を噴いた。

(うん。いいんじゃないかな?)

と、感心していると事件が起きた。

神崎が被せた巫女服？をキンジが踏んで転びやがった。

(どこまでドジなんだか。)

転んだキンジを聖剣が入る。

防刃制服を着ていたから、切り傷はできていないだろうが骨は折っただろう。失神したし。

白雪が何かを叫んだ。聞こえないが。

(僕の出番か……。試し切りさせてもらうぜ。水風ノ大蛇の!)
気配を現す。ゆっくりと歩む。

こっちに気付いた白雪が、魔力を魔剣に打ち当てようとしたが、僕の表情を見て攻撃をやめた。

「おい、コラ、魔剣。」

と、強制的な言葉でこっちに気付かせる。

「か、刀間ッ！」

神崎もこっちに気付いた。

「刀間！あんた、もう大丈夫なの!？」

「ああ、お前はどいとけ。」

あ、ちよつと・・・!

と、言いかける神崎を睨みつけてその場に静止させる。
頭を殴りつけて失神させてもいいんだが。

「久しぶりだなあ。魔剣。」

「お、お前、まさかッ・・・。」

「そう、あなたの察している通りで、今は覚醒中だ。Gは21。」
ビクツと魔剣の身体がこわばる。

「だ、だが。Gが高いほど体力消耗は早い。わ、私はそれに耐えられ
ばいいだけだ。」

ははっ。声が震えているぞ。怖がってるんじゃないか。

「そう、その通り。君は前より魔力が増してるからねえ。みくびる
とまずいよなあ。」

「だ、だったら……。」「
震える魔剣の声を遮る。」

「だから、俺はコレを使う。」
と、防弾制服を脱ぎ、コレを隠しているプロテクターを外す。

「な、なにをツ・・・あっ！」
魔剣が、コレを見て小さな悲鳴を上げた。
コレとは、

「無限体力（the infinite strength）!!」

腹筋にある刺青、いや腫れ痕。

真ん中に先の割れた刀、水凧ノ大蛇。

両サイドに、水でできた龍「水神」葉で覆われている龍「風神」

横にいる白雪とアリアは口をあけてポカーンとしている。

ただ、一番驚いているのが、魔剣、ジャンヌダルクだった。

「そ、そんな。バ、バカな。無限体力は伝説じゃないのか・・・ッ。

もう、動揺を隠しきれしていない。

これ以上いじると可哀想か。

「さあて。さっきの復讐タイムとしますか。」

魔剣に歩み寄る。

「ちょ、ちよつと待て。私はお前をスカウトしに来たただけだッ。落ち着け！」

「うつせえ。黙れ。」

殺気を部屋に溢れさせる。

「なッ！うわあッ！」

風の力で転ばせる。

ザクッッ！

大蛇を転んだところに突き立てるが、とっさに魔剣がよけた。

「ハッッ！」

魔剣が立ち上がり氷をまとい始めた聖剣を振りかざす。

ズバアアアン！

水が舞い魔剣を叩く。水凧ノ大蛇に死角などない。

「グアアアアッ！」

水で叩いただけだから死にはしない。軽トラックにひかれた衝撃ぐらいだ。

「ほおおら。」

ドバババババン！！

もはや無双。魔力を借り超高速のつきを甲冑に突く。

「グ、グガアア！」
もう、魔剣は闘う気力も出ていない。守ると言う本能しかない。僕の体力はいわばチート。尽きない。

「そろそろ、終わりなんじゃないか？お嬢さん？」

「ハア、ハア。グッ！」

スパツツツ！

風の刃を打つ。甲冑が壊れない程度の。

「ぐううううううー！」

氷のバリア？で防ごうとするが失敗。
魔剣の身体が後ろに吹っ飛ぶ。

ズザアアアア・・・バンツツ！

壁にぶつかった。

「ぬぐううあッ！」

もう、魔剣は戦闘不能。死んではいない。

ふうう。

と、ため息をつく。

「うっし。逮捕しちゃっていいぞ。」
後ろで固まってる二人に声をかける。

しまった。白雪はともかく、神崎は何にも知らなかったんだっけ。

「おい、早くしろ。」

と、神崎に声をかける。

「えっ？あッ。うん。」

てばてばと、気を失っている魔剣の手首に、対超能力者手錠をかける。

「コレで良かったんかなあ？」

と、驚きと尊敬の交わる視線を感じながら、呟く。

18章 暴走魔力 もはやチート（後書き）

刀間君もはやチートなんです。

ジャンヌさんスイマセン。

ファンの皆さんもスイマセン。

19章 ドレイ3号！（前書き）

魔剣戦最終章です！

19章 ドレイ3号!

「I'd like to thank the person . . .
(感謝させてほしいよ . . .)」

イケメンの不知火のボーカルと、キンジと僕がかき鳴らすギター
のFマイナー和音で、アドシールド閉会式のアル＝カタが始まる。

地価倉庫の出来事は反省している。

白雪、ましては神崎に無限覚醒水刃を見られてしまったことを。

これ以上神崎にこき使われたくない。(口止めはしておいた)

「Who flash the shot like the bang bang bang bang a? (バンバンバンってあの一閃は、誰が?)」

曲が急にアップテンポになると同時に、左右からポンポンをもったチアガール姿をした女子どもが笑顔で舞台上がってきた。舞台袖でもじもじしていた白雪も。

(星伽って、こういう目立ったことはしちゃいけないんじゃない?)

「あーもう!ここまで来て何言ってるの!ほら出る!」
そう言うことか。神崎のせいだ。

「Each time we're in flooooooo

nt of enemies! We never hidden
sneak away! (敵の真ッッッ正面にでたって、逃げ
隠れなんか絶対しない)「
白雪は後で星伽にこっぴどく、しごかれるだろう。

隣のキンジは、周りが女子だらけなため、視線をどこにするか焦っている。

「It makes my life change at all
I do a magic! (それが私の人生を一変させたんだから
!)」

アドシールドは、これにて一件落着となった。

..... 僕の人生も一変しちゃったよな？主に神崎のせいだ。

打ち上げがファミレスってのはどういうことだ。

バンドの男衆は、1次会もここだったんだぞ。

神崎がおごってくれるらしいんだが。何故だ？キンジは不満な顔を
してるし。

お絞りで手を拭いて待っていると。

「白雪に話したい事が。」
と、神崎が言った。
不審に思い、キンジと顔をしかめる。

「はですか？」
一応聞いてみる。

「あつ、別に平気。あんたたちにも聞いてもらいたいから。」
ますます顔をしかめる。
僕たちにも聞いてほしい事？
嫌な予感しかない。

「……白雪。あんたも、あたしのドレイになりなさい！」
びしっ！と白雪を指す。

「ありがとう、白雪。」
ん、神崎？今の文脈おかしくないか？

「魔剣を逮捕できたのは3割あなたのおかげよ。4割あたし、2割
刀間。」

よりによつて僕は2割なのか？酷いなあ……。

「今回は、3人でやって勝てた。それは認めるわ。」
うーん。そうかなあ？

「あたしのパーティーには特技を持った仲間が増えるのはいいこと
なの。白雪みたいなのがね。」
一方白雪は……ドレイなんて……でも……キンちゃん……
刀間君が……いるなら……。
などと、呟いている。

「とゆうわけで契約は満了したけど、今後はキンジもしくは刀間と一緒に行動すること。今後も自由に刀間の部屋に入ってよし！」

「ありがとうアリア！ありがとう刀間くん！キンちゃん！」
ま、マジかよ。僕の寢床の確保が危うい！キンジは床に転げ落ちて
いる。

各人の料理をウイトレスさんが運んできてくれた。

「はい！じゃあドレイ3号の誕生にCheeeers！（カン
パーーーーーイ！）」

「勝手にしろおおお！」

ガチン！

と、キンジと二人でやけくそになりながら、乾杯するのであった。

まったく。

白雪は、打ち上げの足で女子寮から荷物を持ってきやがった。
神崎もトランプ柄のケースをもって僕の寮に住み着く事になった。
そして、樋田も家で待っている有様だった。

その日も、もちろんくつろげるはずがなかった。

19章 ドレイ3号！（後書き）

聖剣戦が完結しました！

次はブラド戦です！

これからも、武偵高く紅い目をよろしくお願いします！！

20章 情報収集(前書き)

ブラド戦開始です！

理子が一回も出ていない(泣)

レキも出番少ない(泣)

20章 情報収集

（12日目）

教務科から魔剣の事は「他言無用」と言われただけで、何のペナルティーもなかった。

寮に帰った僕は、PCを開いて調べてみる。

魔剣が言っていた「イ・ウー」についても気になる。それと、魔剣の本名ジャンヌダルクも。

「イ・ウー」と打ち込むがくだらない物しか出てこない。（英語のスペルが何とかとか。）

次に「ジャンヌ・ダルク」と打ち込んでみる。

これは当たった。

内容はこうだ。

ユリウス暦 1412年1月6日 - 1431年5月30日）
「オルレアン乙女」とも呼ばれるフランスの国民的英雄であり、

カトリック教会での聖人であった。

コンピエーニュの戦いで捕虜とされ、宗教裁判で異端者と断罪されてしまい、ルーアンで火刑になる。

ん？

火刑？

ここで考えてみよう。

？もし、ジャンヌダルクの先祖だとすると？

そうになると、火刑を受けたのは影武者。とゆうことになってしまっ
が。

？何かの効果があるため、名前を偽った？

？魔剣がただ、単純に、ジャンヌダルクに憧れていて、偽った名前
を使っていた？

そのぐらいしか考えられない。

？と？は薄いはずだ。

そもそも、あいつは「策士」と言われている。しかも貴族。嘘はプ
ライドが許さないはずだ。

何かの効果があったとしても、あいつはむやみに名前の事を言っ
ていなかった。

そうなるん？が有力になる。

実際、俺の先祖もからがら、生きてきたんだからな。

って、一人で考えても絶対分らないな。誰に聞いても分らない
だろうが。

と、半端な気持ちでPCを閉じる。

昨日から3人の女子が正式に（？）僕の寮に住み着き始めた。

白雪は堂々と家事をするようになったし

神崎はギャーギャーうるせいし

樋田なんか24時間体勢で僕に話しかけてくるし

キンジが寮に来るとアリアと白雪が喧嘩を始めるし。

そうになると、くつろげる場所は学校しかない。今日は登校拒否ならぬ下校拒否気味だ。（キンジも下校拒否仲間だ。）

不知火、武藤、キンジで喋っていると、途中キンジがアリアに呼び出されて、女子寮に走っていった。

「キンジとアリアって両思いだよなあ？」
僕に武藤がぼやく。

「うん。見ていて、微笑ましいよ。」
不知火。お前の笑顔のほうが微笑ましいよ。

「まあ、アリアはドレイとして扱ってるだけだけどなあー。おかしくもないか。」

見ていてこっちの寿命が縮まるほど、危険だな。

「なあ、刀間。このごろお前と星伽さんって・・・その、うまくいつてんのか？」

武藤が聞いてくる。

「白雪か？別にい。何で僕に聞くんだ？キンジに聞けよ。」

「もう聞いたよ。お前と同じような答えだった。」
クスクス。不知火が隣で笑っている。

「第一なんでお前がそんなことを聞くんだ？」

「そ、それは。星伽さんはいったいどっちが気になってんだ？って言う噂が流れているからだッ。」

だれだ、そんな噂を流した奴。ここに連れて来い。

「どうせキンジだろう。あいつと白雪は幼馴染だからな。」

「そうかあ？1週間前、白雪がお前の寮に行ってたよなあ？アレはなんなんだ？」

ぎくっ。なぜお前が知ってるんだ。

「お前には関係ないだろ。」

そこから武藤を無視して不知火と喋る。

1分・・・3分・・・5分・・・。

「刀間！すまない！」
いきなり武藤が叫ぶ。

「なっなんだよ、いきなりッ。」

「お前が言いたくないプライバシーを無理に聞き出そうとして！」
ど、どうしたんだ。こいつ。

「これからも健闘を祈る！」

「あああ。」

意味が分らん。

隣では、不知火が笑っている。
どうなってんだ？

寮に帰ると神埼はいなく、白雪と樋田が喋っていた。

（それにしてもこの二人。似てるよなあ？）

性格も顔立ちも。

姉妹じゃないか？

白雪がこっちに気付く。

「あ、刀間君お帰り。」

「あ、ああ。」

二人が話を止めた。

二人ともぎこちないな？

僕に聞かれちゃまずいことか？

まあ、そんな感じで今日は過ぎた。

20章 情報収集(後書き)

恋愛進行中!

21章 ジャンヌの警告（前書き）

だいぶ省いちやってる気がします。

それでも楽しんでください！

21章 ジャンヌの警告

（13日）

今日は武偵高で中間テストが行われた。

今は、午前中にぶつ続けで行われたテストと昼休みを挟み、スポーツテストを受けている。

まあ、とにかく普通じゃない。

やってることは50m走などと普通なんだが、集まった生徒、教師が普通じゃないのだ。

生徒は特に超能力捜査研究科などがおかしい。

走り幅跳びなんか、着地したとき少し浮いてたりするし。

教師なんかハンパない。

香港マフィア首領の愛娘で口癖が「死ね！」「殺す！」、人間バンカーバスターのあだ名を持つ強襲科の鬼教師、蘭豹タバコランレオンを授業中にも吸う尋問科の綴つづり。背後に立つと手刀で骨折させられる、狙撃科の南郷なんこう。

もう、逃げたい。

と、考えているとキンジが隣に座ってきた。

「どうだ、いいタイム出せたか？」

「お前よりはいいのは確実だ。」

「俺だけじゃなくて全員だろ。男子N01。」

「うっせえなあ。いきなりなんだあ？」

「ああ、そうだ。お前もある任務に誘いたかったんだが、リーダーに断られちゃった。」

「は？いきなり何言い始めてんだ？こいつ。」

「そんなもの誘ってほしくないがな。リーダーってのはどうせ神崎だろ。」

「まあ、そうだけだな。断られた理由聞きたくないか？」

「ああ？聞く気ない。」

「刀間は強すぎる。桁違いよ。」ってな。どうゆう意味だ？」

「神崎の奴危険発言しやがって。」

「んー。凶暴性の人格のことじゃないのかあー？」

「んははずはない。体育館で引き分けてただろう。桁違いではないよな？」

こいつ。こんな時だけ推理力発揮しやがって。

「さあな。勘違いだろう。俺は身体検査に行くツ。」
まずは逃げよう。これ以上危険な勘ぐりは、されたくない。
おい、コラツまでツ！と言う声を無視して。

身体検査が終わった後、やることのない僕は強襲科専用の体育館で、不知火と銃弾を打撃技として闘う格闘術、アルⅡカタ戦の模擬戦をしている。swatとかで使われているC装備着用が義務付けられている。

バシツツ　びしツツ　ぐぎっ

不知火はAランク

僕はSだが、それは俺の話。不知火といい勝負だ。僕と不知火のアルⅡカタ戦はギャラリーに囲まれている。女子がキャーキャーうるさい。

バク転をして距離を離し、弾切れになったDEを再装填する。
不知火も装填する。

「刀間君。君のせいでギャラリーが増えちゃったよ？」
と、苦笑いする不知火。

「お前のせいだろ、不知火。」
ズウウン！

距離をつめる。

バシツツ！ビシツビシ！ズドツ！

DEは装弾数が少ないため格闘戦を主に闘う。身、一つ分に攻め寄り近距離格闘技で攻める。

ズツツ！ダツツ！ビシビシツツ！ズダツツ！パアアアン！グウウン！

オオー、とギャラリィがどよめきがえる。

「ハツツツ！」

拳銃のグリップで、不知火のヘルメットを殴る。

そして、よろめいた瞬間を突き、防弾ベストに足刀横膝蹴りを繰り出す。

「グツツツ！」

ズウウウン！ズウウウン！ズウウウン！ズウウウン！

吹っ飛ぶ不知火にとどめの、DEを乱射する。

しかし、そこはAランク武偵。吹っ飛ぶさなかに床に手を着き、腕の力で浮き上がり体勢を整え、側転で回避する。

弾切れになったDEを再装填しようとするが、追撃が迫り装填できない。

迫った

不知火がナイフでDEをはじき、ナイフを僕の隣に放る。

（詰められた！）

右は、刃が剥き出しになったナイフ、左には壁、真正面には拳銃を

構え、ジャンプして詰め寄る不知火。

後ろに回避する選択肢もあるが、回避した後、不知火の追撃は避けられない……それなら！

ガウン！ガウン！

腿の裏に隠しておいた、ウィルディピストル2丁が放った、2発の44auto maguが不知火の胴体に炸裂する。

マグナム弾2発の威力に耐えられなかった不知火は、床に崩れる。

ふうー、ため息についてヘルメットを外し、不知火に肩をかしてやる。

その時、ギャラリーのほうから異様な、視線を感じた。

「とりあえず、休憩室に行くか？」

うなだれている不知火に話しかける。

「ああ。ごめんね、刀間君。」

こんな時でも紳士不知火全快だ。

ベンチに座り、模擬戦の事を喋っていると
3回ぐらい会ったことのある、見慣れたアイツが姿を現した。
ベンチの前に立っていたのは……

魔剣、ジャンヌダルク。

三つ編みの美人な白人の魔女は、武偵高の制服を着ている。

「刀間。少し話したい事がある。」

確かに本人である、魔剣ジャンヌダルクは高校棟3号館を指差し、
着いて来いと言う。

「お前、闘わないと、誓うか？」

「誓う。お前に会いに来た理由は、警告だ。」

警告？

魔剣に警告されるのか？

「その前に、何でお前がここにいるんだよっ！しかも武偵高に転校
してみたんだし！」

「まあ。詳しくは中で、だ。攻撃は誓ってしない。」
隣で不知火は？マークを浮かべている。

「悪いな、不知火。急用だ。」
言葉を残し、高校棟3号館に向かった、魔剣ジャンヌダルクの後に続く。

多目的ルームで魔剣に話かける。

「警告ってなんのことだ？魔剣。」

どうせ、アメリカではおなじみの司法取引でもして、ココに来たんだろ。

「人に付けられた、名前は嫌いだ。ジャンヌでいいぞ。」
と、ジャンヌが椅子に腰掛ける。

「分かった、ジャンヌ。早く用件を話せっ！」

「了解した。いきなりだが刀間。イ・ウーという組織は知っているか？」

「お前がぼやいてたから少しは調べてみたが、何も分からなかった。」

「それもそのはずだ。知ったら、お前の存在自体危うい。」

「お前はそこにいたんだろ？」
予想だが。

「そのとおりだ。その中で、私は一番弱い。」
魔剣が、一番弱い？

キンジとアリアが手こずった相手か？

「その組織のN o 2に立ち向かいにいかうとしている。峰理子と、遠山キンジ、神崎Hアリアは。」
それが、キンジの言っていた任務か。

「その火の粉がお前に飛んでくるかもしれないからな。その時は注意しろ。」

「注意？」

「お前の魔力では勝てるかもしれないが、手は抜くな、殺される。」

「……。それだけか？」

「そうだ。それと私は、ここの情報科ですごす事になった。まあその時はよろしく頼む。」

「いやでも、関わりそうだしな。」
と、苦笑いを返し、教室をでる。

それだけじゃない、十分過ぎる。

21章 ジャンヌの警告（後書き）

峰理子知らない方いきなり出してスイマセン。

近々説明をいれます

22章 きつね耳のあの人がつ!? (前書き)

いきなり玉藻を導入したいと思います。

分からない人は知らなくても平気です? ;

22章 きつね耳のあの人がッ!?

（14日目）

今日から、神埼とキンジは任務に出かけている。

3日ほど帰ってこないと言っていたが、長引くであろう。

で、僕の今の現状は、と言つと・・・。

巫女服(?)を着た、小学生並みの、見た目は可愛いが、頭からきつね耳、尻の方から尻尾、と言つた妖怪が、疲れて帰ってきた僕の寮に押しかけてきた。ツテ感じた。妖怪じゃなくある意味、神の一種なんだけどね。

その、見た目は誘惑されまくりそうなきつね耳の、少女(?)に話しかける。

「はあ。玉藻さん・・・。」

玉藻さんはいきなり入ってきて、ソファーに腰掛け、ニコニコ笑っている。

「刀間の。元気にしてたか？」

ああ。元気だよ。昔、僕に戦闘訓練を教え込んでいた、（記憶の中では、確か1000歳を越えている）先生でもあり、神でもある玉藻さんよおッ!

「……マジでどうしたんですか……？玉藻さん。」
できれば、一生会いたくなかったがな。あんたの鬼教育で、何回も死に掛けたんだからな。

「大したようじゃないがお。刀間の。直に聞くが、無限覚醒水刃を解放したのか？ココで、猛烈な水神を悟ったのでなあ。刀間の一族にもシグナルを調べてもらったのじゃぞ？」
うん。一番気になってたことが、今起きましたね。

「スイマセン？確かに使いました。……でも、それは……」

「イ・ウー絡みじやろう。刀間の？」
やっぱり。この、人（？）は何でも知ってやがる。

「……。そうです。魔剣との戦闘時に、解放してしまいました。」
「ふうむ。この歳で、生きていたのはのお。魔剣は討ち取ったのか？」

「討ち取ったって。なんか言い方怖くない？」

「討ち取ったって言うか……。逮捕はしました。一応……？」

「そうか。しかし、刀間の。これからは、あまりイ・ウーに関わらないほうがいいぞ。下手に関わってイ・ウーを崩壊させたら大変なことになるからの。」

「はあ。ほんつと、イ・ウーって何なんですか？何でみんな教えてくれないんだ……。」
と、せがむ。

「次期に分かるじやろう。時に身を任せろ、刀間の。昔もそう教え
たじやろう。」

「はい。嫌な思い出と共に。」
「思い出したくねええ。マジで嫌だ。」

「嫌な思いでじゃと？いい思い出じやろが。それにしても大きくな
ったのお。」
「あんたの背が変わらないかろだよ。と、言つのを堪えて、そうです
ね。」

「ふむ。星伽の白雪と同一年と聞いたが、うまくやっておるか？遠
山侍とも。」

「遠山侍とは、キンジの一族である。代々ヒステリアモードを使つて
きた。と聞いたが。」

「刀ノ水ノ間一族とは切つても切れない関係じゃからの。大切にし
ていくのじゃぞ。」

「はい。分かっています。で、玉藻さんはこれからどこへ？」
「くつろぎ気味の神様に声をかける。」

「夜までココにいるかのお。明るい時に出ると、色々まずいからの。」
「確かに。その耳、尻尾は特に。」

「白雪は、玉藻のことを知っている（らしい）のだから問題はないの
だが、もう一人の不法侵入者である樋田が厄介である。」

「別に良いんですけど、隣の部屋を使つてください。ココには厄介
者がいるので（樋田）。」

「だめじゃ！刀間の生活を観察するためにもココに来たのじゃ！」

「いや・・・だから・・・。」

「だめじゃ。」

そんな感じで、今日はもう一人、不法侵入者が増えた。

（時に身を任せる。いいかもな。）

その後、帰ってきた白雪は、玉藻にひれ伏せてるし

樋田は全力で幼女体の玉藻を僕と白雪の子供だと勘違いし（絶対に間違え方がおかしい）

天国に舞った樋田を現世に戻すのに苦労した。

このごろ、睡眠時間が足りてません。・・・誰か助けて！

22章 きつね耳のあの人がッ!? (後書き)

短く仕上がっちゃいました。

文章が崩れかけてきています(汗
アドバイスお願いします!

23章 迷惑な神様(前書き)

やっぱ、白雪と樋田のキャラ、かぶっちゃってます(泣

23章 迷惑な神様

（15日目）

ありえない。ありえなさ過ぎる！

普通あるか！？女子高校生二人に挟まれ、挟まれた高校生は小学生並みの身長で1000歳超えている、少女をお姫様抱っこしている登校風景はッ！

コレだけで通報されかねない！

事の原因は、まずは樋田の「一緒に登校しましょう。」から始まり、次は白雪の「お供します。」

で、最後の「刀間の勉強態度も観察するのじゃ！」玉藻さんのいっかつ。

さすがに、リアルきつね耳は学校で見せびらかす訳にも行かず、ベビーキャップっぽい帽子をかぶっていて、武偵高の制服を着ている帽子からきつね耳の形が突き出ているが、それはそれでいいのか？

学校では鞠に変化した玉藻さんに観察されて、授業どころじゃなかった。

昼休み、いつの間にか玉藻さんはどっかに行つたみたいだ。
今は、錠と学食で昼飯を食っている。

「ん、それにしても、最近、武偵高ムコウに来た、ジャンヌさんと知り合
いだつたのか？お前。」
「知り合いというかねー・・・？」

「まあ、知り合いつちゃあ、知り合いだねえー・・・。」

「やっぱりか。情報科のPCで、お前のクエスト履歴洗つてたから
なあ。」

「嘘だろおおおおおー！」
やりきれなくて叫ぶ！

「いや、まじで。お前の履歴見るときのジャンヌさん、めっちゃ
笑つてたぞ。」

「弱点握られたああああ！闘るき満々じゃねええええか！」

「お前ら、昔の恋人同士だったりすんのか？」

「ないから！絶対ないから！」

「それにしてもあの人、人気だよなあ。情報科ではもうアイドルと
化してるし。」

「は、はひい、はひい。た、確かにそう言うのもおかしくないよな。」

息を整えながら言う。確かにあの人は美人だし、口調が変わってる

からな。

「さて、刀間の事情聴取と昼飯も終わったんで、帰りますか。」

「……。ああ。そうするか。」

放課後、強襲科の体育館で樋田の練習をしていた。

もうそろそろでいいかな？

と思い時計を見たら6時だった。

「樋田、帰るぞ。」

射撃中の樋田に叫ぶ。

「は、はい！」

駐輪場まで歩く。

樋田の射撃率もかなり良くなってきた。次の試験ではBランクぐらい、頑張ればいける気がする。

「おい、刀間。」

いきなり声をかけられた。

「ああ。ジャンヌか。」

樋田との雑談を中断し振り向く。樋田がムスウと、顔が膨れたのはほっといて。

「再戦の件なんだが、明日の5時の放課後、強襲科でいいな？」

「そんな約束してねえええよ！」

「分かった。明日ちゃんと来るんだぞ。来なかったら冷凍グラタンにしてやる。」

「同意してねえし！・・・前みたいな力は出せないぞ。それでもいいのか？」

「当たり前だ。お前に絶対勝てないじゃないか。」

「勝つ気満々だなー、おい。」

自然と二人とも笑っていた。ノリいいなあー。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

隣から凄い殺気を感じますが、気のせいですよ？ジャンヌは、隣に怖い人がいるのを察知して

「あ。じゃ、じゃあ明日。必ず来い。分かったな・・・・・・・・？」

「あ、ああ。」

こ、コエエええええ！魔剣さんもドン引きして、走って逃げたぞ！

「カー君。・・・誰？あの人・・・・・・・・」

う、うおおおお！逃げたい。こ、怖えええええ！

「うっ、あ、あれは、その・・・・・・・・」

「ウフフフフ・・・・・・・・。美人だったもんね・・・・・・・・。あの人・・・・・・・・」

「うぎゃあああああ！いけない方向に勘違いしてる！」

「か、勘違いすんな！アレは、昔の戦友だ！1年前の！」

「嘘…………。あの人、留学生でうちのクラスに来たばかりだもん…………。」

「うわああああ！しまったああああ！魔剣のことは、他言無用と教務科から口止めされている！」

「本当のことを言うわけもいかない！」

「えーと…………。そのだなあ。ココの案内をしていたら、仲が良くなつて模擬戦を試みたら、はまっちゃつてこの様。みたいな？…………。世界の終わりだあ…………。とか思つていたら。なんと！笑顔になつて！」

「そう、それなら良かった。」

「え、ええええええええええ！助かつたああああああ！」

「さ、行く。カー君。」

いきなり上機嫌になつた樋田と、渋々帰る僕だつた。

24章 銀狼（前書き）

新展開！？

更新遅くなりました；

スイマセン；

24章 銀狼

（16日目）

放課後。今は観戦禁止部屋でジャンヌと戦闘中だ。

空気はすでに凍っている。床もすべるほど綺麗に凍っている。

「クッ、アアアアッ！」

俺は、無限体力を解放しているのに苦戦を強いられる。

ビッ！ガッ、ギイイーン！

大蛇と、軽量化された魔剣デュランダルが交差する。
左手にはDEを持っている。

「お前、絶対強くなってるッ！」
バックステップで回避したジャンヌに叫ぶ。

「刀間にとどきたくてな。」

「褒め言葉として受け取っていいのか？」
言葉と同時に風の魔力を借り、一気に駆ける。

ズバアアアアーン！

床の氷が、一気に剥がれて舞う。

力を一気に込めて、一気に振り下ろすが、さすがの魔力にジャンヌはデュランダルを構えるが、吹っ飛び、半ばしりもちをつく。

「クツ！ハアアアツ！」

ピキピキピキピキッ！

ジャンヌの念で、周りの空気が一気に凍り始める。

それを風のカマイタチではじく。

が、それがまずかった。

ジャンヌに立ち直る隙を与えてしまった。

一気に、デュランダルが迫る。

「ちょッ、マッッ！」

止めるが、遅い。勢いは留まることを知らない。

とっさに、カマイタチで振った大蛇でジャンヌの足を払う。

それこそ、本当にまずかった。

足を払って、ジャンヌがよろめく。が、デュランダルを前に振り下ろす勢いのせいで俺の方に倒れてきやがった！

「うッ！！」

「うわッ！！」

見事、床に押し倒された。樋田ともこんなことがあったっけ・・・

事の重大差に気付いたジャンヌが、こつちを見上げ顔を赤くさせたとき・・・。

ドン！ドンドンドンドン！ドオオオオオオン！

勢いよくドアが開いた。

開けた奴は銀色の狼。「銀狼」

入学式に現れた同じ種類の銀狼。2 m弱。5頭。とっさにジャンヌと離れ、刀を構える。

「お前は左の2頭を頼む！残りはどうにかする！」

「分かった。」

1頭目がこつちに飛び出してくる。大丈夫、コイツとは一回殺り合ってる。相手の攻撃パターンは分かっている。

ガッ！ガ、ガ、ガギン！

相手は牙を使う。リーチは低い。

怯んだ銀狼の胴体に振り下ろす。

が、飛び出してきた2頭目の装備していた鎧にはばかれた。

「えッ。ちよつまっ！」

鎧に止められ、身が怯んでる俺に3頭目の頭突きをくらわされる。よ、よく効く……。

後ろによるめいた俺に、今度は噛み付く。

とつさに刀を構えて防ごうとするが、横腹に牙が食い込んだ。防護服は着ているがそれまでも貫いた。

横腹の痛みを我慢しながら後ろに後退する。

もう、前に3頭現れてる。ちらりと横を確認する。ジャンヌも苦戦しているようだ。

もう、これ以上手間取る訳にもいかない。

刀に力を込め、3頭に対して、横になぎばらう。

ズオオオオオウン！

同時に竜巻を繰り出す。

悪いが、狼にはココを墓場にしてもらう。竜巻の中に水の刃を仕込んでおいた。

霧がさめた時にあるのは、3頭のズタボロにされた死体。

(いやあ、ほんとにスイマセン。今年は狼しか殺していないよな？いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない。ジャンヌの加勢が先だ。)

「ジャンヌ！下がってる！」

指示どおりジャンヌが後ろに下がる。銀狼に向かって竜巻を放つ。

前の3頭と同じような死体が現れる。

「ハアハア。さすがだな、刀間。」

「ウツ、アアア。クハアツ！」

「お、おい刀間。腹をやられたのか!？」

あ、あれえ？さっきまでこんなに痛まなかったのに？焼ける様に痛い。

「クアツ！・・・ゼハアツゼハアツ・・・。」

「か、刀間!？」

僕で・・・こんなに痛い目に・・・あつたのは初めてだ・・・。

あ・・・、れ？

僕？

なんで・・・俺じゃない・・・

の・・・？

・・・気付いたら教会にいた。ステンドグラスから差し込む日差しがまぶしい。

「お前はまだ能力を扱えていない。」

24章 銀狼（後書き）

感想待ってます！

25章 アレは誰だったんだ？（前書き）

<http://ameblo.jp/keitamami/>にて来
示君と樋田を書いてみました。その画像を公開中。

刀間封示君の小説も書き始めました。

25章 アレは誰だったんだ？

閃光の残像が頭から離れた瞬間、目を覚ました。
自分の部屋で寝ていた。すでに傷は癒えている。

「いったいなんだったんだ？あの閃光。あの人影。あの教会は？
刀間一族だったのか？あの人影は。それも気になる。刀間封示とか
言ってたよな？何だったんだ？」

「あつ。刀間起きたか。」
「考えていると、ジャンヌが入ってきた。」

「ああ。お前がココに連れてきてくれたのか？」
「そう聞くと頬を赤くした。」

「ま、まあな。病院よりココのほうが良かっただろう？」

「確かにそうだな。教務科に連絡したよな？銀狼の事は。」

「死体処理も済ませてある。他言無用らしいぞ。」

「そんなに、まずい事だったのか？口止めするほど。」

「そうだ。あの銀狼は、ブラドの手下だ。離し飼いだが。」

「イ・ウーNO2の？なんで僕たちを狙ったんだ？しかも5頭で。」

「私が、お前を連れ損ねたからだろう。」

「なんで僕なんだ？刀間の一族だったら誰でも良いんじゃないか？」

「お前は一族の中でもずば抜けているからな。目を付けられてもしかたあるまい。」

「……………そういえば今日、神崎とキングが帰ってくるはずだったな。」

「ああ。峰理子から聞いてある。任務は達成したらしいぞ。」

「そうか。じゃあ帰って来るな、お前はどうするんだ？」

「星伽と話たい事がある。ここに星伽は帰ってくるよな？」

「ああ。そろそろじゃないか？」

「わ、分かった。な、なら、この寮に居させてもらうぞ。」

「ん？ああ。いいぞ。何にもないがゆっくりしていけ。」

そう言つとジャンヌが、赤かった顔を、さらに赤く染めて小さく咳いた。

「お前がいるのにゆっくりできる訳ないだろう。」
「小さすぎて聞こえなかった。」

「は？何か言ったか？聞こえなかった。」

「な、なんでもないッ！」
すぐに後ろを向きリビングに走って行ってしまった。

(なんだぁ・・・？あいつ。)

思っていたとおり、傷は浅かった。が、傷が深いことよりタチが悪かった。

銀狼の牙に、魔力制限の毒が塗ってあった。

たいていの毒は1日で抜ける。

それは問題ないのだ。

それを塗った奴に問題があるのだ。

ブラド

もし、ジャンヌが言っていたとおり、僕のことを狙っているなら、毒が効いているうちに奴は動くはずだ。
その毒が効いている時間は、残り1日。

僕の読みが当たっているならブラドは、1日のうちに行動を開始する。

もし、弱魔力で、イ・ウーNO2と闘うとなると絶望的だ。
周りを巻き込みかねない。

まあ、読みが当たるとも限らない。その時考えれば平気だ……

そう、考えていると玄関から声がした。

「只今戻りました。」

白雪が帰って来た。

「ああ。お帰り。」

樋田は、委員会の仕事で遅くなるらしい。まだ帰ってきていない。

白雪がこっちを向いて廊下から駆けてきた。

「大丈夫ですか？銀狼の件は。」

「なんだ、知ってたのか。身体は一発噛まされたが平気だ。それよ
り、会わせたい奴がいる。」

そう言い、リビングに招く。ジャンヌは部屋でPCをいじっていた。

「お前も知つてのとおり、ジャンヌダルクだ。」

25章 アレは誰だったんだ？（後書き）

中途半端なところで終わりました。

章稼ぎです。スイマセン；

26章 嫌な予感？それは当たるのか？（前書き）

アリアルルートも開拓中です。

テストのせいでこの頃書けてません；
スイマセン。

それと、後書きに「おまけ」を付けたいと思います

26章 嫌な予感？それは当たるのか？

(つたく。何がどうなっただ?)

自分の部屋の椅子にもたれ掛かって、一日を振り返る。

白雪とジャンヌは、リビングで話している。会話を聞いてしまわないように部屋にいる。

それにしても、一番気になるのが「刀間封示」と言う存在だ。

まあ。その存在自体が妄想かもしれないが、狼戦だった後の夢だったので、無視できない。

それを決定付けるのが、茶色の大刀。

「雷地野ノ大蛇」

水風ノ大蛇より扱いにくく、その分魔力性に優れた一族に伝わる2番目の大刀。魔力は雷、地をまとっている。

一族に伝わるNO2の刀でもある。

考えていると神崎が帰って来た。

「どうだった？元気そうだが。」

「あつ。刀間居たんだ。」

「普通いるだろ・・・。ココは僕の寮ですよ？」

「まあ、そうね。キンジから聞いたみたいね。任務のこと。」

「正しく言えば、今リビングにいるジャンヌ・ダルクさんに聞いたんだが？」

「魔剣の事は聞いてるわ。任務はもちろん成功。……それにしても、本当に魔剣が来たとはねえ……？」

「ああ。今はリビングに行かないほうがいいぞ。白雪とジャンヌが密談中だから。」

「？何を喋ってるのかしら。」

「コラア。立ち聞きはいけません。」

「いたっ！」

リビングのドアのほうに、耳をかたむけた神崎の頭を叩く。が、神崎はやり返してこない。僕がキンジだったら、風穴祭りなのに？

これは、キンジが言ってた力の差によるものなのか？

それにしても……この頃は考え事ばかりだ。そろそろ疲れてくる。

と、さらに頭が痛くなる一人が帰ってきた。樋田だ。

「ただいまです。カー君。」

満面の笑みでこっちに告げる。神崎を見たたん、顔が引きつったのは見なかった事にしておこう。

「ああ。今リビングには行かないでくれよ。白雪が密談中だ。」

「密談ですか？誰と話してるんですか？」

「んー。さあ？」

「？」

樋田が、頭にハテナマークを浮かべた。

そしたら、神崎が僕の腕を肘でつつきこう告げる。

「ほらー、この頃、武偵高コウに来た転入生よ。」

あつ、そうか。樋田はジャンヌのことを知らないだった。

「ああ！2年生で情報科に入った美人の！
どうやら気付いたようだ。」

「そ、そう。そいつの事。だから、話の邪魔にならないように部屋
にいてくれ。どうやら長引きそうだからな。」

「はい！了解です！」
と、こつちに敬礼して部屋に走っていた。
神崎と首を傾げる。
なんか変だ。

「まあ。今日はさっさと寝たほうが良いんじゃないか？任務で疲れ
たんだろう。」

「そうね。精神的に疲れた。」

「ハハツ。そんなにメイド服が嫌だったのか？」
任務にいく時、つめてたからな。メイド服。

「もう、地獄よ……。絶対あんなことしないんだから！」
真っ赤になって答えた。

「んじゃあ、ゆっくり休めよ。明日も学校だぞ。」

「う、うん。分かってる。」
また、赤くなつた。

「あー。それと、僕は佐夜鳴先生の手伝いだから早めに出るから。」
佐夜鳴先生とは、非常勤で、遣伝子の組み合わせを教えてください
る先生だ。
しかも、女子に人気がある。

「ん。じゃあ、私たちも早めに出ようかしら。ちょっと気になる」と
もあるし。」

「キンジもか？アイツは早起き苦手だったと思うが？」

「いいの。無理やり起こしてつれてくから。」

「ハハハ。アイツも苦労するなあー。」

つい、笑ってしまった。

そうしたら、神崎が耳まで赤くなり、「し、知らないっ！」
と、樋田の相室に駆けて行ってしまった。神崎も神崎なりで変だな？

（さて、僕も寝るとしますか。）

その後は、軽くシャワーを浴びて。眠りについた。
毒のせいで俺が出ない、と言つことを頭に抱え込みながら。

26章 嫌な予感？それは当たるのか？（後書き）

（PCによるジャンヌの日記）

今日は辛くもあり、嬉しい（？）日であった。

忘れないうちに、記しておこう。

今日、訓練中に出現した銀狼は、恐らくブラドのペットである。

刀間と私を狙った行為ならば、状況は悪い。襲撃されるのも時間の問題だ。

襲撃後の刀間は、少し変だった。

実際、銀狼に横腹を噛まれたぐらいで失神するほど、奴は弱くない。私の治療ですぐ治ったほどなのだから。

これからも、警戒が必要だ。

それと、治療を行った、刀間の部屋は一人だけだったら、やたら落ち着けた。

だが、奴が起きた時から心臓の鼓動が早いまま止まらなくなった。

それと、顔のほてりが止まらなかった。

そして何故だか勝手に口から出た、星伽と話すことがある。

は、考えてもいない考えだった。

これは、認めたくないが多分……私は……「刀間の部屋に居たかった」のだ。

ただ、不思議なのは落ち着くから。と言う理由だけではなさそうな

のだ。

すると、何故、あんなことを言ってしまったのだろうか？

………。まあいい。このことは、峰理子に聞いてみよう。

そんな訳で、二三時まで星伽と雑談をしていた

私、ジャンヌダルクだった。

* 武偵高に来てから日記を書くことにした。これからも書き続けようと思う。

27章 ブラド戦 正体（前書き）

ホンとスイマセン；

テストのせいでPCが使えません。

間が空くと思いますが、なにとぞ、ご理解ご協力をお願いいたします。

27章 ブラド戦 正体

〈存在してはいけない現実の夢〉

「早く！もうすこしだ！」
暗闇に包まれた林をくぐりぬける2つの影は、見えない何かから逃げていた。

だんだん光が濃くなって、顔が晒される。
一つの影、銀髪の紅い目の少年は、顔が傷つき青色に染まった髪の毛の持ち主に肩をかして逃げている。

「お……俺はもう、無理……だッ。お前は早く教会に行け！グッ、ゴハッ！」
青色の少年は、言い切ったと同時に口から血を出した。

「ば、馬鹿！喋るな！二人で教会に帰るぞ！」
すると青色の少年は、言い返す気力も持っていないのか、銀髪の少年に身をゆだねた。

暗闇の林を走る二人は、後ろから迫る、衝撃波に気付いてなかった。

「ゲアアツツ！」

漆黒の闇に、鮮血が散った。

青い衝撃波は確実に、そして正確に、銀髪の少年の左足の関節を貫き、それを「切断」させた。

少年の銀髪は、自らの血で紅く染まった。

「つ、月鍍つきで！？」

隣の少年も叫ぶ。

銀髪の少年は、月鍍。と言っらしい。

紅く染まった少年は、横にある木に座り込み、痛みをこらえ、あくまで冷静に、前の少年に言った。

「わ、悪い。ココで終わりみたいだ。先に行ってくれ、」
震える唇で。

「ふっ、ふざけんな！お前が二人で戻ろうって言ったんだろっが！」

「二人死ぬより、一人生きてたほうがいいだろう？いいんだ、俺は
思い残すことはな……ッ！」

途中で言葉が途切れた。

紅く染まる顔が、斜めに、真つ二つに、均等に、「切断」された。

さつきより、多い血の量が吹き出る。

その前に立っている少年は、ただ、立ちすくすことしかできなかった。

「ああ！ああ、ああああアアアアああああ！うわああああ！狂ったように叫ぶ。

そして、叫んでは「生けない」言葉を、解放した。

「アアああ！我は解放する！天界の許しと、誓いにかけて！刀間の裏切りにかけて！我は解放する！この、雷神の名にかけて！」
そうして、少年の手にあった刀で、闇は光に包まれた。――

――

今日の目覚めは、いつもより早い起床と恐ろしい夢のせい、かなり悪い。

ちなみに、今は7時30分、講義室で非常勤教師の佐夜鳴先生の手伝いをしている。

「いやー、すみませんね。手伝ってもらって。」

ニコニコした顔で佐夜鳴が話しかけてくる。

「平気ですよ。先生こそ、昨日は徹夜だったと思いますが？お疲れ様です。」

整理していたプリントをそろえ、目の下に薄っすらと、くまができている佐夜鳴に言う。

「確かに、今日は寝ていません。自分の趣味で、ですけどね。」

「趣味と言うと？」

話を続かせるために聞いてみる。

「生物の研究ですよ。いい、資料が手に入りました。」

「へえーそうなんですかあー。」

と、適当に相槌を打っておく。

「ちょっと、資料室まで来てくれませんか？資料を持って来たいので。」

「分かりました。」と、佐夜鳴に付いて行く。

「知ってますか？この部屋は、防弾、防刃壁で、できているのですよ？」

資料室に入っただけに、こっちに質問してきた。

「？いいえ、知りませんでしたけど、何故そんなことを？」

「この部屋は、刀間君の魔力でも壊せないと言っことです。」

「・・・ッ！」

な、何故僕の魔力のことを知っている！？知らないはずだぞ！

「今は魔力は関係ないですか。毒に侵されて「無限軌道」は使えないのですから。」

「な、何を言ってるんですか？」
冷静をできるだけ保つ。

「だから、もう少しココに居てもらっんですよ。私の目的を達成するまで。」

その言葉と同時に、佐夜鳴が後ろに飛びのき部屋から退室して、ドアを閉めた。

「な、何をッ！」

ドアのほうから金属音が聞こえた。
閉じ込められた。

「刀間君は少し邪魔ですから、ココに居てもらいます。もし、ここから出られれば学園島の裏通りに来てみて下さい。面白いですよ。」
ドア越しに、そんなことを言ってくる。

「ってお前教師だろう！こんなことしていいのかよ！」
ドアをバシバシ叩いて問う。

「その顔は私です。他の顔は関係ありません。では、裏通りで。」
そのまま行ってしまった。

まったく何を考えているのか、全然分からない！
というか佐夜鳴の奴は何をやってやがる！こんなこととして許されるのか！

さっき佐夜鳴が言っていた通り、ここは出れない。拳銃でも開けれなかった。

(まったく、どうすりゃいいんだ?)

とか、考えていたらドアのほうから、また機械音が聞こえてきた。
万一に備えてDEを構える。
ドアのほうに、拳銃を向けて歩いてみるとそこには、狙撃科Sランクの「レキ」がたっていた。

「な、何でお前が・・・?」

「ジャンヌさんに、鷹の目の依頼を受けました。」

「そうゆうことね・・・?」

「…………。いいんですか？あなたを監禁した者の後を追わなくて。」

「あつ、裏通り！」
部屋を飛び出る。

奴の言っていた場所に、車輪科のバイクを借りて僕は走り出した。

（何も起きないでくれ…………。）

27章 ブラド戦 正体（後書き）

（PCによるレキの依頼板）

依頼 刀間来示の鷹の目依頼

報酬5万 単位0・8 依頼人 情報科二年ジャンヌ・ダルク

契約期間2日

狙撃科 Sランク「レキ」のみで現

在遂行中

28章 1部 聖戦による聖裁(前書き)

今回は、刀間封示君ストーリーです。

原作に絡むので是非……。

28章 1部 聖戦による聖裁

「刀間封示による聖裁」

そう。武偵を崩壊へと導く人材は、確かに存在していた。

「刀間封示」

消滅したはずの一族を裏切り、世界を敵に回し「狂陥」に堕ちた少年。

「全世界共通の恐怖」

その少年は、主に雷による殺人的超能力を使う。

「刀間封示」が、世界に「危険な存在」を知らしめた出来事がある。

日本で起きた「武偵部隊全滅悲劇」

その「悲劇」を開放しよう。

「うわ。こりゃあヒデえ。」
夏の日差しを受けながら、頭を刺激するような異臭を放つ、不自然死体の現場保存をする。

「顔と足を真つ二つにされりゃあ、身元確認はキツイなあ。なつ、勇也。」

現場保存に努めている少年が、隣で死体の解析をしている、勇也と
言う少年に話しかけた。

「そうですね。それにしても、終わりませんね、超能力人間狩り。」

「ああ。武偵はお手あげってとこかな？」

「お手あげって……。それを調査するのが「不羈茨打」と言う人でしょう？」

勇也が言うと、少年は爽やかに、苦笑いをした。

苦笑いをした少年。「不羈茨打」（ふきさやだ）は、最近の超能力人間狩りの調査責任者である。ちなみに、調査している20人あたりの人間は全員、高校生だ。

その事件は、当然のように捜査は難航した。

そう、思われた。

第一現場から5kmほどの所で、水に浸かっている、感電し、刀のような刃物に刺されている死体が発見されたのだ。

しかし、これは超能力人間狩りの事件ではない。

そう、誰もが確信した。

死因は、超能力による致命傷ではなく、強力な電子砲による「感電死」なのだ。

その、感電死から考えられるワードは、「刀間封示」

その後は、誰もが予想しなかった、敗戦の連続だった。

刀間封示の場所を探查し、襲撃した武偵部隊は、なすすべなく、中学三年生独りに壊滅させられたのであった。

NEXT!!!!!!

〈不羈茨打による聖裁記録〉

28章 1部 聖戦による聖裁（後書き）

改めて、ジャンヌファンの皆様。
スイマセンでした。

29章 2部 聖戦による襲撃(前書き)

なんか、すごい複雑に・・・。

29章 2部 聖戦による襲撃

く不羈茨打による聖裁記録く

(武偵は、超偵に勝てない。か……。)

茨打は、目の前に置かれている、部隊編成書を読んでいた。内容はこうだ。

A部隊	重装備突撃部隊	構成隊員二名
B部隊	高火力装備部隊	構成隊員八名
C部隊	軽装備援護部隊	構成隊員六名
D部隊	対超能力用部隊	構成隊員二名
E部隊	武偵局専門部隊	構成隊員二名

この、中規模部隊で「大地電磁砲拘束の封示」を射殺もしくは拘束に向かうのだ。ちなみに、この任務は武偵局からの依頼だ。射殺許可も、もらっている。

武偵局からの依頼なので、専門部隊が派遣された。本当なら、もう少し人数はあるのだが、既に展開された、刀間封示との戦闘で、人手が不足しているらしいのだ。この戦闘は世間には公開してないが、

茨打はC部隊配属の、部隊隊長だ。

見た目とは考えられないが、強襲科Sランク武偵なのだ。

「あの、茨打さん？」

「あ、ああ。襲撃か。」

「はい。全部隊配置に付きました。」
今は、目標が居ると思われる洋館の前にいる。

「よし。では、現在23時54分に襲撃を開始する。前線A部隊による体形Uを保ち、襲撃を開始しろ。」
A部隊を前線に洋館に突入するとき、爽やかな苦笑いを含んだ顔は、話しかけた少女に言った。

「今すぐに、超能力捜査研究科と連絡を取って、部隊を送ってくれ。到着までコッチで時間を稼ぐ。部隊が壊滅しても……。」

「えっ?! なっ、それはどういう意味で! ……」。
少女は叫んだが、相手には伝わらなかつた。
その時は小学生だった、その少女は、背後に設置された本部に走つた。

「樋田宇美」その少女は。

NEXT!!!!!!

く不羈莢打と刀間封示による交戦記録く

29章 2部 聖戦による襲撃（後書き）

ちょっと、文章が短く仕上がっています。

携帯から投稿しているので、どうも……。

30章 3部 聖戦による暴露(前書き)

予約搭載ってこんなに便利だったんですね；

早く気づけばよかった……。

30章 3部 聖戦による暴露

〈不羈莢打と刀間封示による交戦記録〉

悲劇は、突入開始から始まった。

A部隊が洋館入口のドアを叩き開けた、と同時に蒼く黄色い閃光が飛び散った。

目を開けると、A部隊の二名が足を痙攣させながら、失神していた。対電流仕様の装備な為、死にはしないが戦闘は行えない。

「平気だ。構わず進め。」

莢打が声をかけると、部隊は前進を続けた。

奴の場所は分かっている。

二階の206号室。突入前から、窓越しからでも分かるような電流が流れていた。

その後は、何の仕掛けはなく、難なく206号室前に、着くことが出来た。

B部隊同士で瞬き信号でドアの前に立ち、叩き破る。

バババババンッ！！

同時にライフルが火を噴く。

ガスンツ！！ビシャアアンツ！！

砂袋に当たったみたいな音がしてから、瞬間に蒼白に包まれる。

人影が、9mm弾パラベラムに、爆ぜた。

人影が、消えて、蒼光を發した。

蒼光を放ったのは、電子による人形。

（はめ、られたっ！！）

囿に遣われた人形が放った、蒼光に部隊員達が吹っ飛ぶ。

ズジャアアン！！ザアツ！！ザアツ！！

立ち上がった隊員は、本物による追撃に、再び倒れてく。

(ク、ソツ!!)

身体全体が痺れて、動けない。

ズザアアアツンツ!!

まだ周りでは、蒼光を含んでいる。

こういう結果を招くのは、予想は出来た。だから、樋田に超能力捜査研究科を呼ばせておいた。

「武偵は超偵に勝てない」

相手が強くとも、総勢でかかれば生けるだろう。

今は静まり返った場所に、やっと動くようになった首を後ろに回す。

「大丈夫ですよ。魔力解放を使っても。」

静かだった場所に、透き通る声が響く。

「貴男が遣えていた奴は、天界に送りましたし、盗聴器は破壊させて頂きました。それと、貴男が無限体力、及び魔力解放を使えるのは知ってます。超能力人間狩りの犯人だと言う事も。隠すことなど無いでしょう?」

奴は、俺だけに言った。

刀間封示は。

N E X T ! ! ! ! ! ! !

く不羈茨打による一族狩りく

30章 3部 聖戦による暴露（後書き）

みてみんなに画像投稿予定です。

赤い目もしくは、紅い目、を検索ワードにしたいと思います。

31章 4部 聖戦による交戦(前書き)

これから更新が遅れると思います。スイマセン

31章 4部 聖戦による交戦

「不羈茨打による一族狩り」

「だから平気ですって。貴男が超偵の顔を持っていることも知ってますよ？ああ、貴男は超能力人間狩りを気にしてるのかな？大丈夫ですよ？僕の言葉を人間は信じませんから、貴男に直接被害はいきません。」

目の前に居る悪魔、いや、天使は喋る。

「………………。何が、言いたいんだ。」

「言いたい？言いたいんじゃないよ？君が見たいんだ。貴男ではない君が。」

「………………。」

「月鍍を殺したのは君でしょう？」

「………………。」

「君の解放条件は『欲求の不満』からでしょう？」

「………………。」

「人間狩りをして満たせましたか？」

「………………。だまれ。」

だぞ！アホにも程があるよな！ゲハハツ！！」

もはや、優等生である茨打の『顔』など残ってなかった。
居るのは『悪魔』のみ。

(それを斬る！)

もろどつちが悪で、どつちが善か区別がつかない。

「斬るッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

封示の大刀が振り落とされる。

「させるかあああああああッ！！！！！！！！」
茨打の構えた手から、紅い焰が迸る。

洋館で紅と蒼が対立した

NEXT!!!!!!!!!!

〈天使と悪魔による対立関係〉

31章 4部 聖戦による交戦（後書き）

感想まっています

32章 5部 聖戦による破壊(前書き)

これから更新遅れると思います。スイマセン

32章 5部 聖戦による破壊

〔天使と悪魔による対立関係〕

洋館に紅と蒼が対立した。

まさに悪魔と天使。

見た目と事情がズレすぎている。

悪魔が素手で、天使が大刀。

「はああああッッ!!」

ガウウウウンッ!!

「ハハッ!!その程度かああああああ!!」

ザアアアアウウウウウンッ!!

天使が悪魔の紅光を、刀で受け流す。

「ガアアアア!!」

後ろに飛び退き体勢を整える。

「クツ。なあんだ、天使さん口だけじゃ無いんだあ？耐えられるんだあ。」

「ツクソツ！！」

「ふうん？つまない。終わらせる。」

「ナツ！！」

封示が驚くも当然。悪魔の手から、焔が形を変え、紅い大鋏みが出現したのだ。

しかも、刃の部分が80cm程で、両刃。

妙に、悪魔に似合っていた。

「は、鋏み？！」

「俺の第一武器『バックバイター咬脣』天界の主要危険刃物に載ってたと思うが。」

「な、何故、それ、を！！！」

「ああ？第一武器と言っただろう。」

「ツ！！」

封示が後ろに後ずさった。

「はあ？怖じ気づいたか？」

「解放する。刀間の裏切りに掛けて、友の死に掛けて。刀間の聖祭の《悪魔狩り》を解放する。《悪魔の殲滅》に貢献せよ。解放しろ。」

封示の体全体に蒼い魔法陣が出現した。

「コレが僕の『魔力解放』誓いの聖唱で発動できる。」

その言葉に、悪魔が笑う。

「良いじゃん。コレで対等に殺れそうだ。お互い、切り札は残っているようだし。」

ぞっとするような笑みが浮かんだ。

「あーせっかくの交戦だけど、時間切れだ。次回にお預けってとかな？」

「時間切れ？」

「そこ言ひごと。」

ずおおおん！！

「ナツ！！」

縛られた。何処からか張られた無数の楔に。

「早かったな。もう少し、時間がかかると思っていたが。」
闇に悪魔が呟く。

「茨打が急かしたんでしよう！！超能力捜査研究科の全勢力を、要求してくるなんて！！」
闇から、若い女性の声がした。

「悪いな。コッチは全部殺られた。」

「ぜ、全部？！」

「うがアアああああああ！！」

封示は楔に、出来る限り抵抗した。

電流を流そうとしたが、電流仕様に成っていて流れなかった。

「ちよつ、ちよつと茨打。私一人なのよ？拘束手伝って。」

「了解した。」

悪魔が、一気に封示の方に、攻撃態勢で詰め寄った。
咬解はいつの間にか消えていた。

(奴が、その気なら……………)

いざの時、抵抗できるように拘束されたかのように、隠しておいた

右手を前に出した。

「ナツ!!」

悪魔が、封示の手に出現した雷刃を見て、絶句した。しかし、スピードに乗っていた悪魔は、止まらない。

「……………ッ!!!斬るッ!!!」

バズシャアアアアアアああああ!!

雷刃から鮮血が散った。

ズシャアア!!

二撃目。また紅が迸る。

「茨打ッ!!」

闇から叫ばれた、悲鳴の後に悪魔の方から何かが光った。

封示の身体に寒気が走った。

光ったのは、茨打が装備していた、サバイバルナイフ。

それが、封示の胴体に刺さった。

洋館にもう一度、鮮血が散った。

紅と共に二人の、少年の意識も散っていった

N E X T ! ! ! ! ! ! ! !

第一章 神に祝福されし少年

32章 5部 聖戦による破壊(後書き)

感想待ってます

33章 プラド戦 交戦(前書き)

キンジ君の出番が少ないのは、後でバリバリであるので気にしないでください。スイマセン

33章 ブラド戦 交戦

「小夜鳴iiiiiii

!!!!!!」

!!!!!!!!!!

「ゲババ。甘いぞ刀間！」

怪物化した小夜鳴の身体から鮮血が散る。しかし、怪物の身体のはふさがれていく。

ここに至った理由を説明しよう。

第一に、僕が裏通り着いたときには既に、峰理子が拘束されており、そのせいで小夜鳴にキンジがスタンアウト。

第二に、突如小夜鳴の身体が怪物化。その場には神崎しかおらず、僕が出るしかなかった。

第三に、身体を侵していた毒は薄れていたが、魔力解放が使えず無限体力と神崎と俺に頼るしかないこと。

第四に、何処からか出現した銀狼は、小夜鳴の飼犬らしく、その三匹は神崎に引き受けてもらっている。

つまり、目の前の馬鹿でかい怪物を、魔力解放無しで倒さないとな

らない。

「クツザアッ！」

風の刃を跳ばすが、刃が作った傷はふさがれていく。奴には、自動回復が備わっている。

「ゲババ。さすが魔剣を退けただけある。ただし、それは魔力解放時だかなッ！」 怪物のバカでかい拳が、地面を貫いた。

何とか避けたが、足がふらついた。

標的は大きいから、攻撃するぶんには問題ない。奴の自動回復力が問題だ。

奴の身体に浮かんでいる、目玉模様の刺青らしいのを四つ、同時に破壊すれば回復は止まると神崎は言っていたが、三つしか見つからない。後一つ、何処にある？

「なっ、しまったッ！」

「ゲババ！甘いぞ！」

異常に発達した筋肉から繰り出される、右フックボディパンチに身体は飛ばされた。

あまりの衝撃に、身体は空を切り、手からこぼれた水凧ノ大蛇はど

ここに飛んでいった。

「ガハッ！」

思いつきり木に衝突した。口から血が溢れる。

防弾制服じゃなかったら、確実に気を失っていた。

胴体に帯銃していたウィルディピストル二丁を抜いて立ち上がろうとしたとき、身体の激痛と共に、俺より強く感じる、あの、感覚が伝わる。

その感覚で認識した、状況を確認する。

奴が来た

（今は、奴に頼るしかねえか。）

とどめを刺そうとヌシヌシと歩いてくる、真剣そのものの表情の怪物の背後に、人影を認識したのだ。

夢じゃなかった。

俺に振り上げられた異常な拳が、一気に迫った。近くから神崎の悲

鳴が聞こえた。確かに、俺の潰された死体は拝みたくないだろう。
しかし、

奴の拳は当たらない。

拳は、繋ぎ目だった腕から切断され、血と共に地面に落ちた。

「ナツ……………!!」

拳は直ぐに再構成された。が、手には茶色の大刀、雷地野ノ大蛇。

突如出現した刀と、彼の目つきと雰囲気、周りに纏われている魔力を見て、怪物は絶句した。

そこには、水の魔力を纏った、解放された少年が居た。

「ま、まさか、速すぎだッ!!そんなのは有り得ない!!」
怪物さえもが身震いする程の、いつでも殺意に満ち溢れているぞつとする少年は、雑魚を見るような視線で、

聖裁を、変わりに、下した。

雑魚は戯言をあの世で言え。

怪物を、風の弾丸が取り囲んだ。

もはや、目玉模様の刺青がどこにあるか、どう破壊するかは関係ない。

身体を、例外無く隅々まで貫くのだから。

少年が刀を一振りすると、風の唸りと、怪物のけたたましい悲鳴が聞こえた。

それを見て怯えた銀狼も、一目散に逃げ出した。神崎も、恐怖で立ちすくんでいる。

それを、気にせず、少年を呼び出した本人に少年は語る。

「兄貴さー。わっわんわんわん。」

そう、夢じゃなかった。

33章 ブラド戦 交戦（後書き）

「人間の基準って何なんだ？」

「そりゃ、神だろ」

「そしたら、この世の人間は人間じゃないじゃないか」

「全員が、異常の対象なんだよ」

「……なるほどね」

「人間らしいのは、誰も満たされていない。そうだろうか？」

「……………」

「この言葉は、俺と言う異常者の妄想だ」

34章 復活聖戦（刀間来示）（前書き）

祝、副作品投稿！

つてわけで、「武偵高」眼帯の紅」を副作品として連載開始しました。

コレ、結構構成度が高いです！（矛盾出現度高；
緋弾のエリアで出ると思います；

そして、この章で来示君の兄が登場！（まあ、容姿とかは気にせず；
ついに新しい章に突入します。

34章 復活聖戦（刀間来示）

「あ、兄貴!？」

神崎が怪物の後ろ側で絶句する。
まあ、無理もねえだろ。

僕は知らないが、この僕なら知っているからだ。この僕は兄貴と慕っていた、僕の兄貴を。

「お、お前、に兄、がいる、だ、と……?」

辛うじて死んではいない怪物が力一杯口を動かす。

「うるせえ。戯れ言はあつちで言えと言ったろ?」

腹に峰打ちを入れる。

怪物は、ぐおおと喚きながら突っ伏した。

「か、刀間に、兄、だと……?」

さっきまで寝ていた遠山キンジが目を覚まし、うつ伏せ状態になりながらも、匍匐前進でコツチに近づく。

「おい。サッサと出て来いよ。今は、肉体を借りて喋ってんだから

時間がねえんだよ。」

「ん？ああ、ごめんごめん。ちょっと様子を見てたもんでね。」

僕「刀間来示」から入れ替わっているか、をか。
相変わらず用心深いねえ。

「どうやら、君がちゃんと応えてくれたみたいだね。」

「てめえが無理やり呼び出したんだろ。まあ、コイツ一人だったら、とつくに肉体が減んで憑依する相手がなくなっちまってたからな。礼は言っとくぜ。」

そう言つて、こっちの僕はしかめツラをして、彼、を睨みつける。

「いや？何で睨みつけるんですか。」

「つたく、気にイラねえ。」

「非合理的ですね。気に入らない理由を述べて欲しいんですけど。」

もう既に、その場にいる遠山キンジと、神崎Hアリアはついて行かない。

青髪二人の世界に。

「兄貴。五年間闘りあってねえんだ。今回は、本気で闘らせて貰うぞ。」

「そのつもりで来ましたから。」

青髪二人は、お互いの刀を鞘に収め居合い切りの構えを取る。

「えっ、ちよっ、来示！あんた何やってんの！」

身の危険を感じ、とっさに止めようとした神崎の声など聞き入れない。

「 聖裁聖戦を開始します。」

「 復活聖戦を開始する。」

神崎とキンジには青髪二人は、鞘から少ししか刀を抜刀したとしか見えなかった。

違った。

その瞬間、二人の間に曲線を描いた火花が散り、周りに衝撃波が散る。

「コレが、本物の超能力戦……。」

隣で戦闘を絶句しながら見つめている神崎に対して、キンジは「ああ」と首を縦にうつ伏せになりながらふる。

今回の戦闘は、戦績豊富な神崎が見たことない超高度超能力戦闘なのだ。

最早、魔剣戦をも超えている。

「ハハハッ！暴れるのは久し振りだねえ！」

その言葉に、神崎達は気付く。

コイツは、刀間来示ではない。と

(……じゃあ、一体、誰なんだ!?)

キンジは、まだ麻痺して多少動かない手足を前に出して、四つん這い状態から立ち上がる。

既に闘いは最高潮に達していると、見える。

「すううらッッ！」

この闘い、周りの草木をも巻き込んでいる。少々危険だ。

「て言うか、どっちに味方すりゃあ良いんだ？」

キンジが、隣でボケーっと傍観している神崎に問いかける。

「へ？まあ、確かにそうね。」

我に返った神崎は、慌てて告げる。

友人を助けるのが普通だが、今は別。その友人は、人が変わってしまった。

かと言って、メチャクチャ人が良さそうな知らない美男子に味方するのも無理がある。

「まさか、来示の魔力解放は、アルケミードリバランスここまで過激だったとは……。知らなかった……。」

いつからか聞かされていたのだろう。戦闘に目を向ける。

「魔剣の時の魔力解放より物凄いGを感じるわ……。白雪がいたら役に立ったのに……。」

「は？魔剣の時に、アイツ魔力解放使ったのか？」

「え。いや…何でもない！」

口止めされていたことをウツカリ喋ってしまい、慌てて口をふさぐ神崎。

その時、場に異変が生じた。

怪物が動き始めたのだ。

「チツ、ブラドの奴！アリア、今は奴を止めるぞ！」

キンジの言葉に神崎が分かった、と二つの小刀を構えて応じた。

「……刀間……。……殺す……。……」

のっし、のっし、と怪物が戦場に歩く。
身体からは鮮血が迸っている。

「ブラド！アンタは大人しく私に捕まりなさい！」

小刀を構え、怪物の前に立ちはばかる。

が、

「……小娘は黙ってるおおおおおおおおおお！！！！！！」

血が滴る拳で、傷つきながらも遠心力に任せて拳をアローに振った。

それを見て、まだ震える手でベレッタを片手で構え、怪物の振るう関節の筋肉部分に弾丸を撃ち込む。

回復力を失った怪物は、ウグツ、と呻くが、遠心力で振るった腕は止まらない。

それを、神崎はひらりと上に舞い、怪物の腕を踏み台にして、頭に着地した。

そして、頭から飛び降りる際、怪物の頭に奴がくらうが三発目の峰打ちが決まった。

怪物の身体が、ぐらり、とよろめいたときに閃光が散った。

キンジとアリアが、身をこわばらせる。

蒼い閃光を纏った、光の刃と爆発が、怪物を襲った。
青髪美男子のトドメだった。

しかし、怪物の身体でも爆発は押さえきれない、と判断したのだらう。キンジが飛び出す。

神崎が、爆発予想圏内にいる。

足をもつれさせながら転んだキンジは、ガバツと、神崎を庇うようにして抱きしめる。女子の防弾制服は、男子より露出度が高い、そのためだけではないだろう。

後ろに、ドデカいハンマーを喰らったような感覚と、神崎の体温を感じながら、意識は遠のいて行った

34章 復活聖戦（刀間来示）（後書き）

「君は、何故、生きている？」

「罪滅ぼしの為だろう」

「罪滅ぼしとは？」

「この世界の再構成の事だ」

「……。否や、この世界は既に狂っている？」

「人間が火を得た時からだな」

「何故？」

「もともと、火を得るのが人間じゃなかったら……」

「それが間違いだと？」

「人間世界を壊すためだ。いつも、人間は自分で首を絞めている。それさ」

「たとえば、原発とか……？」

「原発を作ったのが悪いんじゃない。原発で『終わり』を迎えればいい」

35章 真・本編突入（遠山キンジ）（前書き）

祝、お気に入り登録数60越え！

ココまで来れたことを感謝です！本当に感謝！

でわ、こっからが「真・本編（遠山キンジ）」となっております。
ちなみに、語り部をチヨクチヨク変えていく予定です。

否や、前章とかは名づけるんだったら「本編（刀間来示）」
見たいな感じだったんですね；

真章、お楽しみください！（副作品へ）武偵高〜眼帯の高〜とも、
ばりばり交差していきます。是非、副作品にも目を通しておいてセ
ットで！お楽しみください。（

35章 真・本編突入（遠山キンジ）

目覚めたのは、やはり武偵病院の病室だった。

俺は横に置いてあったミニカレンダーを見て、あの戦闘から、三日間寝ていたことを知った。

身体を起こそうとしたら、背中が焼けるような痛みが走った。

気になって腹の服をめくると、腹は包帯で二重に巻かれていた。

（爆発に巻き込まれたから仕方ないか。）

俺はため息をつき、再び横になり、アイツの事を考える。

大体、あいつがどこに消えたのは、予想がつく。

神崎を庇う前に、爆炎の陰から見えたのだ。歪んだ空气中に消えていく人影を。

（そう言えば入試の時に、アイツと鬨りあって引き分けたんだっけか。）

俺が入試の時に、他の受験生を大半蹴散らして、教官を潰そうとして廻っていたら、既に倒れてて、近くに来示が刀を背負っていたんだよな……。

遠山キンジ、刀間来示、二人で『超無限軌道』^{ループ}と呼ばれていた。まあ、俺が探偵科に行ったから、それは伝説になって、来示一人で『無限軌道』^{キヤクド}をやってるみたいだしな。

「あ、遠山君、起きたんだ。」

ドアを開けて入ってきたのは不知火。

強襲科の訓練を終えたばかりなのだろう、制服が乱れている。

「ん、ああ。どうしたんだ？」

「どうした、って遠山君の見舞いに決まってるよ。」

「まあ、確かにそうか。」

不知火に、苦笑いをして言葉を返す。

「神崎さんの事は心配いらないよ、もう意識も回復して、学校に出席してるから。峰さんもね。」

「来示は……………」

「刀間君は……………学校を無断欠席していて、現在行方不明だよ…。何か、刀間君が居なくなつて、教務科が慌てて、こういう行方不明者は普通、探偵科が動くんだけど、今回は別みたいで、教務科の教師達が直々に捜査しているみたいだよ。」

不知火は、ベッドの隣にあるパイプ椅子に腰掛けた。

教師達が直々に捜査するって、来示、お前何者だ？

あの面倒くさがり屋集団の教師達が動くのは、滅多にないぞ。俺でさえ、教師達が大大的に動いた所を聞いたことがなかった。

アイツは、俺が知らないことを知っている。

多分、アイツを教務科の教師達が見つけることは不可能だろう。アイツ本人が見つかるうとしなければ。

(なら、俺達で捜さなければいけないのか?)

勿論、教務科はプロだ。探索を任せておくのが通りだろう。でも、何故か、俺たちじゃないといけない気がする。何故だ、と言われれば答えられないが。

「なあ、不知火。」

これが、良い選択かは分からない。けど

「なんだい？」

俺達なら見つけれられるはずだ。

「一緒に、来示を捜さないか？」

真しい物語が展開した。

35章 真・本編突入（遠山キンジ）（後書き）

「奴らが動きだしたみたいだよ」

「ふーん。俺達も動くのか？」

「今まで戯言しか喋ってないからね」

「はん。まあ俺の妄想だからな。戯言で済ませれるんだっいたら済ませてほしいよ」

「妄想を超えて現実で、真、にしたいのか？」

「お前に命令されようが、既に実行されている」

「君がかい？」

「異常者の『親』^{デビル}が俺だ」

36章 真・本編序章（前書き）

何か慣れません・・・。

一人称間違えとかあったら教えてください；（僕とかになってそう・
・・；

36章 真・本編序章

まあ、あんな格好つけた台詞を言っても、身体はついてこれないからな。後、単位の事もある。

不知火の情報だと、教務科が行き詰まったら、いつもより高い単位で、任務を依頼する傾向があるらしい。今は、教務科が行き詰まってくれるのを、待っている状態だ。

それまで、リハビリをしたり、見舞いに来てくれた奴らと喋ったり（？）情報提供とかをしてもらっていた。

「で、明日から、任務開始って事ね。」

身体が回復して、予想通り教務科が出した「武偵高生徒捜査依頼 教務科依頼」

を受けて、俺の寮で作戦会議、（？）中だ。

揃ったのは、不知火、武藤、アリア、理子、白雪、樋田、レキ、って言う意味不明メンバーだ。

不知火と武藤は俺と同じ友人だから。

アリアはアイツが奴隷だから。

理子は前回の戦闘の恩返しだから。(らしい……………?)

白雪は超能力捜査研究科がアイツをマークしているから。

樋田は相棒(?)だから。

レキは依頼内容の継続が原因だから。(依頼内容ってなんだよ……………。)

が理由で、作戦に参加。(中には意味不明な理由があるが)

「ということは、この八人で全国を捜せば良いんですね?」

切羽詰まった顔で切り出すのは樋田。

「まあそうゆう事だよな。移動手段なら問題はないが。」

と、車輛科のキーを指で回す武藤。

多分、車輛科担当の教師が、特別に手配したんだろう。

強襲科も、武偵弾倉を支給してくれた。強襲科がここまでするなんて……………。来示、お前、本気で何者だ?

「自分達で運転するなら、自動的にこうなるわよ?」

紙に何か示しながら問うアリア。中には、タッグ名が書かれていた。

私^{アリア}理子、不知火^{レキ}、武藤^{白雪}、キンジ^{宇美}と。

「土地感覚と、運転力を考慮したらこうなるけど？」

ペン先を傾げこちらに聞いてくる。まあ、個人的には賛成だ。

「おうおうおう！！いいんじゃないねえの！！」

「僕もそれでいいよ。」

と、何故かハイテンションな武藤と、それを見て苦笑いしている不知火は賛成した。

「これ以上、良いタッグは組めそうに無いから……。これで良いんじゃないか？」

俺は、素直に肯定する。

「そうですね……。私的にはキンちゃんと組みたいですけど……。刀間君の捜査の為だったら、これで、いいんです……。」

小声で自分に言い聞かせていように見える白雪。何かよくわからんが、来示のおかげで、今救われたみたいだぞ。うん。

「んじゃ、これで決定みたいだね！じゃあ、皆は当日から携帯を手放さないようにね。理子が、聞き込んだ情報を送ってあがちゃうから。」
フリフリの改造制服と、金髪のツインテールを揺らしながら言う理子。

まあ、こいつの情報力はハンパないからな。

「なら、今日は解散って事でいいかしら？いいなら、明日の九時半に車輛科の前で。」

いつもよりご機嫌なアリア。

きつと、辛うじて生きていたブラドを裁判所に連れて、証言させることが出来るようになったからだろう。

「じゃあ、明日な。」

手を振って、バラバラと帰る準備をする武藤。
他の奴らも武藤にならって、準備し始めた。

遠山キンジ達の、長期特別欠席の前日の事だった。

36章 真・本編序章（後書き）

「君の日課は？」

「異常な空想。」

37章 一族潜入（探索（前書き））

風魔登場！

エンディングは3パターンにしたいんですけど、「HAPPY END」「END」「BAD END」のどれから更新すればいいのかわからない……；

37章 一族潜入（探索）

「どう、君彼氏いるの？」

「いても教えません。」

「そうなんだー。前にはいたの？」

「彼氏いない歴〓年齢です。」

「おおー。そんなに可愛いのに？」

「あなたが言うとお世辞にしか聞こえません。」

「こんなにイケメンな僕の言葉がお世辞だと？」

「私の趣味じゃありません。」

「君。ツンデレ？」

「あなたに対しては『軽蔑』です。」

「ツンデレ、キタ……………。()……………!!!!!!」

「……………。今の絵文字は何ですか。」

「（＾・＾）」

「……………」

樋田、融示さんにK.O。放心状態になった。

融示さんが風魔を見たとき、コイツは美人のタマゴだから、口説きに掛かると思ったが、ただ一言。

「風魔一党か。遠山侍、父上にお会いにきたのだらう。案内してあげるよ。そこのお嬢さんも連れて。」

と、放心した樋田を指差して、山を登っていく。

「お前は融示さんについて行け。樋田は俺が連れて行く。」

「御意。」

放心状態になった樋田のところに歩く。

「おい、樋田。潜入すれぞ。起きろ。」

肩を揺するが反応がない。目の色を失っている。

「おい！起きろー！」

「……………」

いくら揺らしても起きない。そんなに、融示さんがショッキングだったのか？

これは、ちょっとマズいんじゃないか。

「お、おい、樋田!?!」

俺の頭が混乱している中、樋田がもっと混乱させる言葉を言った。

「……………ダメ。……………行ったら……………ダメ……………」

「うおッ!ちょッ!」

うっすら開けていた瞳を閉じて、気絶しやがった。こちら側に倒れてくる。

(…つたく、融示さんも余計なことをしてくれる。)

樋田を受け止めて、背中に背負う。

その時、甘いシナモンのような香りに包まれた。

(…ッ!な、何故だッ!)

この血流の感じ、ヒステリアモード

あまりにも突然で、呆気にとられていた。

確かに、俺は女子の匂いに弱い。だが、こんなにも一瞬しか感じなかったのに、ヒスったのは始めてだ。

(まさか、コイツもアリアと同じように、ヒスリやすいのか?)

そんな訳で、無駄にキザな融示さんに連れられて、高級マンションに到着する。

「遠山侍。勿論、父上の事は覚えているよね？」

ああ。忘れる訳がない。あんな強面のオッサン、忘れた奴の方がおかしい。

「勿論です。忘れるわけがありません。」

「よし、では行こうか。」

融示さんが、エレベーターの最上階のボタンをおす。

途端に、監視カメラが出現する。隣には機関銃。

「大丈夫、客人だ。警戒を解け。」

融示さんがそう言うと、監視カメラ機関銃が、出てきた穴から元に戻った。

そして、ホテルのような廊下を抜けて、一つの部屋に案内された。ここに来たのは始めてだ……………。

「父上、客人です。」

ドアをノックして、中に入り一礼。

中にいたのは、40代後半とは見えないぐらいの体格。かなりゴツい。

「遠山侍と風魔一党か。なかなか面白い組み合わせだな。まあ、座りなさい。後ろのお嬢さんはそのソファアーにでも。」

俺は、妙に醒めた目で、言われたようにソファアーに樋田を寝かせる。まだ意識は回復してない。

「では、要件を聞こうか。出来るだけ協力しよう。」

俺も、風魔に従って椅子に座る。

「刀間海示さん。かたなまかいじアナタは知っているはずですよ。来示はどこにいますか。」

37章 一族潜入（探索（後書き））

「奴らが一族に接触しました。」

「ほう、早かったな。相手は？」

「3人です。妨害工作さえなければ。」

「了解した。まずはその3人から消滅させる。」

「いいんじゃないんですか？」

「……暗殺聖戦を開始しよう。」

38章 一族交戦（跳迷（前書き））

茨打登場！

副作品からも、人物を登場させます！

38章 一族交戦（跳迷）

「ん？ああ、来示か。来示の粒子なら、山梨の方から流れているぞ。山梨のどっかだろう。要件はそれだけか？」

海示さんの言葉に呆気にとられた。あんな、息子がいきなり山梨に移動したんだぞ。少しは心配しろよ。

「……………。こつからは、俺達の情報提供です。来示と、封示さんと思われる人物が交戦しました。」

彼の表情から、笑みが消える。

そう、ブラド戦の時にいた、青髪的美男子。ヒステリアモードの俺しか知らない、最強男。

「……………。封示に会ったのか…………。」

「出来れば、封示さんの事も教えてほしいんですけど。」

「知るか！あの裏切り者！よりによって姿を現した相手が来示だと！裏切りにも程がある！」

平常心を失ったのか、いきなり怒号を上げた。隣で風魔が身を強ばらせた。

まるで、ヤクザだから……………。怖がるのも無理もない。俺だって、

初めてあつたヤクザみたいな人がいきなりキレたら、即効逃げる。普通の俺なら。

「す、すまない。本来なら闇討ち依頼を頼むなどこなんだが……」

怯えた風魔を見て我にかえった海示さんはいつもの強顔に戻り、真剣に続けた。

「封示を討てるのが厄介な奴だな。そこのお嬢さんが、良いとり引き材料なんだ。」

ヒステリアモードの俺が気付いて、ベレッタの安全装置を外す。

「君達の要件は聞いた。次は、僕達の要件を聞いてもらおうか。」

後ろから、融示さんが鞘から刀をのぞかせて、コッチに歩いてくる。

「風魔！構えろ！」

風魔に警戒態勢をとらせる。

俺もベレッタを抜く。

「その悪魔『樋田宇美』を、引き渡してくれないか？」

「生憎、今の俺は女性を見捨てるような卑怯な真似は出来ないものでね。」

「遠山侍。君が悪魔を庇ったからといって、君達、遠山家を敵対するわけでもない。勿論、君の安全も保証してあげよう。少し冷静に考えてくれないかね？あまり、手荒には動きたくないもんでね。」

樋田の所に、ベレッタとバタフライナイフを海示さんに向けながら近寄る。

まずはキープだ。

「言っただろう。俺は女性を見捨てるような卑怯な真似は出来ない」と。

海示さんも手持ちの鞘を構えた。

「ふつ。HSSか。お兄さんとは、発動方法が違うみたいだね。」

無闇にHSSとか言うな。

「……………。厄介な奴とは誰のことだ？」

「悪魔の義兄だよ。六年前の武偵高Sランク武偵だよ。」

「Sランク武偵？」

「そうだ、本来は悪魔だが人間の顔は武偵だ。では、譲らないなら

全力で……………」

「風払うッ！」

鞘から少ししか刀を覗かせないで斬る『超光速居合い斬り』
それを見切る。

カーブ状に斬られた空間を避けながら、片手に持っているバタフライナイフで受け流す。

拳銃だと跳弾の危険性があるからな。なるべく使わないようにする。

「ッ！たあッ！」

海示さんが、刀を鞘に納める所を狙って斬り込みに掛かる。

全く馬鹿げている。極端に刃渡りが短いナイフで、普通のやつよりも一回り大きい刀に挑むなんて、ド素人でも怖くて出来ないだろう。

だが、海示さんは居合い切り専門だ。抜き身の刀の扱いは常識内だ。勝ち目はある。

見事に、鞘の先端部、刀を納める場所を見事に、短いバタフライナイフが塞いだ。

直ぐに、来示がくれたサバイバルナイフを抜き出す。後ろでは、風魔と融示さんが戦闘中だ。

「流石だ遠山侍。しかし、一つ忘れてるぞ？ここは、私達の家だ。」

「なッ！しまった！」

最早、避けようが無かった。俺の上に、槍が降ってきたら。

あーヤバい。これは死んだわ。そう感じたとき、本日二度目の奇跡が起きた。

またしても、槍が裂けた。

「ッ！」

目の前に立って、海示さんを睨みつけているのは赤髪の青年。後ろからでも分かる。黒い眼帯をしている。

「おい、そのネクラっぽい目つきの前髪ロング。樋田をセーブしろ。そのこの丁髷女も。この青髪のおっさん達は任せろ。」

その青年は、俺に向かって叫んだ。………目つきは生まれつきからだ。余計なお世話だッ！

「あんた一人でか！？てゆうか誰！？」

俺は、決めゼリフっぽい言葉をはいた彼に叫び返す。

「丁度良い……。取り込んでしまおう……。」

一方海示さんは、血走った目で彼を見つめている。

「俺かぁー？不羈茨打だ。そんじゃまあ山梨まで跳ばしてあげるよ。」

彼が手を降った後、俺と風魔と樋田の周りが異次元に包まれた。

その直後衝撃が足に走った。

目をあけると、どっか知らない民間の前だった。

そう、山梨に跳んでいた。

38章 一族交戦（跳迷（後書き））

「妨害がありました。」

「妨害内容は？」

「跳迷妨害です。」

「跳迷場所は？」

「山梨の富士吉田市です。」

「よし。俺たちも跳ぼう。」

39章 山梨移動

「おい…風魔平気か……………?」

「御心配には及びませぬ……。師匠こそ平気でござるか……………?」

「な、何とか……………」

俺は、ガンガンと痛む頭で思考を開始する。いつの間にか、ヒステリアモードではなくなっていた。

「樋田は……………?」

そう言えば樋田が居なかった。

「ここですよ……………遠山君の後ろです。」

後ろから、肩をつつかれた。確かに後ろには目を覚ました樋田が、アスファルトに座っていた。

「起きたのか、まあ良かった。」

「全然良かったって言う感じが伝わってこないんですけど……………。それよりも、全く状況がつかめないんですけど。説明とかしてくれませんか?」

目をこすりながら樋田が言う。
話が長くなりそうだったので、溜息をつきながらも一族で起こったことを説明した。

樋田は、物分かりはいい方らしく、一回説明しただけで何となく分かったらしい。

ただ、不羈茨打と名乗った赤髪の眼帯少年の話に入ると、顔をしかめた。

「何で……お義兄様にいが……？」

真剣そのものの顔でつぶやいた。

おい待て。お前、義兄がいたのかよ。聞いてないぞそんな事。悪魔とかそこら変は、あえて追及しない。否や、聞いては取り返しがつかない様なことになりそうだと本能が告げたからだ。

「お前、義兄いたのかよ……。てか、超偵の……。」

「いましたよ？教える理由がありませんから。」

こいつ……Dランク武偵のクセに侮れないな……。絶対裏の顔とかありそうだ。

「ったく……。それより、ココ、山梨の何処だ？」

「師匠。某はここを訪ねた事があるでござる。ここは、山梨の甲府市こうじゅうにござる。」

甲府？ココに来示が居るっつてののか？
生憎、ココは不知火レキチームの探索範囲だ。

「まずは、状況報告か？」

「はい。それが良いと思います。」

「今は、全員で固まって動いた方が安全と思いまするが。」

まあ、そうだな。さっきの戦闘があつたからこそ、来示探索は案外危険だ。どうやら、来示を探してるのは俺達だけじゃないみたいだし。

他のチームも既に交戦してるかもしれないからな。

そう考えて携帯を取り出して、まずは近くにいそうな不知火に電話をかける。

が、不在。

改めてかけるが、こちらは留守番電話サービスです。お掛けになつた　　と機械音が返ってくるだけだった。

「樋田、悪いがレキに電話掛けてくれないか。不知火が出ない。」

そう言い今度は、武藤の電話に掛ける。

だが、こちらも不在。

再度掛けるが変わらず不在。

携帯の電波状況をみるが好調。

アリアに掛ける

不在。

白雪に掛ける

不在。

理子に掛ける

不在。

もう一度不知火に掛ける

不在。

もう一度武藤に掛ける

不在。

もう一度アリアに掛ける

不在。

もう一度白雪に掛ける

不在。

もう一度理子に掛ける

不在。

最後にレキに掛ける

不在。

「誰も……でない……?」

隣で樋田が絶句している。

(おかしい。何かがおかしい……)

この任務、何か裏がある。

39章 山梨移動(後書き)

「交戦開始」

40章 山梨(暗転)

「何でだよ。何で出ねえんだよ！」

やり切れなくて、アスファルトの塀を殴る。……………結構痛い。

「落ち着くでござる師匠。」

「……………。この場合武偵校に連絡するのが普通なんですけど……………。特殊任務なので連絡はまずいですよねえー……………」

気のせいか？風魔と樋田が物凄く、気が合ってるような気がするんだが……………？

「……………駄目だ。考える気が起きない……………。どうする？このまま探索を続けるか？」

「山梨に居ることは確実っぽいんですけどね。当てがありません……………」

「……………。まあ、適当に歩くか……………？」

「そうですね。ホテル(もちろん健全な)かなんかがあれば、部屋さえあれば休めますし。」

仲間の生存確認が先だと思うが、この状況だ。どう動こうが状況は変わらないままだ。

そうだな。金は教務科負担だし。それに休みたいし。

と、歩き始める。同時に風魔が背景に同化する。(隠れ蓑? スカーフが見えてる。) 一応、護衛のつもりらしい。

風魔が護衛に廻ったところで、俺は樋田と並んで歩くはめになる。周りから見たら、帰り道を仲良く、一緒に帰ってるカップルにしか見えないだろう。

そんな事を考えていたら、樋田がいきなり、あっそうだ! と手を叩いた。

「聞き損ねたんですけど、カー、刀間君と遠山君ってどういう繋がりがあるんですか? 親友以外に。」

いや、ただ単に昔世話になってたところの息子が、入学試験の時に来の戦友になつたつてぐらいだが……………?

「いや、普通に戦友つてくらいだけど?」

「本当にそうなんですかあ?……………あやしい(ボソツ)……………」。

何か咳かれた……………。あやしいつたつて隠すことも何もないし。

「それよりだなあ!。お前はどうかなんだよ? 来示とは。」

質問し返す。

「いや、普通に相棒つてくらいだけど?」

……同じ答え方で答え返された。コイツ…絶対危ないな。

「……………」

「付き合つてるとかそう言う噂は広がってますけど、それはないですよ。個人的にはそうあつてほしいんですけど（ボソツ）。」

さ、最後のは聞かなかった事にしておこうツ。うん！何も聞いてないぞ。

「それより、遠山君も気付いてないんですか？」

いきなり言われた。いきなり言われても、マシな答えが浮かんでこない。

「……………何が？」

「やっぱり……………。カー、刀間君並に遠山君も鈍いんですね。本当に分からないんですか？」

「だから知らないって。」

「いや、何でもないです……………」

何か、無条件に睨まれた。一体、俺何をしたって言うんだ。新たないじめか？

「お前なあー……………」

「あッ！宿みたいですよ、遠山君！」

俺の言葉を遮り、宿の看板の方に騒ぎながら駆けていった。

「彼女は何者でしょうか？師匠。」

「全くだ。ただ、純粹なのは見て分かる。」

40章 山梨(暗転)後書き(

「戦闘開始」

41章 山梨交戦開始

「あー、大丈夫、ちょっと話したいただけだから。その、ベレ向けないでくれないかな？」

んなわけで、悪臭を放つ血の海の上で両手を上げてる、銀髪のおにーさんに警戒態勢を取る。

「手にある武器を放せ！床に滑らせながらコツチに渡せ！」

「……………だから言ってるんだろ……………。銃口向けんな……………」

愚痴を吐いて、手に持っている1m弱の刃に血がこびり付いている鎌を一振りする。

刃が、グウン、とうねりをあげる。

相手の足元に、威嚇射撃を一発撃ち込む。しかし、相手は怯まない。

「今のは警告だ！早く武器を置け！次は足だぞ！」

俺の言葉に、血の海を踏みしめる。

「ったく。気にいらねえ、足を撃つたって防弾仕様だぜ？武偵は人を殺せない。否、足を撃つても頭は撃たない。だろ？」

くそッ。何で宿が血だらけなんだよッ！それよりこいつ、ブラドよ

りも殺気の量が桁違いだ。

殺人鬼にしては、タチが悪すぎる。

「喋ってないでサツサと置け！」

最後の威嚇射撃をする。隣には風魔が構えてる。

「へいへい。武偵のお兄ちゃん。『デスバイス 爵氏公』が欲しけりゃ闘るよ！」

「なッ！」

とっさに横に飛び退く。片手で鎌を投げつけて来やがった！どんな腕力してやがんだ！

銀髪の殺人鬼に向けて、三点バーストの弾丸を撃ち込む。

が、怯んだのは俺だった。

「師匠！」

風魔の叫び声が聞こえたも一瞬。

殺人鬼が目には捕らえれない早さで、横に回り込んできた。避けきれずナイフを後ろに構える。

しかし、あえてマズかった。

ナイフを持っていた手を、思いつきり捻られた。捻られた腕と一緒に、身体が空を舞う。

思いつきり、身体が床に叩きつけられた。
……かなり効く。

「お主！何者！」

風魔が、クナイ独特な構え方で威嚇する。

「名前？俺に拷問でもして割り出してみな。」

「……………ッ！」

俺の隣、風魔の前に火花が散る。

拳とクナイが交わった。

その火花だ。

「なッ！」

絶句する風魔。クナイと拳がぶつかったのに、拳が真っ二つに割れていないのだ。しかも、砕けたのは風魔のクナイ。鉄の破片となり吹っ飛ぶ。

援護に行きたいが、激痛に動けない。顔が、床の血に染まる。

気付くと風魔は殺人鬼に、自分の首筋に爪を立てられて動けない状態だった。

「……………ちくしょう……………」

そう唸るしか出来なかった。

「よおし。これで出てくる理由が出来ただろ。出てきやがれ。」

「もー、派手にやったわね。大丈夫キンジ？」

ドアから出てきたのは、俺がよく知っている、

「カ、カナ！？」

なッなんでカナがいるんだ！？

「チツ、お前じゃねえよ。もうお前とは闘り合っただろ。俺の勝利だったはずだが？なんだ、再戦か？」

「違うわよ。彼なら、義妹さんと再会を楽しんでるわよ（もちろん健全な）。」

まさか、赤髪のおにーさんがいるのか！？てか、樋田のやつ俺たちがこんな時にどっか行きやがって。

「まあ、あの時の戦闘デスマッチでは負けたけどね。まさか、あなたが武偵弾わ所有してたとは思わなかったわよ。」

「はんッ！んなわけで、眼帯の生意気野郎を出してくれないか。言っとくが、俺の気は短けえぞ。」

そう言って、風魔の首筋の指に力を加えた。うッ、と風魔は唸る。

「大丈夫。二人とも助けてあげるわよ。だから、少し動かないで見えてね。」

カナは、俺に小さく呟いてウインクした。俺は、

「何が助けるだよ！今までどこ行ってたんだよ！」

「あなたの相手は私。彼なら、私を殺した後に接触しなさい。三次移動の連続で疲れてるみたいだから。」

41章 山梨交戦開始（後書き）

「しまりしまるます」

42章 山梨（参戦）

「ったくよおおおお！」

殺人鬼は、風魔を乱暴に蹴り飛ばすと、超人的速さでカナに迫った。それを迎え撃つのは、不可視の銃弾。否、カナのスキル。どこから銃を抜き出し撃っているのか分からない。

「はんツ！その技は前回の戦闘で見極めたぞ！無駄ああああ！」

弾丸をスルリとかわすと、鎌を取り、カナの背後に瞬時にまわり、鎌を振るう。

それを歯軋りさせながら、何処から取り出したカナの武器、鎌ス
コルピオで受け止める。

「相変わらず、力に頼ってるわね……………」

「るっせい！テメエなんぞ、サツサとくたばれ！」

そう言つて、殺人鬼がつばぜりあっている鎌を切り上げた。

一瞬で危険を察知したカナは、自ら鎌を捨て後ろに退く。 退いて正解だった。

カナがいた場所の空が裂けた。

殺人鬼の回し上げ蹴りだ。裂けたように見えるほど、早かった。

俺は、この実体を見て息を呑む。カナが圧されている。見ているだけで分かる。カナが弱いんじゃない。

銀髪の殺人鬼の力が桁違いなのだ。

信じられなかった。自分が、信仰、否、尊敬していたカナが圧されている事が。

「そろそろ、眼帯生意気野郎をだしてくれないかあああああああ？
！」

半ば狂った感情でカナに殴りかかる。鎌は捨てたみたいだ。

「カナ……………ッ！」

瞬間に繰り出された拳をかわすが、不意に繰り出された右拳の裏拳が、カナの溝にぬめりこんだ。

「くそおおおおお！」

裏拳に吐血して噎せたカナを庇うように、俺はベレッタを構えて飛びかかる。

同時に、三点バーストのベレッタが火を噴くが、全ての弾丸が両断された。

「ッ！」

「武偵のガキはひっこんでろおおおお！」

「ぐああッ！」

鋼鉄のような拳が、俺の左頬に炸裂する。いつそ、気絶したかった。その願いさえ許されず、その場に踏みとどまった、俺の腹に激痛がはしる。

ただ、邪魔なサンドバックに連撃の拳を撃ち込むかのようだった。

「ッ！キンジッ！」

後ろから、囁れたカナの声が聞こえた。俺は吐血するしか出来なかった。

「グッ……………があッ……………」

気付いたら、目の前に床があった。

その時、救いに来たのか、破壊しに来たのか分からないような、冷酷な声を聞いた。

第二劇の聖裁聖戦の幕開けだ

分からない。

42章 山梨(参戦(後書き))

「こわれた」

43章 山梨解決

「キシシッ……！やっと来たか、元^{エクスオリエイト}聖裁者不羈茨打！殺してやる！」
好戦的に、ニヤツ、っと獰猛な笑みを浮かべて、赤髪の青年を見据える。のが、床に突っ伏してても分かる。

「つたく、テメエもこりねえなあ。そんなまクタバってたかと思つてたのによ。なあ、『魔族種^{アクマ}』。」

「ちげえよ。俺は、その『親化魔族種^{デビル}』だ。前にも言ったぞ。」

「親化魔族種なら、死んで償え。」

「そんな気、さらさらねえよ。」

「聖裁魔装を装備する」
「抵抗魔装を装備する」

二人が向かい合い、唱える。

「 聖裁聖戦を開始する」

「 聖裁黒塗を始動する」

そして、交戦を開始する言葉を

「 死んで償え！」

「 純血の証明！」

唱えた。

「 な、にッ！」

周りを、紅蓮の焰が散り、周りで爆ぜる。

「 うッ……ぐぁッ！」

腹が軋む。周りで、焰の濃度が濃くなっていく。

「 キンジッ！早く逃げるわよ！」

俺を見つげ、よろめきながらもコッチに近づいてくるカナ。

「もう一人の女の子は、もう逃げたわよ！早く捕まって！」

手を差し出す。

俺は、朦朧とする意識の中で、手を掴んだ。

握る握力すら出せない俺は、カナにおぶられた。

俺は、何故かその背中が懐かしかったように思えた。

「おい！誰か来てくれ！」

そんな訳で、一人、お兄ちゃんと再会できた私だが、置いてきた二人を心配していた。

のだが、ボロボロになって帰ってきた二人を見て、少なからず罪悪感があったのだろうが、無事で良かった。と言った気持ちが湧いてきた。

遠山君を担ぐ武藤君が、遠山君に何か話しかけていた。

陽菜ちゃんの方は、自力で歩ける程の怪我で済んだらしく、星伽さんが手当てをされていて、不知火君は、遠山君をポカスカポカスカと殴りつけている神崎さんを止めている。

ここは、私の義兄が所有する、要塞別荘だ。

外部からの電波を一切受信せず、送信しない。だから、この別荘に「保護されていた」皆は、私たちが掛けた電話に出なかつたのだ。

皆も私達と同様、何者かに襲われたのだ。そんでもって援護、救出したのが義兄で、別荘に保護したのも義兄。

電話に出ない仲間を勝手に、危険な状況にいるから電話に出れなかつた、と勝手に思いこんでいたのだ。私達は。

要塞別荘と名付けられた、この別荘の防衛技術は伊達じゃない。

技術だけじゃない。今、ここには私達が探していた彼と、彼の兄が身を潜めていたのだから。

「くたばれえええ！元聖裁者がッ！」

理性のかけらもない、親化魔族種が吠える。

そんな奴を冷たく見下し、俺は『バックバイター噛解』に、手をかけて念じる。

「破壊し焰、我眠る心中を照らしたまえ」

同時に、

「眠る撃発よ、我の欲を満たし姿を現したまえ」

吠える。

「焰！拔刀！」 「剛力！解放！」

刃と拳が交差する。

ジリジリと、俺が圧されていく。

それを見て、高笑いする親化魔族種。

「お前も終わりだあ！剛力は砕くことは不可能だ！」

その言葉を聞いて、呆れるように答える。

「ハッ！拳なら、だろ？」

「何がだ!？」

「このナイフの名前『噛孵』。噛み孵す。」

噛み孵すを強調して告げる。

「まッ、さか!？」

突如、ナイフの柄からの尾から出現した、刃を見て絶句する。

「噛みを、もう一つ孵す……かッ！」

「力を蓄えてから、こっちに戻ってくるんだったな。」

親化魔族種の、左胸を下から抉るように噛孵は、刺さった。

いくら魔族種でも、自分達の源 「魂」を削られれば、いくら何でも即死だ。

親化魔族種は悲鳴もあげずに、空気と一体化するように、消えていった。

「……………やだなあ。また三次移動しなくちゃならねえのかよ……………。
まあ……………行くか。」

次に、赤髪の元聖裁者が、紅蓮に消えていった。

43章 山梨解決（後書き）

「こたえ」

44章 再装填

「教務科の教師達も探してたんだあ。ちよつと意外だな。」

淡々とした口調で告げる、来示。

「僕はこの通り平気だよ。ちよつと、クソ兄貴と修業してただけだから。」

そう言つて、ドアに寄りかかっている青髪美男子の方をみる。

「お前もしかして、だが、どっかの組織から追われてたりしてたか……………?」

「ああ。追われてたさ。ざつと、大規模部隊五隊ぐらいかな?」

「……………」

「それより、僕を連れ帰るつもりなんだろう?なら、少しここで待機していた方がいいよ。」

「何でだ?今からでも帰れば、三時間ほどで着くと思つが」

「いやいや。生きて帰るなら、最低三週間はかかるよ。」

「……………三週間、か……………?」

「そつ。でも、ココで待機して障害物が消えるのを待っていれば、

安全かつ合理的だからね。」

「ちょっと待てッ！生きて帰るって、障害物って何だッ！」

「さっき言ったじゃん、僕は大規模部隊に追われてるって。」

「部隊って何だッ！お前、そんなのに追われてたのかッ!？」

「はあ。分からないねえ、キンジ。神崎さん達は、この案で了承は得てるけど。」

「クソッ！あいつらが良いならいい。だけど、お前を追ってる部隊を説明しろ！」

「良いけど？武偵局のエリート軍団。魔族種の特攻部隊。天使支援協会の皆様。未確認のイ・ウーエリート。そして、刀間一族ってわけ。」

「……………」

呆れた。コイツ何者だ？

イ・ウー。だからか、アリアが了承したのは。

ココにいれば、イ・ウーの奴を確保出来るかもしれないから。

「じゃっ、部屋まで案内するよ、少なくとも、ココなら武偵校より安全だから。ゆっくりしてようよ。」

そうやって、笑みを返す。

何だよ、俺達が来なくても自力で帰れてこれたんじゃないか？

「そんでもって、ココが男子部屋。不知火と武藤と僕がココ。お前もバックパック置きなよ。」

なんだここ、かなり広いぞ。

それなりに詰めれば、二十人ぐらい余裕で暮らせるぞ。

その状況が想定されているのか、二段ベッド3つ分の隣の押し入れには、かなりの量の、敷き布団が畳まれていた。

端の机は、^{クローニング}整備用の道具が有り、シャワー、トイレ完備。風呂にはジャグジー付き。である。まるでホテルだ。

「お前……何のつもりだ、その強装備……。」

夏なのに上着を着ていた来示は、その上着を脱いだ。

その上着に隠れて見えなかった、拳銃タチが、目に入る。

S & amp ; W M 6 8 6 3 5 7 マグナム . 3 8 スペシャル
6 / 7 発装弾

S & amp ; W M 2 9 . 4 4 マグナム弾

タウルス・レイジング・ブル . 5 0 0 S & amp ; W マグナム
モデル 5 0 0 S & amp ; W マグナム弾 5 発装弾

その他ウィルディピストル、ブレン・テンニ丁ずつや、ブラックモデルのDE。などを所持していた。火力補いか……？手は二本だぞ。

「ん？ああ、ごめんごめん。でも、これで驚いてもらっちゃ困るなあ。」

と、ニヤリと俺に微笑んだ。
ハッキリ言おう。寒気がする。

「狙撃銃を購入してみまふたー！」

布をめくると、出てきたのが

ゲパードM1 対物ライフル

L96A1 対人マグナムライフル

ステアー・スカウト 対人マグナムライフル

が、姿を現す。

来示、何ちゅう武器を所有してやがんだ。そんなアホに忠告するのも忘れ、ただ、ため息をついた。

（アンチ・マテリアル・ライフル 対物ライフルだ。対人使用は国際法で禁じられてるからな。武偵法9条もある。）

と、心の中で呟いて

「大丈夫。迎撃目標は人間じゃねえから。」

44章 再装填（後書き）

「直らない」

45章 起爆

「ダメだッ！発電棟と監視棟が破壊された！完全に隔離された！」
モニターにノイズと砂嵐が走る。

「予備の発電機を始動させる！何としても周囲の把握を急げ！」

男が、小型無線機に叫ぶ。

「ダメです！予備もやられました……ッつつああッ???」
通信が途絶える。

「ま、まずい……。」

「クソッ！主を呼べッ！」

「全員武装して周囲を警戒しろ！」

「り、リーダーあッ！」

青年が、窓越しの何かに指を指す。
男は、指さされた物を見て絶句する。

「う、嘘だろ……ッグアああ！」

要塞の部屋が五つほど、紅蓮の火炎に包まれ吹っ飛んだ。

「お茶の時間を……………」

青髪美男子は紅茶飲みながら、爆発の振動を感じていた。

「っておい、何だよこの振動！地震か？」

部屋に振動が走ったのを、俺達は感じていた。

「おい……………外見る……………」

武藤が窓の外を指差す。

「ま、マジかよ……………」

外に目を向けると、真っ暗闇のハズなのに、紅く、染まっていた。

「そんな……爆発……？」

監視棟が燃えていた。

「え、嘘だろ……爆撃ミサイル!？」

今まさに、山梨の山中に、要塞別荘に向けて爆撃が開始されようとしたとき、来示が帰ってきた。

「襲撃だ、今から包囲網を突破する。武装準備を。」

「お、おいッ。どうなってんだッ!ミサイル飛んでたぞッ。」

「大丈夫。落ち着け。襲撃をくらっただけだ、さあ、武装して。」

クールに、上着からタウルスとS & a m p ; W M 6 8 6を抜く。

「て、敵戦力は……？」

「大丈夫。僕の父だ。」

「海示さん、か?何で……。」

「話すと長い。今は武装を。相手は一人だから、突破は簡単だ。」

そう言うと、来示は一人、廊下に歩み始めた。

渋々、不知火と武藤と一緒に、武装後廊下に出た。

「まさか、襲われるなんてね。」

こんな、爆撃があっても、不知火は微笑む。

「……………。何処いけばいいんだ?」

「神崎さん達と合流したら?そっちの方が安心でしょ?」

「まあ、確かにな……………」

そう言っつて、二階の女子部屋に向かう。
安全装置は外してある。

部屋に着いた。ドアは開いてある。
が、中には誰もいない。

「来示の野郎お……………」

「うん、置いて行かれたね。」

廊下には、冷房の冷気が流れていた。

「兄貴、どうすんだよ。」

「決まってる。撃退もしくは討伐する。」

「はあ、と俺は溜息をつく。」

神崎達は脱出済みだが、キンジ達は置いてきてしまった。

「策はあんのか？」

「特には、絶対的破壊力で討つ。それぐらいだ。」

「あんたねえー……。息子が父親を撃退しようとしてんだぞ？もう少し真剣に考えてくれよ……。」

「まあ、家から追放された身だからな。深くは考えなかったな。うん。」

「はあ……。確かに、俺も言っちゃえば、あんな生活まっぴらごメンだから、縁を切って、武偵校に逃げ込んだしな。」

「んん？それは初耳だぞ。お前も逃げ出したのか？」

「まあ、そうだ。時々、玉藻さんが様子を見に来てくれてたけどな。」

「おお。玉藻さんか、会ってないな。」

「そりゃそうだろ。一族追い出されちゃったんだから、玉藻さんも会えねえだろ。」

「ったくだよ。おっと、元父上の登場かな？」

暗闇の中に聳える人影を指差す。

振り向くと、憑依体の肉体を得た、父??? 刀間海示、が居た。

「あちゃー、^{モラル}完全憑依体が完成しちゃったかー……………」

兄貴が頭をガシガシかく。

「んとだよ??? ンまあ、兄貴の契約のおかげで、あんなのになんなくて済むんだよなあ? そこんとは、兄貴に感謝だ。」

「だろ? だけどねえ、あの頭が固い父上様には理解できなかったみたいで、おかげで追放だよ。」

皮肉を込めて、自分達の父に言う。

「久し振りだな……………来示。」

低い声で、返事が返ってきた。

「父上もお若くなって。」

隣で兄貴が吹き出した。

確かに、あの顔じゃ若いとは程遠い。

「……………。この肉体か。おまえ達も知ってるだろ、完全憑依体に冒されるのは。」

「知ってますよ? だから僕が、来示と一緒に、『悪魔』ではない憑依体を注ぎ込んだんですよ。あんたは反対しましたが。」

兄貴が、憑依体『悪魔』の肉体の海示を睨みつける。

「クハハッ！かわいそうな奴だッ。この肉体の素晴らしさを分らないなんてなあ！」

狂った父親を冷やかに睨む。

「引き換えに、日に日に、魂を貪られるんでしょう？」

「……………。当然の代償だ。そこまで我が儘は言ってられん。」

「『魂を吸った悪魔は現存化し、聖裁聖戦に参加する。』」

唱えるように語った。

そう、現存化に成功したのが、茨打さんが打った白髪の青年だ。名前は『^{デビル}親化魔族種』

「これ以上、『親化魔族種』に力を蓄えられては困る。」

「……………。だから？」

答えは決まった。

「????俺達が貪る」「????僕達が貪る」

兄弟の無限軌道^{キヤタヒラ}が始動し、
聖裁聖戦??? 第二悲劇が連鎖した。

45章 起爆(後書き)

「いきない」

46章 撤退作戦

「???出し、閃光の三矛。太刀と合わさり、絶大なる光を生み出したまえ。??光刀、アナコンダ拔刀!」

闇に、三筋の閃光が迸った。

「甘いッ!??大地を潤す物を消し去り葬る焰よ。眼中の欲のために、血を吸える??焰線、デスライン始動!」

閃光が跳ね返されるように、三方に不規則に消えていった。

次に、兄貴に向かって紅い焰が取り囲んだ。

取り囲んだと同時に、焰の濃度が一気に増した。彼は、地の圧縮盾を構えるが、攻撃範囲は全体。盾の護法魔法が出現する前に、爆円が広がった。

「うがああッ!」

焰から現れた兄貴は、対魔法装備の修道衣から煙を放っていた。

「てめえッ!」

回転式拳銃の、タウルス・レイジング・ブルと、S&P・WM 686の引き金をトリガー海示に向けて、引く。

500S & Wマグナム弾と、.44マグナム弾は、真っ直ぐに、素直に海示に飛んだ。が、途中で、弾丸ごと爆ぜた。

「クソッ！」

M686をしまい、左手にタウルスを、右手に水尻ノ大蛇を抜き出す。

両方を構えながら、海示に走る。

水尻ノ大蛇を振りかざすが、海示の愛用刀、雪原ノ大蛇ススキハラノオロチで受け止められる。

すかさず、左手のタウルスを撃ちこむ。

しかし、雪原ノ大蛇から爆風が迫った。爆風に競り負け、弾丸が落ちる。

「うがあああああッ！」

気付いたら、身体に激痛が走り、紅蓮に染まっていた。火焰に包まれた。

焼ける痛みには耐えきれず、砂利道に倒れる。

「テメエエエッ！」

前には、海示に立ちばかる兄貴が居た。魔力を纏っていた。

『アルケミーデリバランス
魔力解放』

「……………テメエエエ……………コノ野郎……………ッ。」

そう、呟いていた。

「……………。廃迷宮みたいだな、ここ。」

いろいろと落ちている物を見て呟く。
後ろには、不知火と武藤がいる。

「同感。いつになったら出られるんだ……………。」

武藤も参ってるご様子。

「まあ、頑張ろうよ。」

苦笑いするは不知火。

その笑顔で世界が救えそうだ。

「うん、彼の言うとおりでよ。」

その言葉に、頷くは青髪の青年。

うん。その通りだ。歩いて行こう。

.....
.....、
.....。

「はあ。」

無言に耐えきれなかったのか、青髪の青年が溜息をついた。それにすかさず、俺、不知火、武藤は後ろの彼を睨む。

「えっ、どうしたの!?!」

その言葉に三人で突っ込む。

「????? あんた誰だよ!?!」

46章 撤退作戦（後書き）

「とじたまま」

47章 融示融解

「酷いなあ。会ったばかりじゃないかあ、特に、遠山侍、遠山キンジ君は。」

いや、分かってる。でも、何であんたが居る！？
刀間融示！

「って、何で居るんですか！融示さん！！」

不知火、武藤は融示さんの事を知らないはずだ。

『アーザメルト
大気の融解』

の、融示さんを。

俺が、融示さんに敬語なものもソレが原因だ。
名前の通り、大気を操る。
圧迫したり、緩めたり。

否、最強。

相手を確認したら、ソイツに念じるだけで、押し殺せる。自分の手は汚さないで。

「ああ。知らないのね。今、来示達と父上が戦闘中だからね。父上の連れだよ。僕は。」

「なッ、来示が戦闘中!？」

「そそ。あー、そのツンツン頭とイケメン君。拳銃は、そう無闇に出さない方がいいよ。敵か味方が分からないのに。」

そう言つて、下ろせ、のジェスチャーをする。

「まあ、今回から僕は、君達の方に付こう。否、父上を止める。」

そう、融示さんが言つた後、銃声が走つた。

驚いて、武藤達の方を見ると、二人の手から、愛用の拳銃が無くなつていた。

融示さんを見てみると、ズボンに手を突っ込んで、溜め息をついていた。

「言つただろ?拳銃を下ろせと。」

おい、まで。

武藤達の反応、まるで予想外だった、みたいな顔をしている。

まさか、カナが使っている『不可視の銃弾』!?
インサイジブル

「な、何でアンタがその技を……!」

「あはは!この技を使えるのは、カナ君だけだつて思わない方が良

いよ？僕以外にも、使える天才が一人、居るからね。」

……………嘘だろ。

まだ、あの危険な技を習得した奴が居んのかよ。
恐ろしいな……………。

「アンタ……………、何者だ……………？」

「知らない方が身のためだよ？それでも聞きたい？」

いや、結構です。これ以上道を踏み外したくないです。

とは言えず、ただ、首を横に振った。

「ふうん。それじゃあ、行こうか。」

まさか、いやな予感が……………。

「さあて、僕は『奴』を止めに行く。君達も来るかい？それとも、ココで瓦礫の下敷きになって50年後古びた瓦礫を見つけた登山ガイドさんに腐って強烈な異臭を放っていて顔面も崩壊していて猿に猛烈に似ている屍の状態で見えたいのかい？」

……………。一気に唱えるように脅された。

あんたが言つと、現実リアルだからやめてくれ。

「いや……………着いてきます……………。」

一瞬だけ自分の腐った屍を想像して、背筋に寒気が走った。

「まあ、来てもらってもしてもらうことは、無いんだけどねw」

「今笑った！『w』って表示した！」

「まあまあ、落ち着きたまえ。僕は素人の君達には用はない、だから用事はないって言ったただだよww」

「また笑いやがった！素人を『ww』で笑いやがった！」

「いやー、冗談冗談。んじゃ着いてこい。手出しは無用だからな。安全な場所で待機しててくれ。」

だから、あなたの冗談は危険だから。

昔、あなたの家から帰るとき、

「命綱は持った？鉤縄はちゃんと持った？痛っ！冗談冗談。だから殴らないでー！」

で帰り道、いきなり飛んだ鳥に俺が驚いて、踏み間違えて崖から落っこちて、全治二ヶ月。足を二カ所折ると言う、重傷を負ったんだからな。

「はあ……………」

溜め息をついた。

「ははは。二人揃って魔力解放か。だかなあ、僕には勝てない。」

魔力解放に成功した、僕達兄弟に笑顔を向ける。

「るっせえな。減らず口叩くんだったら、僕達を殺してから言え。」

そう言つて、二人で魔力を解き放つ。

兄貴が雷。僕が水。

一気に刀を振り下ろす。少し、タイミングをズラして。

「っておおおおおおお！？」

魔力を纏っていた、兄貴の雷地野ノ大蛇が、思いつきり砕けた。それと同時に、彼の身体が吹っ飛んでいた。

僕は、タイミングを遅らせて振り下ろしたが、止まるうとしても止まらない。

いきなり、左胸に激痛が走った。

拳で、心臓を射抜かれた。

圧迫された心臓が悲鳴を上げる。

気付けば、後ろには、要塞別荘の壊れた壁があった。いつの間にか、後ろに吹き飛ばされていたのだ。

口から血が溢れた。

(チクシヨウ……………。何で勝てねんだよ……………。また、何もできねえのかよ、僕は……………)。

ヤバい、な。意識が途切、れ始めた。

実際……………。我ながら驚く、よ……………。あの時、殴られた瞬、間に……………。即退場のはずだった……………。のに……………。魔力解、放時に……………。は……………。生命力も高まる、みたい……………。だ……………。微かに、心臓、は、生き、てい、た……………。

47章 融示融解（後書き）

「やっではないくない」

48章 融示or海示

「このッ！裏切り者おおッ！」

必死に叫び狂う海示に迫る。

俺は、圧力に負けないように逃げ回る彼を、素人格闘？？？蛇拳とクソアキ功夫を合わせた格闘術で、更に迫る。

「お、お前の目的は、ななな、何なんだ！目的もなしに、親を殺すのか！」

命乞い。醜いな。

「お、お願いだ！僕の目的を達成する為に、魂だけは、残してくれ！力を蓄えたいんだ！」

3m付近に迫った所で、雪原ノ大蛇ススキハラノオロチを捨てて、正座する。

「この通りだ！融示、お前には、僕が成功した際には、絶対に礼をする！だから助けてくれ！」

次は土下座。

全く、力で負けて息子に土下座するなんてな。アホか。

「お前には！謝礼代として3000万円用意させる！短い一生でも、それだけは約束する！」

「あ、兄貴……。」

横では、足取りがすっかりしていない弟??? 封示が居た。

「………………。あんたの目的は何だ。言え。」

逃げ回る海示に質問する。

「そ、それは……………。」

「言えねえのか。言ったらマズいのか？」

「グウ……………。ぼ…………。僕は彼奴と同盟を結んだけなんだ！」

必死の形相で言い訳を開始する。

……………哀れだ。

「ふうん。大分見えてきた。同盟はまだ結んではないんだろ？条件は何を提示された。」

「うっ…………。か、神崎Hアリアの拉致だ……………。」

後ろの壁に待機している、ガキ三人が目を見開いた。
無理もない。

「はははッ！よりによってイ・ウーか！傑作だッ！落ちこぼれたねえー、海示さんやー？『教授』プロフェシオンに頼るようになっちゃあ、アンタもお終いだな。」

「だ、黙れ……ッ！お前が、イ・ウーを退学になってから、どんだけ、僕達に迷惑掛けていたと思っっているんだ……ッ！」

「何だあ？ついには、逆ギレかよ。それと、勝手に世話を焼いたのはアンタだ。文句を言われる覚えはない。」

「クツ、クソおッ！」

ガアアアウウウウッ！

「甘いな……。」

大気に圧された海示の身体が、倒れる。
倒れた身体が、顔を上げ言う。

「……ま、た……僕は、あ、らわれるぞ……。」

そんな決めゼリフをキメて、空間に歪んでいった。

その状況を確認して、こっちに来たのは小生意気なガキ、遠山キンジ。

「ゆ、融示、さん。あんた……、イ・ウーの事を、知ってんのか！？」

「まあ、君が知ってるのが通るか。お兄さんから聞いたのかい？」

「い、いや……。その、これは、アリア達から……。」

「はぁん。そう言う事ね。それで、さっきの質問の返事は、YES。」

つい最近、理子君と同じ日に、退学になった。イ・ウーを。」

その声に、遠山は目を見開く。

「な、何でアンタが……………あの組織に……………ッ！」

「君に、この話は止めておこう。君のお兄さんに殴られたくないんでね。」

「???ッ! まっ、まさか、兄さん、も……………イ・ウーに居たのか!？」

「御名答。お兄さん??? カナ君は、イ・ウーの中でも一際目立つ存在だったよ。」

「うッ……………! 何で……………ッ!」

「気は済んだか? 次は、来示の蘇生だな……………」

俺は、ぐったりとうなだれて、ピクリとも動かない血だらけの、来示を指さす。

「ら、来示……………?」

48章 融示or海示(後書き)

「死にたくもない」

49章 終了作戦

「封示。強制蘇生を開始するぞ。」

来示の呼吸の軌道を確保した融示さんが、後ろに控えていた、封示さんに告げた。

「あ、あの……………、強制蘇生って……………？」

「もう、来示は死にかけてる。脈も息もしてない。……………だから、強制なんだ。」

死に、かけてる？

あの来示、が……………？

何故、コイツが倒れているのかは知らないが、確かに、さっきから全く身動きをしない。

「ふん、シケタ顔をしてるな。封示は、風と雷の能力属性を持っている。……………分かるか？」

いや、全く。

そんな俺の表情を見て、融示さんが、やれやれ、と溜息をつく。

「ハア。まあ、離れて見てろ。」

警告に従って、その場から離れる。

封示さんが、来示の対魔力装備の修道衣を剥いだ。露わになった、引き締まった上半身には、吐血の際の血が垂れていた。

その上半身の、胸骨の結合部左上に手を当てた。何をするか見ていた俺は、次の行動に絶句した。

バアアアチイイイイイン！

来示の身体が、大きく反った。

今の反り方は、AEDなどでの反り方ではなく、身体全体が浮いたと言っ表現の方が、正しく思ってしまう。

次に、胸骨の結合部を、肘を曲げないで思いつきり、二秒に三回のペースで圧す。

十五回終わったら、来示の口に手を当て、（風魔法なのか？）空気を送り込む。

それを二セット繰り返した時に、来示が血を吐き出し、横に噎せた。

「……………っ！グッハッ！」

その身体をさする封示さんが、告げる。

「血、吐きてえなら吐いてこい。ちなみに、肋骨はやられてたぞ。」

その場に、大量の血を吐き出した。まだ動けないらしい。

「なっ、だから強制なんだよ。AEDなどで蘇生した際には、あん

な量の血は吐かない。」

俺の背中を、融示さんが叩く。

「……………。アンタ、強制しすぎなんじゃないか。来示の身体が丈夫だったから良かったが、普通の人間に今の電流を流して見る。感電して死ぬ。」

「おい、兄貴。説明してもらおうか。」

蘇生を完了した封示さんが、来示を置いてこっちに来た。いやいやいや、怪我人をちゃんと見とけよ。

「兄貴じゃなくて、おにーさんと呼ばれたいもんだ。」

こっちもこっちで、ちゃんと心配ぐらいしとけよ。

「一族の鞍替えが起きたんだよ。まあ、他の責任者を無視しての、海示のみの行動だったから、単独の寝返りだったけどね。一族自体は、まだ、健全だ。玉藻さんが、結界を張つといてくれている。」

俺はよく分からんが、まあマズいことが起きているんだろう。

「玉藻さんがか？何故、彼女が張っているんだ。結界師が居るはずだろ。」

「分からないか？海示に抱き込まれたんだよ。一族内での勢力は、玉藻さんと海示で、大きく分かれてる。比は、五対三ぐらいだろう。」

全く分からん。早くもついていけない。
いや、ついて行きたくない。

「残り勢力は、俺達兄弟の傍観者組。今回で、玉藻さんが圧倒的有利にたつだろう。俺達は、もちろん、彼女の方へつく。強力犯罪者予備軍とは、同盟なんて組みたくないだろう？」

「イ・ウー、ですか……。」

溜め息と嫌みを交えて、融示さんに聞いてみた。
が、彼は全く動じず、そうだ、正解。としか言わない。

来示は、不知火達に背中をさすわれてる。奴らには、今の話は聞かれていないみたいだ。

「来示は平気だろう。このまま、武偵高に連れて行っても大丈夫だ。ただ、樋田と言う娘には気を付ける、奴は危ない。」

血相変えて、融示さんが告げる。

どういう意味だ。と、言うより早く、「君達には、また会うだろうから、その時は宜しく。」そう言い、破壊された別荘の、奥に消えていった。

この別荘、どうすんだよ……。

「遠山と言ったな。お前に来示を任せる。山下の倉庫に、改造車が置いてある。それに乗って、武偵高まで帰れ。時空移動は、何回も出来ないからな。君達の連れは、もう行った。」

封示さんも、俺に、車のキーを投げ渡し、奥に消えていった。

「ほんと……どうなってんだよね……。」

来示を背負つ武藤達と一緒に、山を下って行く。

49章 終了作戦（後書き）

「初めの終わりの初め」

50章 by 遠山キンジ

真っ赤に塗装された、コブラに乗りながら溜息をつく。

俺、不知火、武藤の三人は、沈黙を通す。

一日、いろんな事が有りすぎだ……。

海示の悪魔化。イ・ウーとの同盟。来示の負傷。融示さんの能力。封示の蘇生。爆撃ミサイルの到来……普通じゃないな。

時計は、深夜二時を指している。

既に、来示の確保は教務科に伝えている。このまま、後部座席に横たわっている来示を武偵高に連れ帰れば、一応、任務完了だ。コンプリート

(……それにしても、海示の鞍替えは……気になるな。イ・ウーも絡んでるし。)

何だかんだ言っつて、俺も盛大にイ・ウーに絡んできてしまっている。倒した張本人は、来示だからと言っつても、その場に居合わせていた俺も、マークはされてもおかしくない。

武偵殺し。魔剣。デュランダルブラド。次は何が来るんだよ……。

刀間一族とは、絶対に闘りたくないな。融示さんなんか特に。三次元に生きている以上、あの人に勝てるはずがない。

「俺が来示を、教務科まで連れて行く。お前等はどつする?」

武藤が、運転しながら告げる。

あ、気付けば、学園島に入っていた。

「俺は平気だ。歩いて帰れる。不知火は、どうする？」

「僕も遠山君と帰るよ。来示君を宜しく。」

そう言って、助手席から降りる。

「また、明日。」

後部座席の来示は、起きていた。

まあ、心配かけたのは悪いと思う。正直に。

今は、教務科の応接室。綴先生の取り調べを受けている。

「だから本当ですって！疑うんだったら??、あちいッ！」

だから！あついつてんだよ！生徒に焼き入れすんな！

「だからあ、その事じゃなくて、豪州留学依頼はどうすんだよ。」

「知りませんよ！聞いてないし、一日で決めるなんて無理？？うあ
つちいッ！」

「はい、行くの行かないの？ごほッ！」

煙草止める！

このヘビースモーカー！

「だから、ちょっと待っててくださいよ！そんな早く決めれるハズない
いでしよう！」

「アホか。さっさと決める。そのために、教務科は週丸ごと、お前
を探してたんだぞ。」

「そうは言われなくても、いきなり言われても……。留学金とか
は……。？」

「武偵局全額負担。」

「ですよねー……。。」

ああ、くそッ。そこまで言われると迷うじゃないか！

「でも、親に相談……。つちいッ！」

「お前の親は既に『魔族種^{アクマ}』と契つただろ。人間じゃない。」

なんだよ、知ってんのかよ。

「つぐう、でもですねー……。」

「ああ、月鍔?? いや、刀間封示の事もあるか。」

「ええ。…………… って兄貴の事知ってんですか!？」

「そりゃそうさ。嘗て、教え子だったからな。?? アイツはずば抜けてたなあ……………」

懐かしむような表情を浮かべる。

…………… 口の端が笑っている。怖っ!!

「……………」

「確かに兄弟だよなあ。美貌と言い、成績と言い、運動神経と言い、人望と言い…………… ほんと、似てんなあ。」

……………。誉められている実感がわかない。いや、バカにされてる? そう思えるほど、あの兄貴は異常だ。まあ、知り合ったのが最近だから何ともいえないけど。

「ついでに、お前の情報データは……………、強襲科有力首席候補。武器えものはDEブラックモデルが主に、グリップ以外の改造は無し。緊急用に、二丁アルのウィルディピストル。サバイバルナイフの使い手でもあるが、大振りの大刀を使っている現場を目撃され、魔法陣を纏っている姿を見ていた生徒が証言しており、『超偵』ではないかと、噂されている。」

あんだ、全生徒の情報を覚えている、とか言わないでくれよ……。てか、いつ見られたんだよ。いつ。

「一年の入学試験では、教官を全滅させた後に、他の試験生徒を潰してきた、遠山キンジと交戦。刀間来示が優勢のまま試験終了。遠山キンジが強襲科に居た頃、二人で『超無限軌道』と呼ばれ、今は一人『無限軌道』で活躍している。Sランク、単位の不足は無し。本人のことを、潜在意識として捉えている生徒がほとんど、カリスマ性を秘めている。特に、超能力捜査研究科に将来有望、と高評価」

お、おい。カリスマ性って、止めてくれ。キンジじゃあるまいし。

「ほんとーに、似てるよ。お兄さんにも、遠山にも。遠山とは、なんて言うか、対？トラと豹？」

たたとえば曖昧だ……。よく分からん。

「ふうん。まあ、優等生つてことで猶予を三週間あげるよ。但し、それ以上の間は置かないこと。そうじゃないと、教務科に特別手当金が降りないからな。」

特別手当金つて、あんだ達は、金目当てだったのか……。まあ、そんな事だと薄々思っていたさ！

そう、考えていたら「そうゆうことで、終わりだ。送ってやるよ。」との事。

煙草臭い、ルノーに乗って帰宅した可哀想な刀間来示だったとさ。

b
y
遠山キンジ

50章 b Y遠山キンジ(後書き)

「
始まらない」

51章 きつね耳のあの人 part 2

「おい！朗報だ。朗報！来示が帰ってきたってよ！」

「えっ、うそッ！刀間君！？」

「鉦からの情報らしいよ。夜中、教務科に運ばれてる所を見たって、人が居るらしくて。探しに行った遠山君達も帰ってきてるし。」

「じゃあ、じゃあ！歓迎に何かする！？C4爆弾を盛大に爆発させるとか！」

「おっ、いいね、それ！爆薬倉庫から持ってくるか！？」

「……………止めてくれ、歓迎してくれるのは嬉しいけど、死ぬから。強襲科教室吹っ飛ばすから。跡形も無くなるから。」

『歓迎する』じゃなくて『消滅させる』の間違い？僕の聞き間違い？

そんな訳で、強襲科の教室に入ろうとドアに手をかけて静止しております。来示君です。骨折した肋骨の骨は、まだ完治しておりません。

ああ、この目頭が熱くなる感じは何なんだろう？？？世界は不思議でいっぱいだあ……………。

「おう来示！死にに帰ってきてくれたか！さあ、さつさと死んでくれ！」

「来示！さつさと、一秒でも早く死んでくれ！」

キンジじゃないが、本当にウンザリだ。この『死ね死ね団』
周りでは、「死ね！」とか「刀間君だあ！」、「来示、帰ってきたんだ！」などのコールが聞こえる。そして、担ぎ上げられる。

「お前等ツ止めるお！降ろせえ！」

頼んで止めてくれる程、死ね死ね団の皆さんは、柔じゃない。

祭はまだまだ止まらない。

「またですか……………。玉藻さん……………。」
「邪魔してるぞ刀間の。」

藍色の和服を着ている小柄の少女。尻尾と耳さえ無ければ、立派な幼稚園生だ。

「今日の「」用件は……………」

「融示からきているの。海示を討つたらしいな。でかした。」

「へ？」

いや、僕じゃなくて融示さんが討つたんですけど……………」

「おかげで一族も安泰してきたの。お前達兄弟の受け入れも簡単じゃぞ？いつでも帰ってくれば良い。」

「あ、あの、父上を討つたのは僕じゃなくて兄貴が……………」

「融示から聞いておる。よく、封示と共に殿軍の到着まで保たせた。礼を言うぞ。」

そう言うと、とててて、と尻尾を振らせながら冷蔵庫の所まで掛けた。

開けると、一番上に有る水飴を見て、長さが足りない手を必死に伸ばして、必死に背伸びして????って、股下の短い和服が尻尾に突っかかって、背伸びしたせいでもいっつきり、尻尾とともにめくれたぞ！

中を見ないようにして、彼女の背後から水飴を取ってやる。

今度から、玉藻さん専門の水飴とかは下に置いとかなくちやな。

封を開けて、玉藻さんにあげると「ふむ、ほめてつかわす。」と言言い、水飴に没頭。

「…………」。玉藻さん。今日も泊まるんですね？」

答えは分かっていたが、一応。聞いておく。

「ふむ。そのつもりだが。星伽は居らんのか？」

「はい……。僕も失踪中でしたしね……。星伽さんには迷惑をかけたので、これ以上迷惑をかけるわけにはいきませんし……。合わせ顔ありません。」

玉藻さんの前では「星伽さん」

最早、癖である。

「……なら、遠山侍でも良いぞ。現代のとは会ったことがない者だな。」

「現代の遠山じゃ、軽いパニック起こしますよ。ダメです。」

あの前髪ロング、目つきはネクラのタラシを想像する。
うん。合わせちゃ駄目だ。

「確かにの、現代では知るものぞ少なくなりつつあるからの。」

と、一人で納得する玉藻さん。こっちもこっちで、いろいろ残念だ。

「………………。で、兄貴に会いに来たんでしよう。本当は。」

「ふん。少しは考えるようになったな、刀間の。その予定だったんだが、もう、会ってきた。この、学園島内に居ったぞ。正確に何処かは忘れてしまったがな。」

「あ、兄貴が？まあ……じゃあ、なんで僕の部屋に……？」

そう、僕が（？）マークを浮かべると、
デーン

と、効果音が響きそうな紙の出し方をして、僕に見せてきた。

色とりどりに塗られている紙の内容は、明後日開催される、緋川神社の七夕祭りだった。

「……………？……………ッ！まさか、行く気ですか！？」

三拍子置いてから気付いた！

「御輿も出るらしいじゃないか、刀間の。コレも何かの縁。緋川の者に挨拶しなくてはな。」

僕は、軽い頭痛を覚えた。

このパターン、付き添いで僕も連れて行かされるぞ。

あまり問題なさそうに聞こえるが、大有りだ。

耳と尻尾は隠せるから良いが、彼女の容姿は幼稚園生。三百歳を越えているが、見た目五歳児だ。

その付き添いが、高校二年生男子生徒。

同じ学校のやつも来るはずだ。

見られたら確実に誤解される。「来示には妹が居た。」と。

「明後日は頼むぞ。刀間の。それより、何でずぶ濡れなのだ？」

51章 きつね耳のあの人 part 2 (後書き)

「なにもしなくないけどなに」

52章 自立しよ？

友達の歓迎祝い（か、どうかは微妙だが）で、勢いでプールに落とされまして。

なんて、ホントのことを言ったら「修業が足りん！」とか、言われて腹筋、背筋、スクワット、腕立てをそれぞれ五百回ずつやらされる羽目になる。

「いやー、学校でちょっとトラブルに巻き込まれて。うっかり、水をかぶってしまいました。」

「トラブル……？」

「いやいやいやいや！結構これがよくあることでねえ！偶然ですよ偶然！」

顔をしかめたのを見て、必死に言い訳を唱える。こっちは徹夜がかかってんだ！

「それは……お主の注意力が……。」

「わー！不可抗力ですよ、不可抗力！」

「……………？刀間の、お主変じゃぞ？」

小首を傾げる玉藻さん。

あ、危ない。何とか切り抜けたみたいだ。

「そ、それはそうと……僕も忙しいもので。コレから、夜中まで出かけたんですけど……？一人で平気ですか？」

「子供扱いするでないぞ。刀間の。……まあ、脚立を置いていってくれると助かるんだがの。」

そう言つて、僕の腕をポカポカ殴ってくる。前から思っていたことだが、これ、地味にいたい。

これ以上、ポカポカ殴りを続けられては、腕の感覚が一時的にも麻痺したら、結構辛い。そんな訳で、押し入れから脚立を出してやる。

「大丈夫ならいいんですけど、勝手に外出とかしないでくださいよ。察かなんかに見つかったら補導されちゃいますし、一応な身内として僕が、警告をくらうしかなくなるんですからね。」

真剣に告げる。玉藻さんは「分かっておる。」と一言。うーん……こんなに素直な人だったっけ？

今日は、キンジ達に呼び出しをくらっている。まあ、騒ぎの発端は僕だしね。行った方が良い。

「ああ、飯は冷蔵庫の中にある冷凍……って、何でもありません。僕が作っておきます。」

科学製品を扱えないんだった。この人型の狐は。

(……………親孝行じゃないだろうが、一種の恩返しってやつだよな……

…。

事実、実の両親より、玉藻さんと過ごしてた時間のほうが多い。母親は、僕が三歳の時死んだし。この人のほうが、親としてみるのは簡単なのかもしれない。狐の子供もイヤだけどな……………。

そんな、今どきの高校生には似合わない、親孝行気分、野菜炒めとみそ汁を作っていると、六時半を回っていた。約束の時間は七時半だ。

「ああ、僕は行くん、飯は腹が減ったら食べてください。アー、物足りなかつたら金を置いてくんで、下のコンビニにでも買いに行ってください。九時までなら平気なんで、耳と尻尾は隠して！」

そう言い残して、武装を開始する。服装は、上下スポーツ練習着。夜のランニングをするためだ。この頃さぼり気味だったからな。

下の練習着には上からジーンズをはき、薄い上着を羽織る。装備科に特注した防弾性の優れた、パーカーだ。

DEとウィルディピストル二丁とタウルス・レイジング・ブルを、上着に装着されたホルスターに収める。整備は終えている。

「んじゃ、留守番頼みます！玉藻さん。」

「……………分かった。」

まるで、自立していく息子を見ている悲しげな表情で見送っていた
???

52章 自立しよう？（後書き）

「たてなくもない」

53章 来示の楽しい説明会

約束したファミレスまで約二キロ走れば六分ほどで着くが、あまり走ると汗がでる。それは避けたい。そんな訳で、元凶である僕が早めに付かなくては風穴祭り確定なので、早めにでたのだ。

しかし、既に任務参加メンバーは揃っていた。なんか知らないがジャンヌも居た。

「えーと……僕、時間、間違えちゃった？」

居間に流れる、ドーン……。と流れるマイナスな気流を感じて一歩下がる。

「か、刀間、か……。大丈夫だ、遅刻じゃない。」

「うん……ほら、座りなよ。」

ゆういつマトモなのが、不知火とジャンヌ。不知火は、目元にクマを作っていたが、この程度なら消える。そして、この雰囲気の中で一輪の花のように苦笑いしていた。レキは……疲労は無いのだろうか、残念な事にいつもと変わらず無表情。いつさい動かない。

「……それじゃあ、本人も来たし……始めますか……。」

カンパー……イ……。と、芸能人のお通夜に負けないほどの、ドンより空気の拷問タイムが始まる。

「お、おい……。皆どうしちゃったんだ……？」

隣で、ミネラルウォーターの入ったグラスを、武藤とキンジに、ガチンツ！と乱暴に当てられた不知火に、聞いてみた。

「任務の疲労だよ。一日中、興奮して寝られなかつたって。僕もそうだけどね。特に、女子のほうはかなり酷かつたらしいよ、ね？」

苦笑いしながら神崎の方を向く不知火。

対する神崎は……化粧で誤魔化しているが、あるな、クマが。

「……酷かつたわよ。いくら何でも、地帯空ミサイルをぶっ放してくるとは、誰も思わないわよ……。」

そう言い残し、ももまんの手を伸ばし掛けた所で、両手を前に広げる形で、机に突っ伏して寝始めた。

それにならって、キンジ、武藤も椅子に座りながら、うなだれながらも寝始めた。

ジャンヌ、レキ以外も羨ましそうに目をこすって欠伸をした。

「ふああ。……マー君。あの、脱出系ムリゲーを……やらせたんだから、後の……報酬は……くれなきゃ……ガオォー……だぞ……。おや……すみ……。」

「……私、も……お休み……なさい……。」

理子と樋田も離脱^{アウト}。残るは、僕、不知火、レキ、白雪、ジャンヌだ。ガラス張りで仕切られているが、こっちを見たお客さんは、かなり引いている。………ムリもない。ちなみに、マー君と言うのは、理子語で言う僕らしい。

「………。まあ、ここらへんで解説に入って良いかな？そのつもりで来たんだけど………」

これじゃあ解説にならない。半分の間人が、睡魔に負けた。

「まあ、良いだろう。私も、それを聞くつもりで来た。トオヤマ達には私から伝えておこう。」

まとも組のジャンヌが言う。相変わらず、こういうマトモな人が居て助かる。

「………私は聞くつもりで来ました。」

「わ、私もです………」

「僕もだよ。」

レキ、白雪、不知火の順で返事をしてくれる。まだ、望みはあるぞ！全員は離脱していない。まだ、良い方じゃないか。そうだろ！来示！

「ちょっと長くなるけど、先ずは僕の特殊能力『^{アルケミィ}魔力解放』から………」

それは、僕の、『過去』に関する話?????

「僕が属する、刀間一族『箕鷲』^{ミサキ}。この名前は初代の刀ノ水ノ間が決めた、幻想体を取り除くため、に設立されたんだ。

日本で、幻想体を駆除することに没頭した箕鷲は、戦に源氏側で参戦することを命じられ、戦場で活躍。

軍から評価され、支援を受ける事になった箕鷲は、幻想体を破壊する事に成功。勿論、魔力解放を使って。

その後、魔力解放を使い戦に参戦するが、不発。発動することに失敗。呆気なく討死。

それで、一族は追い詰められ、不可解な死を遂げる者まで現れた。そこで、生き残りは逃亡をはかった????

それが、刀間一族の始まり。僕が、逃亡をはかった生き残りの末裔だ。

話に出てきた『幻想体』。これは、今で言う悪魔。僕達は『親化魔^{ビレ}族種』と呼んでいる。

そして、僕達の種別は不適合種 ^{ステルス}超能力者。

????ココまで分かる??

「^{ムゲンステルス}夢幻超能力者……。」

「まさか……実在してたなんて……。」

ジャンヌと白雪が、口をアングリ開けている。

「?種 ^{ステルス}超能力者みたいに、僕達は魔力使用后、何かを撮取するよ

うなことは僕達はしない。

その代わりに、潜在意識の中にある『記憶』思い出に当たるもの？それを失う。しかも、魔力を使ったときの最近の記憶を。

幼いうちは、記憶を失う。

だけど、成長することに、元々潜在意識にある、『魔族種^{アクマ}』を目覚めさせる。

魔族種は、潜在意識の中から、主、刀間一族の人間と『契約』する。

『魔力解放より、膨大な力を与える』、と。

契るしかない人間は、魔族種と魂を共有するようになる。

当然、記憶の中にいる魔族種は、記憶に変わって削られていき消滅する。

それを防ぐために、契約者の魂を吸い、吸い尽くした人間は死に、魔族種は生き返った、親、『親化魔族種』と合流して、力を融合する。」

「だ、だから、『親化魔族種』を消滅した箕鷲は、魔力の供給を手伝う『魔族種』を失って、不発したのか！」

「そう、正解だよ。」

そう言い、興奮するジャンヌにウィンクする。

それを見たジャンヌは、顔を真っ赤にして「と、当然事だ……。」「と、横を向いて顔を隠してしまう。」

「さあ、次は『親化魔族種』『魔族種』についてだ。」

53章 来示の楽しい説明会 (後書き)

「ミサイル爆撃の指導者……出てきやがれ」

54章 来示の意味不明な説明会

「力を蓄えた『親化魔族種^{デヒル}』は、人間の身体を得るために、幻想で人の身体を奪う。

???まだ、僕達は分からないんだけど、人間化した親化魔族種は、何かやるうとしているんだ。……分らないけど。

それで、人間化した親化魔族種が、魂を扱られると、『再幻想』つて、初期の幻想体??身体を持たない親化魔族種になる。

それで、また『魔族種^{アフマ}』が、力を持つてくるのを待つて、蓄えてまた、身体を得る、そして消滅して、幻想体に戻る???これの繰り返しだよ。

コレを聞いた僕の兄は、身体が死んだけど、魂は生きてる『水ノ風^{みず}のかぜつき』の、魂を、僕の存在意識を、人工的に植え付けた。

だから、僕は悪魔化しなくて済むんだけど、どうやら僕の魔力消費率は、一族の中でもずば抜けて大量で……。彼が変わりに削られていくんだけど、消滅したら最期、『魔力解放^{アルケミーデリバランス}』を使えなくなるんだよ。

月鍍が来たから、使えるようになった『無限軌道^{キヤタヒラ}』も当然使えなくなる。

それで、あの時の襲撃は、悪魔化した僕の父上が襲ってきたってわけ。

これで、説明は終了だよ。」

???沈黙。

気付けば、皆起きていた。

ジャンヌと白雪だけが、妙に納得した表情を浮かべている。

他のみなさんは、アングリ口を開けている。信じられない。と言った感じで。…………レキは無表情。不知火は苦笑い。

「え？驚くこと？」

敢えて無視された。

その後の説明会は、スムーズに進んだ。

神崎がキンジに発砲したり、武藤が白雪を口説いてたり。

レキの武偵犬の銀狼、ハイマキがファミレス内に侵入してきて、他の客が軽いパニックになったり。

「軽く、心配してたが…………お前は、平気のようだな…………。」

神崎とキンジの喧嘩に巻き込まれないように、僕の隣に待避したジャンヌがいきなり話しかけてきた。

「ん？僕？」

「他に誰が居る。」

「んー。まあ、平気だけど。お前こそ、いきなりどうしたんだよ？」

「そ、それは……、ただ心配だったからだ！」

蒸し返した僕に、焦りながら答える。何だ？

「？」

「だ、だからッ！お前の探索任務に参加できなくて、すまなかった、と言いたかったんだ！それぐらい分かれ！」

顔を真っ赤にして怒りながら謝る、全く意味不明だ。
てか、今の会話だけじゃ絶対わかんねえぞ。

「ああ、そんなこと……。全然平気だけど？気にしなくて良いよ。」

「…………お前が気にしろ…………。」

「へ？何を？」

ボヤクジャンヌにまたもや(?)マークを飛ばす。

「ハア……。何でもない。」

今度は溜め息かよ。意味が分からん。

しかも、隣では不知火がこっちを見てクスクス笑っている。

……ほんと、意味が分からん。

そんな、無駄に派手な説明会が終わり、キンジと帰宅中???

「ちょっと、手伝って欲しい任務があるんだが、一緒にやらないか？」

「ん？別に良いけど？」

「よしッ！なら、細則はメールで送るッ。」

そう言っつて別れた。

何だったんだ？

そんな事は忘れて、十キロメートルのランを始める。
任務内容は、カジノ警備だった。

キンジが、実の兄、カナと再開を果たす前のメールに、そう書かれていた。

54章 来示の意味不明な説明会（後書き）

「あれは、四足四分裂多頭ミサイルだよ？」

「????ハッ!.....ハアッハアッ.....!」
額から流れた汗を拭う。

混乱した頭で状況を判断しようとする。
隣のベッドには、スピー、と寝息をたてる玉藻さん。

.....ゆ、夢か。
そうだ。昨日、帰ってきて汗をかいてたから、シャワーを軽く浴びて、ソファで寝息をたてていた彼女を運んで、僕もそのまま寝たんだった。

(危険.....信号、だな.....。)

時折、こういう事はあるのだ。悪夢が正夢になることが。そうでないことを、願うが.....。

起きて、朝飯の用意をする。
普通の、バタートーストだ。玉藻さんの分に、二枚。自分のは一枚だ。元々、朝は何も食べない派なのだ。

今日は、強襲科などの授業は休む。玉藻さんの世話や、最近さぼり

気味だった整備をしなくてはならない。昨日依頼された、カジノ警備の細則も知らないし。

「おはようございます。昨日は寝れましたか？」

目をこすりながら寝室から出てきた玉藻さんに、挨拶を。

返答は「まあまあだ。」「……………まあまあって何だよ。」

「今日は、一日中家に居ますけど……………何か用事とかは無いですか？」

「無いぞ。あるのは明日だけじゃ。」

そう言っつて、七夕祭りの紙をだす。

それは、もう分かったから……………。

「……………はい。分かってますよ。では、僕は整備をしてくるんで、部屋にはいるときはノックかなんかしてくれと、かなり、助かります。」

そう言い残し、個室に入って、ウィルディピストルの整備から始める。

キンジとかの、違法改造は一切してないし、購入した原形をちゃんと保った状態で、グリップ部分だけしかしていないので、かなり、内部は簡単な構造になっている。回転式拳銃だし。

二十分ほどで二丁、終わった。短縮時間、最高記録だ。

次は、DE。

残念なことに気付いてはいたが、チェンバーの部分が、大きく壊れ破損していた。海示に吹っ飛ばされたときのせいだ。使いものにならないので、破損していない部分だけを外し、保存する。改造に使えるかもしれない。

後、タウルス・レイジング・ブルの整備を終わらせる。

これで、DEが壊れたので、S & amp; W回転式拳銃の二丁を合わせて、ブレン・テン。だけになった。自動拳銃は。

何かと、買ったのは良いけど使っていない、違法ライフルをみて溜息をつく。

ちなみに、僕はスナイパーライフル、マグナムライフルも扱える。

キリングレンジ
絶対半径は1582m。

流石にレキには負けるが、結構腕の立つほうだ。ランク、Aは狙える。

次、水風ノ大蛇。

これは、研ぐだけなのであまり集中力はいらさない。指を落とさないように注意するだけだ。力加減とかは、もうマスターした。ただ、刃渡りが長い分、時間が居る。

(キンジ達……今頃何してんだろうな？やっぱ、インケスタ探偵科の授業かな？)

そのころ、理子の目に、カナブンが張りついていた。

55章 この大空に翼を広げ、飛んでいきた〜い〜NA (後書き)

「ありえん」

56章 兄弟戦(前書き)

間が空きました・スイマセン：；
忙しかったんです；許してください；

原稿が進んでないのは気のせいかな？

56章 兄弟戦

刀の整備が終わった時、丁度、携帯の着メロが響いた。理子からだ。

「んあ、どうした。何か用か……………」

『強襲科アサルトの闘技場コロシアムに早く来い！アリアとカナが、闘ってる！』

「えッ？何だよいきなり。」

『強襲科に急げ！アリアが保たない！』

ブツッ！

電話を切られた。

「……………アリアとカナが闘っている……………？」

「……………アリアが保たない……………？」

キンジの兄が……………？

「まっ……………サカッ！」

あることに気が付き、魔法改造が施されたバイクのキーをとる。

(まっずい……………！)

「ど、どうしたんだ？か、刀間の？」

形相を変えて部屋から飛び出した、僕を見て、玉藻さんが驚き叫ぶ。

「急用です！少し出かけますんで宜しく！」

マガジン
弾倉と水風ノ大蛇を、バイクを出しながら確認する。

魔法改造二輪車。武偵高まで、三分で着いた。

強襲科に向かっているのは、理子と僕以外にも、キンジがいた。

途中、走って向かっていたキンジを拾い、全速力で、武偵高のグラウンドを掛ける。……後で、教務科から呼び出されるな。

バイクを入り口の横に置き、おおお！と、どよめく観衆、武偵高生を押しつけて前へでる。

防弾ガラスの向こう、闘技場の中心から……銃声が聞こえてくる。

「札幌武偵高サッコウにあんなすげえ女子がいたなんて？？？聞いたことねえ！」「神崎の無敗伝説、こりゃ本気で終わっちゃうぜ。」「どうやってのよ、全然見えないわ、あの銃撃……！？」「あの、後ろの男、何者？超偵………？」

「やれやれやれや！どっちか死ぬまでやれや！」

と言う大声に顔を上げると、防弾ガラスの衝立の上に、強襲科教師の大女？？蘭豹がいた。

「????アリア！」

キンジが、叫びながら衝立に飛びつくと、その向こうに、

????カナと、兄貴、融示が、いた!

「おいで、神崎・H・アリア。もうちょっと????あなたを、見せてごらん。」

パァン!

カナが、不可視の銃弾インサイジブルを放っている。

神崎に、確実に当たっている。

だけど、カナに殺気はない。

「うっ!」

ずしゃっ!

神崎は短い悲鳴を上げ、足払いにかかったように前のめりに倒れた。

「蘭豹、やめさせる!こんなもの考えても違法だろ!また死人がでるぞ!」

キンジが、必死の顔で上にいる蘭豹に叫ぶ。

「おう死ね死ね!教育のため、大観衆の前で華々しく死んでみせろや!」

とのこと。

蘭豹に二人を止めさせるのは無理だ。????となると。

防弾ガラスの扉をICキーで、キンジが開け放った。

わあっ、と周りの何人かが驚いて声を上げる。

僕も後に続く。

「兄貴！二人をやめさせる！」

「カナ！やめろ！」

二人で叫ぶ。

血流が変わる。『俺』だ。

「くおらこの刀間ア！授業妨害すんなや！脳ミソぶちまけたいんか！」

ドウツ！！

蘭豹が、俺の足下をねらって撃った。巨大拳銃M500を。

弾丸を水風ノ大蛇で切断して逸らす。観衆が、オオ！と、どよめく。

それに振り返る、戦闘中の二人と兄貴。

その時、兄貴の方向の、俺の近くの空気が、縦に光った。その技を、一瞬で読む。『大気の斬撃』アーザカット

切り開かれた空間を避けて、水風ノ大蛇と、レイジング・ブルを構える。

「まさか……あの人が、『大気の融解』アーザメルト……？」「マジ！？超ヤバくね！？」

などと、騒ぎ始めた。

そう、兄貴は『大気の融解』の二つ名で、名を知らしめているのだ。

「お前は神崎のセーブに行け。俺は……兄貴を止める。」
後ろに居るキンジに囁く。

「そんなの分かってる！」

そう言っつて、二人の間に割り込んでいった。
俺は、兄貴に向き直す。

「やあ、来示。肋骨の骨は直ったかな？」

呑気に聞いてくる兄貴。直ってるわけねえだろ。

「んなわけねえだろ。兄貴みたいに、修復力は一般的なんだ。」

彼にレイジング・ブルを向ける。

「呆れたねえ、僕に勝てるだけでも？」

「ムリだよ。でも、アンタは神崎を試すんだろ？なら、止めるぞ。」

ガアウツ！

レイジング・ブルが火を噴く。

続けて、

ガアウツ！ガアウツ！ガアウツ！ガアウツ！

全ての弾を撃ち込む。だが、大気を操る兄貴の前で、カランカラン
カランカラン……と落ちる。

「でやああ！」

水凧ノ大蛇で斬り掛かる。
彼の口端が、フツ、と緩む。

気付いたが遅かった。思いっきり、頭を、突如出現した見えない空気の壁に、ゴンッ！とぶつける。

俺は、痛みに顔をしかめながらも、刀を収めウィルディピストル二丁を抜き出す。

あと、少し、保たせればいい！

ズガズガズガズガズガズガズガズガズガズガズガズガズガッ！！

ひたすら連射。ひたすらひたすらひたすら。

そう、勝てるはずがない。だけど、撤退してもらうことは、出来る。隣では、キンジがカナを叫びながら説得している。

「まあ、少しは学習できてんじゃない？時間の稼ぎ方がちよいと強引だと思うけど。」

「しゃあねえだろ。他には、こんなんしかねえしッ！」

笑みを浮かべる兄貴に、ウィルディピストル一丁を横に構え、水凧ノ大蛇を抜き出し上に構えて突撃する。

彼の表情が変わった時をねらって、一気に、刀を構えている腕に力を込める。

「せやあッ！」

縦回転に回るように、手首を引くように刀を力一杯投げる。

「そうくるか……。」

兄貴が顔をしかめる。

勿論、水風ノ大蛇は見えない壁にぶつかり地面に落ちる。だけど、それで良い！

今の、水風ノ大蛇の当たり方と落ち方で、どこに壁があるか分かった。????さつきと同じ、頭の位置だ！

ずしゃああああ！

壁を避けるようにして、スライディングをしながら水風ノ大蛇を拾う。ウィルディピストルを、斜め上に居る彼に向ける。

「あまり、お前の怪我を悪化させたくないが……。」

トリガーを引こうとしたとき、彼の身体の前でマズルフラッシュが光った。

???ズガン！

???ズオンツ！

????ズギイイン！

俺の銃弾は、兄貴が「不可視の銃弾」で撃った銃弾に真つ正面からぶつかった。跳ね返された俺の銃弾は、真つ直ぐ飛んでつたウィルディピストルの銃口に戻ってきた。

自らの銃弾に破壊されたウィルディピストルは、衝撃で俺の胸にぶ

ち当たった。完治しない肋骨に?????

57章 敗北〜刀間融示〜（前書き）

ちよっ、オマツ！

.....ESCで原稿を消しちゃった；w；

57章 敗北、刀閻融示

「ウガアッ！」

思いつ切り地面に咽せる。血が混ざっていた。

……………ダメだ。しばらくは動けない。

しかし、これは痛いぞ。ウィルディピストルが一つ、ぶっ壊れた。

愛用拳銃でもあったから……………痛い。

それと、拳銃だけじゃなく身体も。

左胸がズキズキ痛む。尋常じゃない。

「まあ、お前も頑張ったんじゃないか？僕は帰らさせてもらつよ。また会うと思うから、その時はよろしく。」

バイバイ。と、手を振って空気に溶け込み始める兄貴。
会いたきゃねえよ。絶対に。

一方のキンジは、どうやら被弾したらしく、カナに銃口を向けつつも、腹を押さえている。その時、入口から

「こ、こらぁー！何をやっているんですかー！」

湾岸署から駆けつけたらしい小柄な婦警が???いや、変装をした理子が、生徒をかき分けるようにして強襲科アサルトに入ってきた。

?????よ、良かった。ひとまずは……………。

一気に神経が途切れたみたいに、ガクンと顔を落とし意識を無くした。

目覚めたのは、救護科アンビュランスのベッドの上だった。救護科の生徒は居ない。かわりに神崎が居る。

……………どうやら、泣いてるみたいだ。

声をかけても気まずいだけなので、寝たふりを続ける。

まあ、無理もないだろう。

案外、コイツもプライドが高い。無敗記録を破られたショックはデカいだろう。起きたことはバレてんだだろうが。

「起きたわね……………」

ほらね。呼吸数で分かったとか言うぞ。

「???私には分かるの。今、少しだけ呼吸数のリズムがズレたから。」

ね。

僕も分かっちゃうんだよ。

つて、無限軌道キヤタレトラきれてた。もうちよい続いてもおかしくないのに、まだ、十五分ぐらいしかたってないのに。

「まあね。まだ痛むから寝させてくれ。さっきのことは気にする」とはしないさ。」

「……………。あんた達がジャマしなければ、いくらでもって勝つ手はあつたんだから…………。」

事実を否定するかのように、ぎゅう、と小さな膝に額を押し付けた。分からなくもないよ。その気持ち。

「ああ、そうかもな。でもなあ、キンジはお前が殺されるかもしれなくて、心配して来たんだ。大目に見てくれないかな?」

このまま強気に説得しても、神崎をキレさせるだけだ。

口説くのが得意な兄貴をマネして、甘い感じの口調で話し掛ける。

「よ、余計なお世話よッ!」

顔を真っ赤にしながら地団駄を踏む。

赤面、早いなあ。

「ん?余計なお世話にしては、身を挺して守ってなかったか?君の事を。アイツだって、腹を被弾してたじゃないか。な?」

僕の声に、ウツ、とうなり声をあげて、顔を伏せる。

「本当は、嬉しいんじゃないか？アイツに、体を張ってでも自分を守ってくれたことが。」

ズガン。と、効果音が鳴ったような気がした。凶星だな。上げた顔を真っ赤にしているところを見ると。

「あ、あんなのハジ！ハジよ！最悪武偵に助けられたなんて！ハジよ！ハ！ジ！」

！の出る割合で地団駄を踏む。本当、ガキって言うかなんて言うか……いや、ガキだな。こりゃ。

「そう、カッコしないです。僕も一緒に謝りに連れて行ってあげるから。ほら、行こ。」

痛めた左胸を庇いながらも、ベッドから降りる。

「……………」

後ろの神崎は、一応黙って連いて来る。謝る気はあるらしい。

強襲科に戻って、改造バイクを取りに行き、神崎を後ろに乗せてキンジの居る、男子寮に連れてってやる。途中、神崎の要望でコンビ二に寄ってやる。謝るときの謝罪材料にする気だな。……………頭が回るやつめ。

キンジの隣には、玉藻さんが居るはずの僕の寮がある。慎重に進む。

玄関前で止まり、神崎に目配せする。……………テロ集団の本拠地に潜入するみたいだ。コッチは今後、神崎の機嫌が掛かっている。本気で闘らしてもらうぞ。

「……………ただいま。」

ゴクリ……………。

拗ねるように、神崎がドアを開ける。

キンジの行動によって、僕の安全率が変わってくる。

「キンジ、いる？あのさ、さっき……………ごめん。あたし、ちょっと気が立ってて……………」

そつだ。そのまま話を盛っていけ！キンジ！

「来るなアリア！」

開きかけた扉に立ちすくむ神崎。奥で何があったのかはこつからだ
と見えない。キンジの声だ。

「な、なによなに」

「いいから帰れ！」

お、おい。

なんかヤバくないか。

マズいよ！コレ！

「とにかく一晩、どこかに行ってる！武偵高からも出るんだ！」

「……………!？」

両目を見開いた神崎が、部屋を見よつと背伸びする。
そして、防弾扉を閉めた。

「……………えっ。何やってんだ？」

小声で、ビニール袋を提げている手を震わしてる神崎ドア越しに話しかける。が……………。

「カナが、いたわ。」

ピシャァンツ!

雷みたいな効果音が鳴った。

????? パラノイア。でしょうか？

58章 仲直り作戦

「そうよ、そうだったんだわ！最近、ちょっとパートナーらしくしてたのは……これで最後だと思ったから、気が楽だったんでしょ！あ、あたしをぬか喜びさせて、どうせ、どうせ心の中で笑ってたんだわ！」

「お……おいアリア！」

「あーあ、やっちゃったあ……。」

お互い、取っ組み合う状態になったキンジとアリアを見て、僕は嘆息する。

どうして、いつつもこうなのかなあ……。

「どうしたんだよお前！いつペン負けたぐらいで、急に世界中が敵になったような顔をするな！」

「あたしと……パートナー、やめたいから！昔の恋人……パートナーを、けしかけて！最低だわ！あ、あたしが最近の武偵らしいあんたを見て？？どんなに嬉しかったか！それを、それなのに！この！バカキンジ！」

「違う！か、カナが恋人なわけないだろ！」

「じゃあ何なのよ!」

………キンジも、兄さんだ!とは言えないだろうな。カナは見た目、美少女だし。

神崎に言ったところで、余計起こらせるだろう。

「……!」

まあ、そこで何も言わないのもどうかと思うけどな。キンジ君、後ろだから正確には分からないが、神崎が泣き始めたじゃないか。

「ほらあ!どうして答えられないのよ!カナは何なの!何で2人つきりで部屋にいて!なんであたしに『出ていけ』なのよ!ひぐつ、どうせ??うまくいった、って、ひつく、2人で笑ってたんでしょ!あんな、あんな、悪魔みたいなやつと??!」

「???違つツ!」

「カナ!この悪魔!出てきなさい!銃弾たまは込めてあるわ!キンジは、キンジは、キンジはあたしのものだあ!」

その時、キンジが神崎を突き飛ばし、自分の上着に手を着けるのが見えた。

(威嚇射撃するつもりか!)

一瞬を付き、僕は水凧ノ大蛇の鞘を握りしめ、神崎を受け止め、キンジが放とうとするベレッタの射撃線上に割り込む。

そして、放たれた9ミリ弾ルガーを、抜き身の水凧ノ大蛇で切断する。

ギャギインッ!

「ら、来示イ!?!」

驚きの声を発するキンジは無視。後ろの、赤紫の目を驚愕に見開いている神崎の表情を、伺う。

(……………これで、神崎のショックも和らいでくれれば良いけどな。)

そう思ったが、予感は的中。

「……………もう……………おしまいだわ……………」

神崎は両手で、その顔を覆い。

その手の下に、小さな川のように涙を流しながら??

「……………もうみんな、何もかも……………ほんとに、なくしちゃったよ……………」

そう言つて玄関の方に、歩く気力もないのか、フラフラと歩いて行った。

「来示君も居たの?さすがね、全然気づかなかつた。」

ため息をついたら、リビングの方からカナの声がした。キンジは、呆然としながら神崎が置いていった、ビニール袋を拾い上げていた。そんな光景を見ながら、軽く眩暈をおこしながら、カナに言う。

「……………カナさん、貴女の事情も分かりますが程々にしといてください。第二の可能性の実現率、その計測は特に……………」

「あら、知ってたの？まあ、それもそうね……。」

感心したように、カナが呟いた。

……『第二の可能性』兄から聞いた話した。

「……………キンジ、ついでだ。これ、行ってこい。理由は、分かっているよな？」

グリップを壁に叩きつけているキンジに、玉藻さんが今朝、僕に押し渡した、七夕祭りの紙を投げ渡す。つまり、神崎とそれで仲直りしろ、ってわけだ。

「……………う、何で、俺がッ！」

「お前以外に誰がいる。」

そう、言い残し神崎の行った方を向く。

神崎はすぐ見つかった。

男子寮の二階の階段からでも見えるぐらい、彼女の緋色髪のスインテは目立つ。

そして、合流した泣いている神崎を、口説き口調でバイクに乗せながら計画を話す。最初は否定されたが、やる気はあるらしい。

上野駅ジャイアントパンダ前集合、から始まる作戦を。

59章 夏祭り

「玉藻さん……そんなに食って平気ですか………?」

わたあめを千切って、パクパクパクパク食ってる、リアルキツネ少女の玉藻さんに、さすがに心配になったので声を掛けた。………てかあんた。さっきから、あめ、と名前の付いた食い物しか食ってないだろ。

「心配はいらなぞ。俺は糖分の摂取だけなら、肥らない体質だからのう。」

「……ま、まあ大丈夫なら良いんですけど………。」

まあ、その体質の事は知ってたよ。………て、事は、I種超能力者なのかな?

不適合種 夢幻超能力者の僕たちには関係ないけど。

そんなかんじで、七夕祭り。周りは、男女のカップルや、家族連れなどで賑わっている。隣のリアルキツネ少女の頭には、いつものベビーキャップみたいな帽子をかぶってある。

斜め前、横にはキンジ、浴衣姿の神崎がいる。護衛ってやつだ。…神崎、も………玉藻さんに負けないぐらいの、食べっぷりだ。

ジトーーーー……………

「ん？」

「何を見てるのだ、刀間の！」

「……………うおッ！」

思いつきり、スネを蹴られた！イテエ！

う、うう。今後ろ側に見えた樋田らしき、俺達を監視する女子は見なかったことにしよう……………。おかげで、右足を負傷した。

??わあー！

その時、人波と一緒にながれてきた御輿が見えた。玉藻さんは、お、と声を上げている。そして、前を見ると、おっ！人波に巻き込まれた神崎を、キンジが手を引つ張って誘導している。スポット、神崎の身体が人波から、救出される。

「……………つて、玉藻さん！？」

苦笑いしながら隣を見ると、御輿によじ登ろうとしている、キツネ少女が目に入った。あんた、何してんだ！

後ろの襟をつまんで、持ってきた玉藻さんを、キンジ達が入ってった広場みたいなところの、ベンチに座らせる。

「少しは、考えてくださいよ……普通、御輿の上に登ろうとする人居ますか!？」

頬をぶくー、と膨らましてる玉藻さんに説教を開始する。効果は……無いだろうな。

「緋川の人に挨拶するだけだったんじゃないんですか!？」

マジメにキレ始める僕に、うるさいのう。と、ため息をつきながら御輿の方に目をやった。……あんた、ゲンコツくれたるか。

「……………それより、玉藻さん……………?」

「ん、な、なんだ?」

いきなり口調を変えた僕に戸惑ったのか、わたわたつ、と動き始めた。

「……………先週、武偵局から豪州留学の依頼が来ました。留学金は局が全額負担。多分、あっちでの学園生活も悪くないかと……………」

「……………。」

「でも決められないんですよね。やっぱ、今の居場所も悪くないし、バカな友達もいるし……………。でも、武偵高の人にも悪いし……………」

どうすれば良いんでしょうかねー……………?

ため息混じりに、ベンチに座る玉藻さんの隣に腰掛けて、空を仰ぐ。蒼く澄んでいる???晴天だ。

「……………阿呆か、お前は。」

「えっ?」

驚いて隣を見る。……………当然ながら、玉藻さんが居る。

「自分で決めれば良からうが。もう、元服しておるじゃろうが。別に、海示の受け売りではないぞ!？」

「えっ……………え?」

「だから!自分で決めろ!そんな事!」

真つ赤になって、首を振る玉藻さんに、僕は首を傾げる。……………こんな事言う人だっけ?

「ま、まあ。そうさせていただきます……………!？」

「……………?」

「鉦ああああ!？」

「おお……………来示か。……………つて、うおおおう!？」

目の前を通った鉦が、玉藻さんを見て絶叫する。な、なんだ。キツネってバレたか!?

「……………ら、来示。て、てめえ……………。」

「えっ?ちよつまっ……………!」

僕の肩を鷲掴みした鉦に、驚く。か、顔が怖ええ！

「てめえ……………いつの間にこんな可愛い娘と知り合ってたんだ！しかも、今日はデートかあ！？」

「……………は、はいつ？」

「みつ、認めん！来示が、こ、こんな可愛い娘と付き合っなんて！このおおおおおおおおお！」

「おい、話を聞っ……………ひいひい！」

ぶうおおおん！

あり得ない速度で繰り出された拳を避け、情けない悲鳴を上げる。……………前から疑問に思ってたが、お前、なんちゅう腕力してんだ！

「死ね！死ね！地獄に堕ちろおッ！」

「うおッ！うおッ！うおうおおおッ！」

いきなり友達に殴りかかれる僕を見て、隣で玉藻さんが、ポカンと口を開けている。……………無理もない。

「ぬごおおおおお！許せん！許せん！『火力性 手華刀 炎刀』
抜刀おおおおおお！」

鉦の手が炎に包まれる。

60章 試着中・・・(前書き)

スイマセン・・・。

更新遅れました・・・。

60章 試着中……

「^{アクマ}魔族種!?!」

「うるせえうるせえうるせえうるせえうるせえ! 死ね! 死ね! 地獄に堕ちろ!」

手から伸びる緋刀を、僕に向かって華麗に振り回す鉦を見て絶句する。

それよりもお前っ。ロリコンだったのか!!

「よせええええええ! 真面目に死ぬ!」

「だまれえええ! 死んで償ええええ!」

「おまつ! って、うおおおっ!?!」

俺、始動。

周りで、公衆の皆様がドンびいているが、これは健全な対処。このロリコン魔を黙らせなければ身が危険だ。

まずはブレンテンを抜きロリコン魔に歩み寄る。振りかざされる緋刀を横にかわしながら、顔面に拳を軽く三発叩き込む。

「ガッ、ガッ、ガアッ!」

「まだまだあつ！」

次は上段回し蹴り。これも、首当たりに炸裂する。しかし、よろめいたロリコン魔は緋刀を収め、反対の拳を反動の力で裏拳を回してきた。

回し蹴りで浮かせた脚を地面に押し付け、軽くしゃがんでかわす。

「甘いっ！」

「チツ！」

ロリコン魔は、俺がかわし、しゃがんでいるところを、裏拳と同時に回転させていた彼の左脚で俺の脚を払われ、もう一回転させた右足で、俺の身体がふらついたところを横蹴りした。もちろん、横に吹っ飛ぶ。

顔について砂を手で払い、水凧ノ大蛇を抜き出す。……………もう、俺、キレたぞ。

莫大な魔力は出せないが、刀は操れる。上等だ。

「地獄に堕ちろ！」

「……………。」

轟音をだしながら放たれた緋刀を水凧ノ大蛇で受け止め、無言のまま、緋刀を横に流し一気に、ロリコン魔に詰め寄る。

ガンッガンッガンッ！

交わった緋刀と水風ノ大蛇が火花を放つ。競り合った。刀と刀で押し、互いに、身体を後ろに退かせ合う。そこを狙ったのか、火焰をこちらに放ってきた。

(……………見切ってやる。)

神経を集中させ、水風ノ大蛇に力を込める。目標は、たかが跳んでくる火焰。斬り消そうとすれば、いくらでも消せる。

スウウ????シャツ!

火焰の真ん中を切り裂き、消す。反対側で呆気にとられている鉈を、片手にあるブレンテンのグリップで頭を殴る。

呆気なく気絶した。

ちなみに、ベンチではワタアメ(モモマン味)をいつの間にか買ってきて食べている玉藻さんがいる。

最初は、闘る気だったくせに最終的には傍観かよ…………。

鉈を端まで引きずり、周りでおびえて逃げ腰の市民の方に、(三割ほど本当の)事情を話し、ある程度安心させるのに一時間。神崎達を探すのに30分。今日は厄日なのか?

神崎も目標を達成出来た。俺も、玉藻さんと寮に帰る。

寮に帰ると、ダンボールが玄関前に置かれていた。

「なんじゃ、これは？」

玉藻さんが不思議そうに指差す。

「多分、今度やるカジノ警備の衣装か何かでしょう」

ダンボールに近づき、箱のフタをあける。?????ブレザータイプのタキシードだった。

「ほう。なかなか似合いそうじゃないかの？刀間の」

「まさか、店員になりすまさせてことか……………？」

「それ以外、何がある」

不思議に思い、ダンボールの中を再度確認する。そうすると、奥の方に紙が置いてあった。

「『武偵局からのアツい要望により、接客用の制服をお贈りします。なお、警備の際はお客様の気分を害さないよう、この服装での警備をお願いいたします。』だ、そうです。」

「別によいんじゃないかの？」

「誰だ！僕は接客が向いてると申告した奴！ぶっ殺してやる！」

「ほれ、着てみる。」

「ぐっ……………！」

尻尾を微かに振るわしている玉藻さんが、タキシードを渡してくる。それを受け取り、仕方なく、抵抗は諦め、ホントに仕方なく、着替えるために自分の部屋に入る。

「ありえんだろ。こんな、ホステスみたいな格好……」

何考えてんだ、TCA。台場にあるカジノ運営会社。カジノに、高校生のホステスなんて犯罪だろ。人権的に。

仕方なく、着てみたらやはり、似合わなかった。

僕はこんな服、絶対着ない！

しかし、この服の繊維は防弾繊維だった。まあ、そこら辺はグッドだ。よく、武偵のことを分かっている。

「ふーむ、やはり似合っておるのう。」

「うおう！？ノックぐらいしてくださいよ！」

ドアの前で腕を組み、うんうん、と頷いている玉藻さん。今、似合っつて言ったか？この人の目は節穴か……？

「別に良からうが。減るもんじゃないんじゃないから。」

「玉藻さん。それ、あんたが言うのはおかしいですから……。」

ガガガガガガガガガガガガガガガガ！

ため息をつく、隣から機関銃と思われる銃声が連発して聞こえた。……キンジの部屋からだ。銃声と同時に、アハッ、ハハハハハハ！という、白雪のものだと思われる高笑いがある。

ついに、白雪までもが壊れたか……。キンジ、頑張れ。

61章 大気の斬撃

「ヤバい……恥ずかしすぎて死ぬ……。いつそのこと死んでやろうか……」

カジノ用の制服で魔法改造バイクを『ピラミディオン台場』の車庫に止め、キンジと待ち合わせしているアクアシティ台場の噴水前で羞恥心と戦っていた。ついさっき何か、夏休みシーズンを満喫しているらしき女子高生集団から、写メと一緒に撮らせてくれとせがまれた。

服装が服装な為、カジノのイメージに影響がでてしまうことを避け仕方なく一枚営業スマイルと一緒に写って上げた。

言っておくが……僕は変な展示物じゃない。

周りから寄せられる妙な視線を誤魔化すために携帯をイジってる振りをする。……ツライ。

勿論、水尻ノ大蛇、ブレン・テン他の武器は装備している。刀は、背中にしよっている巨大ギターケースの中に入っている。

「あ、悪い。遅れたか!？」

バカヤロウ。

「15分遅刻だボケエ」

前髪ロングのネクラが登場したところで、動く歩道を渡り、都営力

ジノ・『ピラミディオンの台場』へ入っていく。名前の通り巨大なピラミッド型をしたこのカジノは全面ガラス張り、真夏の日差しの下だと少し眩しい。

後ろから、『アイツ』の気配を察していたのは黙認だ。

カジノの2階??特等ルーレット・フロアに行くように、ここの責任者に言われた。『青年IT社長』こと、遠山キンジ氏と分かれ、目的地に向かう。

接客と言っても、ただウロウロしてればいいとのこと。客に何か訊かれたら、答えれば良いだけだ。

動物の剥製なんか飾られている豪華な雰囲気の一部で、何か大きな勝負が行われているのか、大勢の見物客たちがいる。

大きなルーレット台につく、金ボタンのチョッキを着た小柄な、その勝負のディーラーは??

「……………」
レキだ。

その集団の中に、こつちを見た美形な顔を持つ青髪の青年を発見した。??『アイツ』だ。僕の実の兄。刀間融示だ。なぜここまで着いてきた。

さつきから、ずっと着けられていた。

気付いてはいたが不思議だ。あの兄が尾行だなんて。兄貴を避けな

がら、部屋の片隅に移動する。彼を探したが、どこかに消えた。盛り上がっている集団しか見えない。

名前や携帯番号を聞いてくる、金持ちが着るようなドレスを着た美人な女性客を「仕事なのでまた後でお伺いします」と、スルーしながら周りを見渡す。

どういう訳でそうなったのかは知らないが、キンジがレキがディラーのルーレットに参加しに行った。

その時、アイツが再び姿を現した。見事に、黒いスーツを着こなしていた。さすが、イケメンだけある。

僕は、気付かれないように1Fの関係者以外立ち入り禁止とペイントされたドアを開けて中に入った彼を、追いかけるように中に入る。壁と床どちらもコンクリート剥き出しの廊下に、カツンカツン、と足音が反響する。前に、こっちに向かって手招きする兄貴がいた。黙って前に進む。

彼に着いていって、たどり着いたのは、カジノ全体が映し出されたモニターが置かれた30人程余裕で入れそうな広い部屋??警備室だ。

どうしたわけか、警備員がいない。その代わりに、兄貴、刀間融示が居た。恐怖心が、警戒心をよび、警戒心が俺をよぶ。

「あんだ……何でさっきから俺を着けていた……!!」

「そう慌てるな。僕は、可愛い弟のためにわざわざ警告しに来て上げたんだよ」

そう言い、前髪をかきあげた。顔には微笑が浮かべられている。なんだ、余裕からか？

「……………」

「知っているかい？いま、カジノホールは大パニックに陥っていることを」

そう言っつて、彼は2Fのモニターを指差した。

「……………なっ！」

そこには、大混乱に陥ったカジノホール。人間の体を持ったジャッカル男と交戦中のレキ、その武偵犬のハイマキ、青年ERT社長風のキンジ。それらが映されていた。

「今はちよつと、君には眠ってもらっただけだから。僕も、協力すべき人がいるからね」

「なっ……………何が目的なんだっ！」

「神崎アリアの身柄、及び命、かな？」

「……………！」

「おーらら。この話を聞いちゃったなら、眠ってもらわなきゃね」
そう言っつて、指をパチンと鳴らした。その刹那、身体が見えない壁に地面へ押し倒されていた。

「て……てめえ……！」

「そう、早まるな。弟を殺すほど僕も飢えてない」

俺から、僕が……！魔力、解放……！

「くっ……、……ふふあ」

いきなり、圧力の解放を受けたかのように起き上がった僕を見て、驚いたように目を見開いた。

「……知ってたのか」

「この『僕』なら知ってるよ。それぐらい」

そう。融示の魔力『アーザメルト大気の融解』の魔力は、Gが高い超能力者の粒子に触れると、弱体化及び消滅する。否、絶対的魔力のバグ。『大気の融解』は『最強』ではないと言ったこと。

今の『僕』は、推定Gは、？種超能力者から見ると38G。『僕』は、日に日に増す。

「久し振りだな。魔力を無効化されたのは。……面白いじゃねえか。来示」

「なんだ、無効化されると何にも出来ねえのか???なら、斬り倒すっ！」

ガアギイイイイインッ！

駆けて刀を振り落とした僕に対して、彼は動かないまま僕には一閃

しか見えないように手持ちの切断武器を振るった。
僕には、彼の前で光が迸ったようにしか見えなかった。

「????ツ!」

そして、手に握りしめていた水風ノ大蛇が『何か』に弾かれ、部屋の一角に飛んでいった。目の前で、恐ろしいほど、好戦的に、彼は笑っている。

「これは、知らなかったのかい?僕は、超能力だけに頼ってるわけじゃない。この、『大気アーザカッターの斬撃』と『不可視インヴィジブルの銃弾』の融合技は?」

彼は、笑顔で、恐ろしいことを口にした。

「???超能力じゃないのだから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5931t/>

～ 武偵高～ 紅い目

2011年11月17日19時02分発行